

2022 年度日本語教育センター活動報告

CJLE Program & Activity Reports (2022)

目次

1. 各科目についての報告	2
2. 2022年度 Placement Test実施報告	139
3. 2022年度日本語相談室実施報告	144
4. 2022年度立教大学漢字検定試験実施報告	151
5. 留学生による日本語スピーチコンテスト実施報告	152
6. 日本語教育センターシンポジウム実施報告	152
7. 日本語教育センターニュースレター発行報告	153
8. 短期日本語プログラム報告	153
9. 新型コロナウイルス対応まとめ	162
10. センター員活動報告	162
11. 2022年度FD記録	168

2022年度日本語教育センター運営体制

2022年度日本語教育センター会議開催記録

1. 各科目についての報告

2022 年度 J0 授業記録

コース概要

J0 は、日本語の学習経験がなく、帰国後、継続して日本語を学習する予定がないものを対象としたサバイバル日本語のコースである。

担当者名：＜春学期＞長谷川孝子、金庭久美子、神元愛美子

＜秋学期＞ a クラス：長谷川孝子、金庭久美子、武田聡子

b クラス：小林友美、イムジェヒ、小松満帆

c クラス：高嶋幸太、小松満帆、富倉教子

授業コマ数：週 3 コマ

履修者数：春学期 15 名、

秋学期 a クラス 20 名、b クラス 20 名、c クラス 17 名

使用教材：独自教材

コースの目標

日常生活に必要なサバイバル的日本語表現や語彙を身につける。また、ひらがな・カタカナの読み書きも身につける。

授業の方法

J0 では、日常生活でよく出会う場面や、大学生活を送る上で必要となりそうな機能を取り上げ、そこで使用される表現や語彙を学習した。

毎回の授業では、まず、ひらがな・カタカナを 10 字ずつ学習した。かなの練習が終わると、その日に学習する場면을提示し、必要な語彙を導入した。そして、重要な文型や表現をキーセンテンスとして学習し、口頭練習を行った。最後に、その日の場面の全体の会話練習や、タスクを行った。J0 で選定した場面・機能とそれぞれのキーセンテンスは以下の通りである。

場面	キーセンテンス
挨拶 自己紹介	おはようございます、こんにちは、こんばんは、ありがとうございます はじめまして/ (私は) ~です/~人です/専門は~です/どうぞよろしく/~ さんは~ですか? /はい、いいえ/~さんは? /お仕事は? /お住まいは? /お

	国は？/N が好きです、好きじゃありません
場所を尋ねる	この辺に～、ありますか/～はどこですか/～に行きたいんですが…
買い物	～ありますか/いくらですか/～円です/～ください
レストラン	～、お願いします/N で
許可を得る	N でいいですか/V てもいいですか
依頼する	V てください
予定・行動について話す	～に行きます/行きましょう/V ます・ました/何をしますか・何をしましたか/V たいです
感想を言う	～はどうですか・どうでしたか/形容詞・形容詞の過去形

上記の内容以外に、数回の授業が終わるごとに、「Activity」の時間を設け、日本人学生をボランティアとして教室活動に参加してもらい、それまで学習した内容の復習と応用練習を行った。また、習字や暑中見舞い・年賀状を書くなどの日本文化を体験する時間も設けた。

学期の最後には、このコースで学習した文型や語彙を用いたスピーチを行った。

2022 年度春学期はミックス型が開始したが、対面の学生は 1 名のみで、5 月 25 日以降来日し、全員対面型に移行した。日本人学生のボランティアの活動を 5 回取り入れ、実施した。ボランティアの学生はオンラインまたは対面での参加となった。

2022 年度秋学期は開始時から対面で授業を行い、以前の対面時とほぼ同じスタイルで授業を行うことができた。

結果と課題

<春学期>

15 名登録し、2 名は履修取りやめとなったが、13 名は最後まで精力的に取り組んだ。5 月に来日できたこともモチベーションが維持できた一つの理由であろう。対面になってからは一部学生の遅刻が気になったが、欠席は少なかった。ボランティアの日本人学生との活動が 5 回あったが、多くの日本人学生が参加し積極的に交流してくれたので、学生たちは活動を毎回楽しみにしており、これまでに学習した表現を用いて会話の練習をすることができた。最終スピーチはどの学生もチャレンジがあり、内容もとてもよかった。また学生同士の質疑応答も日本語でうまく行うことができた。

課題としては、オンラインの場合の文字学習である。昨年度まではオンラインであっても少人数での文字学習だったため、書いた文字を画面で丁寧にチェックすることができたが、15 名ともなるとそれは難しかった。そこで、早い段階でタイプ入力の練習を取り入れ、ひらがな、カタカナはディクテーションではなく、Blackboard でのクイズに変更した。その方法は学生には好評であったが、Bb のクイズでは文字の読みしか確認できない。そのため、学生たちの来日後ディクテーションを行うようにしたが、音を語としてとらえることが難しい学生もいた。これは語彙の習得にも関係するかもしれない。さらに、一部の学生はロー

マ字表記がない課になると、教科書の問題を読むことができず、練習に支障が出た。このようなことは対面で毎回ディクテーションを行っているクラスではあまり見られないことである。オンライン授業の場合でもいかにして早い時期に文字の読み書きができるようになるかが今後の課題である。

<秋学期>

(a クラス)

20名登録し、5名は早期帰国対象者であったが、最後まで全員出席した。J0の目標の一つであるひらがな、カタカナ学習は、継続して練習できたので、読み書きが正確にできるようになり、毎回のクイズにも一生懸命取り組み、満点が複数でるなど、成績もよく、文字の覚えが全体的に早いと感じた。会話の時間はペア学習を多く取り入れたが、ペアワークを促すとすぐに練習をはじめ、クラス活動が非常にやりやすかった。また、授業ボランティアとの会話の活動を毎回楽しみにしていた。楽しみながら学ぶことがモチベーションに繋がっていたようだ。アクティビティでは、折り紙をしたり、色紙に漢字を書いたり、年賀状を書いたりしたが、どの活動も評判がよかった。今後もし取り入れていきたい。

今後の課題は語彙の定着を図ること、課題の提出を促すこと、オンラインでのやりとりが可能な環境にすること、スピーチのビデオの扱いである。まず、語彙の定着について、読解の音読で言葉のまとまりとして読める人は少なく、一つ一つの音を確認しながら読む人が多いように感じた。負担にならない程度で語彙クイズのようなものを実施し、定着を図る必要があるかもしれない。学期の後半は、休みが多く、全出席の人は1名のみだった。コロナ禍ということもあり、日本での生活に慣れない人もいるだろうが、その結果、作文の課題が未完成で発表できない人もいた。今後はできるだけ課題が完成できるように促していききたい。そんな人が授業のあとで、作文のチェックができるようにしたいと思い、Google documentで共有にしたり、BlackboardやGoogle Formで提出できるようにしたりが、うまく活用できない学生もいた。今後はクラスで統一して出来るとよいと思う。引き続きやり方を検討していきたい。最後にスピーチを行い、フィードバックのためにビデオを見るのだが、今回のaクラスの学生は見ることを好まない学生もいた。そのようなときにどうしたらよいか検討しておく必要がある。

(b クラス)

明るく、積極的があり、協力的なよいクラスだった。また、課題や活動一つ一つに積極的に取り組み、クラス全体で盛り上がるクラスで、教師の問いかけに対しても反応がよかった。ペア・グループワークもいい雰囲気ですムーズに進行することができた。対面での複数回のゲストセッションもモチベーションにつながったようだ。

今回の課題は、かな学習、生活日本語のための授業活動の工夫、グループ学習に対する工夫である。まず、文字があまり身に付いていない学生が数名いて、課題を進めるのに時間が

かかることがあった。かな学習は、学期の中盤から後半にかけて、学習に遅れをとる履修者が数名出てきてしまい、差ができてしまったことが残念であった。今後は、かな学習が継続してできるようにゲームを取り入れるなどして記憶に残る指導を考えてみたい。また授業時には「こんな場面ではどう言えばいいか」、「こんなことを聞いたがどんな意味か」などの質問も多く、学習項目と実生活の場面を関連付けて意欲的に学習していたように感じる。今後も履修者の学習意欲につながるように、授業活動を工夫していきたい。一方、性格や学習スタイルなどにより、グループ活動より個人作業を好む履修生もいた。個々の個別性を考慮しつつ、多くの履修生が楽しめる教室活動を工夫することが必要である。

(c クラス)

1回1回の授業をきちんと大切にし自律的に復習して、ひらがなやカタカナ、表現などを吸収して使えるようになった学生がいる一方で、習ったことをしっかり覚えていない学生が多く、文字についても定着していない学生が多く見られた。日本人学生とのインタビューや最終スピーチなど活動に関しては発言を積極的に行い、またメモを自発的に取るなど意欲的に取り組み、また和やかに笑顔で行っていた。

今後の課題としては、モチベーションの維持である。学期の前半のほうでは緊張感もあったが、徐々に後半に進むにつれて、遅刻と欠席が多くなり、授業開始時にメンバーが揃っていないことがあった。注意しても改善されない学生も複数おり、クラス全体の士気に影響があった。クラスメンバーにもよるがどのようにモチベーションを維持するかが課題である。日頃の授業でも活動中心の参加型の場合は積極的に参加していたので、そのような機会を増やすなどの工夫が必要かもしれない。

2022年度 J1 授業記録

コース概要

J1は、日本語を学習したことはないが、ひらがな・カタカナは既習である学生、及び日本語学習の経験はあっても、ごく限られた知識しか持たない学生を対象とし、週5日の授業を通して、日本語での基礎的な表現を学習する初級のコースである。

コースの詳細は、以下の通りである。

担当者名：＜春学期＞富倉教子（文法1）、末松史（文法2）、東平福美（聴解会話）、
数野恵理（読解・作文）、鹿目葉子（総合スキル）
＜秋学期＞泉大輔（文法1）末松史（文法2）、東平福美（聴解会話）、
泉大輔（読解・作文）、小林友美（総合スキル）

授業コマ数：週5コマ（文法1、文法2、聴解会話、読解・作文、総合スキル）

履修者数：春学期 2名、秋学期 10名

使用教材：独自教材

コースの目標

日本語の表記や発音を含む、基礎的な能力を身につけ、買い物や道の聞き方など、日常生活の基本的な活動で日本語が使えるようにすることを目標とした。また、ひらがな、カタカナ標記、基本的な動詞や形容詞の活用、約 500 語の単語を学習することとし、各スキルのクラスでは以下を目標にした。

文法 1：名詞文、形容詞文、動詞文それぞれの最も基本的な文型、及び助詞、動詞、形容詞の基本的な活用について理解し、それらを日常生活の場面で使えるようになること。

文法 2：文法 1 で習った文型や語彙を使って、正確な短作文ができるようになること。

聴解・会話：文法 1 で習った文型や語彙を実際の日常生活の場面で使えるようになること。

読解・作文：文法 1 で習った文型が使われている文章を読み、習った文型や語彙を使って 400～600 字程度の作文を書けるようになること。

総合スキル：文法クラスで習った文型や語彙を正確に運用できるようになること。未習の語彙や文型があっても、対応できるスキルを身につけること。

文型リスト

J1 で扱った文法項目は以下の通りである。

課	文法項目
プレレッスン	<ul style="list-style-type: none"> • Exchanging greetings • Learning some survival expressions • Learning the writing system of Japanese language • Learning basic numbers • Learning basic Japanese sentence pattern(Noun sentence) • Learning basic words(Date、 Time expressions)
1	<ul style="list-style-type: none"> • Noun sentence ～は～です • Demonstrative pronoun こ・そ・あ・ど • Noun modification(kinking nouns) ～の • Particle “also、 too” ～も • Particle(question marker) ～か • Interrogatives なに・だれ・どこ • Pronominal “one” ～の • ”please give me ---“ ～をください • Counterword ① ～円、個、才、ひとつ • Sentence ending particles ～よ、ね
2	<ul style="list-style-type: none"> • Polite speech and casual speech

	<ul style="list-style-type: none"> • い／な Adjectives as predicate ～は Adj. です。 • Use 2 or 3 adjectives to describe topic て-form of adjective and sentence connectives ～が、それに、でも • い／な Adjectives as noun modifiers • Interrogatives どんな、どう
3	<ul style="list-style-type: none"> • Topic-subject construction with adjective predicates ～は～が Adj. です。 • Adverbs indicating ‘degree’ • Explaining reasons ので、から
4	<ul style="list-style-type: none"> • Verb groups、 dictionary form of verbs • Polite and casual verb sentences • Particle を(Object marker) • ～は～を V sentences • Particle で(Location marker) • Particle で(Instrument marker) • Particle に／で(Destination/direction marker) • Mimetic words ① Eating、 drinking
5	<ul style="list-style-type: none"> • Giving and receiving something ① • ～は Space/area/pass を V(motion verbs) • て form of verbs • Making requests ～てください／～ないてください • の : Noun equivalent marker • V て、V て、V。 • Asking permission/Giving permission/prohibition ～でもいい／～てはいけない • Mimetic words ② Watching、 seeing、 speaking
6	<ul style="list-style-type: none"> • ～は Object に V sentence • Topic は V(Intransitive verbs) • Particle に(Time marker) • ～から～まで • Duration on time ～間 • Approximate time/approximate quantity ごろ、ぐらい • Time expressions まえに、あとで、てから • ～と思う • ～だろう／だろうと思う • Mimetic words ③ Condition of the body

7	<ul style="list-style-type: none"> • Sentence of existence and locatives いる、ある • Counter word ② ～人、枚、冊、本、匹、階 • だけ／しか • N1 か N2(or)／N1 も N2 も(both、 neither) • N1 は A、 N2 は B(Contrast は) • Noun と／や、 Noun/adjective/verb て form、 V-たり V-たり Adjective/verb し • ～かもしれない
8	<ul style="list-style-type: none"> • V-ている(Continuous action、 state) • Verb with clothing 着る、はく、ぬぐ、かぶる、かける、する • が used to describe a condition、 scene before one's eyes • ～中(during、 while、 through) • もう／まだ • ～ませんか、～ましょう • Questions word + か／も • ～んです ①
9	<ul style="list-style-type: none"> • Giving advice ～たほうがいい • Particle に(amount of frequency per time unit) • Adverbial usage of adjectives • Noun になる • Conditional ① : と • Chang of state、 condition(adjective + なる) • Mimetic words ④ Pain
10	<ul style="list-style-type: none"> • に(final destination)／を(point of departure) • V-たことがある(experience) • Adjectives indicating one's own emotion/feeling/desire/pain • Third person's emotion/feeling/pain/desire • Conditional ② : たら • Even if ～ても

授業の方法

J1は週5日のコースであり、文法1、聴解・会話、文法2、総合タスク、読解・作文の順番に授業を行った。各スキル別の授業の方法は以下の通りである。

文法1：文法と語彙のテキストに沿いながら、パターンプラクティスを中心にした練習を行った。

文法 2：文法 1 で習った語彙や文型について、書き練習を中心とした活動を行った。

聴解・会話：聴解では、文法で学習した文法項目に関し、市販の聴解教材を適宜使用しながら聴解練習を行った。会話では、当該文法項目を使用する実際の場面を設定し、日常生活で使えるようにするための会話練習を行った。

読解・作文：隔週で読解と作文のクラスを行った。読解では、文法 1 で習った文型が使われている文章を読み、質問に答えたり、自分の意見を日本語で述べたりする練習を行った。作文では、習った文型や語彙を使って 400~600 字程度の作文を書く練習を行った。また、作文の時間には、漢字クイズを実施した（希望制）。

総合スキル：文法で学習した文法項目を使用する総合的なタスクやロールプレイ、スピーチなどを行った。また、必要に応じて聴解や読解も組み込んだ活動を行った。

結果と課題

<春学期>

文法 1：文法 1：今学期は小さいクラスであったが、学習者同士協力し合い、またそれぞれが積極的に授業や活動に参加し、全体的には和やかな雰囲気での授業を行えた。J1 とはいえ、学習者は基礎の文型などが正しく身につけていたり、また新しい文型項目も理解が早く、すぐ応用できたりと授業は比較的順調に進行できた。課題としては、どのように細部（助詞など）のミスを減らし、活用なども含めより正確な理解及び定着を図るかであろう。多くの使用例の提示や実践形式での導入、及び練習なども効果的かと考える。同時に全体を把握し、導入した新しい項目に対する応用力の高さに加え、予想以上の回答も来ることがあり、その力をもっと引き出す意味でも、より実践形式を増やしつつ、細かい箇所のフォローアップが必要かと考える。

文法 2：基本的には出席率もよく、宿題だけでなく授業中のタスクや練習にもいつも積極的に取り組

んでいた。質問、発言も多くアクティブな活動ができた。この時間では週の前半で学んだ文

法や言葉の理解を確認する時間にもなっており、授業の流れとしては、まず、

Comprehension

Check の FB をし、学生から質問のあった文法、間違っていた所を全体で確認し、重要なポイント

を共有してから教材等を使って理解度を確認するために書く練習をおこなった。まずは基本的な

文作練習をし、それから自由度の高い応用的な短文作成をしていた。二人のクラスなので

で、一人一人に丁寧に寄り添い、細かい指導ができたと思う。グーグルドキュメントを使って

授業をしていたので、学生がどこで躓くかがよくわかり、フォローもしやすかった。最後まで

形容詞の活用の定着が難しかったような気がするので、基礎練習の量を今後もう少し増やして

みようと思う。

聴解・会話：聴解会話：学生同士が仲が良く、クラスの雰囲気が常に明るかった。学生が積極的に

授業に参加しており、わからないところはいつも質問してくれたので、その都度解決して次の

ステップに進めることができた。わからない箇所をそのままにしないということはとても良い

心がけだと感じた。「聴解・会話」の授業だが、毎回文法を教える時間が多くなってしまった

ため、聴解の時間があまり取れなかったが、聴解の試験結果を見ると特に大きな問題はなかつ

た。一方、体調を崩して連続欠席してしまう学生へのフォローが難しかった。学生はコロナ禍

で学期途中に来日し、生活の基盤を整えたり、観光したり、色々とやる事が多く、その代わ

りに勉強を疎かにしたり、体調を崩してしまったように見えた。もう少し、私生活と勉強のバ

ランスについても指導すべきなのかもしれない。

読解・作文：読解作文：学期開始時は2名とも渡日できていなかったため、しばらくはオンラインで授業を行い、ミックス型を経て、5月末から対面で授業を行った。授業ではまず前の週に学習した文法項目を復習した後で、読解と作文の練習をした。1名は漢字圏の学生で、もう1名は少し学習歴のある学生だったこともあり、読解は2名とも非常によくできた。オンライン授業ではタイピングの練習もして、日本語でタイプできるようになったが、初級では手書きの練習も必要だと考え、作文は毎回タブレットを用いて原稿用紙に手書きで書いてもらった。授業では質問もたくさんして、熱心に取り組んでいたが、6月末からは猛暑と学期末の多忙さからか、2名とも体調不良で休みがちとなったのが残念であった。

総合スキル：履修者2名は、積極的に授業に参加していた。チームワークも良く、ロールプレイや

会話練習にも率先して取り組んでいた。また、日本人学生へのインタビュー調査や会

話練習では、学生がファシリテーターの役割を果たしていた。最終のプレゼンテーションでは、授業を通して学んだ文法項目やネット上のツールを使い、今までの練習および復習の成果が表現力にも現れていたと思われる。学生からは、ストレスなく学習に望め、毎回楽しく授業に参加できたと好意的な意見が聞かれた。課題としては、さらに総合的スキルの向上に向けた活動を考える必要がある。

<秋学期>

文法 1：全員が真面目で熱心な学生であり、クラスの全体の雰囲気も学期を通して終始和やかであった。また、出席率、宿題の提出率および点数、語彙クイズの点数は全体的に非常に良好であった。全員が授業中に積極的に質問し、疑問点の解消に努めている姿勢が特徴的であり、わからない箇所をそのままにしないという心掛けも見られ、学習意欲の高いクラスであったと言える。しかし、「た形」「て形」「辞書形」などが導入されてからは、活用の複雑さや導入される文法項目の多さ、授業の進む速さについていくのが難しく、プレッシャーを感じる学生もいた。そこで、「文法 1」のクラスでは、①説明する項目を絞ったうえで新出の文法項目の要点を明確にする、②クラス全体で発言をするのが緊張する学生に対しては指名する順番を後にすることで落ち着いて回答を準備してもらい、③授業後に必ず声を掛け、その日の授業における疑問点はその場で解消できるようにするといった取り組みを行った。「文法 1」は導入項目が多く、授業中の進度も早いため、プレッシャーを感じてしまう学生もいることに十分留意し、学期の序盤から各学生への細やかな目配りを行うことが今後の課題である。

文法 2：遅刻、欠席が少なく、宿題の提出率も良く、勉強熱心な学生ばかり集まったクラスだった。クラスの雰囲気は和やかで誰でも自由に質問、発言ができる教室環境であった。わからないところを放置せず、常にしっかり理解しようという姿勢が強いクラスだったため、進行スピードがゆっくりになることがあったが、その分着実に既習項目を積み上げることができた。その結果がテストに反映されているのではないかと思う。短文作成や、練習問題に取り組んでいる間、遅れをとってしまう学生や逆に早く終わってしまう学生にも机間指導で個別フォローができた。このクラスではレベル差に悩まされることがあまりなく教室活動は常に円滑だった。学生の意欲的な学習態度は最初から最後まで変わらなかったが、自由度の高い会話文作成等の練習になると、つまづくことが多かった。今後の課題としては、間違えてもいいので、どんどん挑戦していけるような教室環境を築くことである。

聴解会話：物静かな学生が多いクラスであったが、皆とても真面目に取り組んでいた。前日に新規の文法を学ぶため、そこでわからなかったものをこのクラスの授業の最初で質問するというのが定着しており、文法の復習後にレッスンごとの語彙の宿題に関するフィードバックを行って、会話、聴解という順序で授業を行った。語彙の宿題に関し

ては間違いも多く、語彙の説明をもう少し授業で丁寧に扱った方が定着に繋がると考
える。また、今回は会話に半分の時間を割いたが、会話は総合スキルの授業でも扱う
ので、もっと聴解のスキルを伸ばすことに重きを置く必要があり、その時間を思うよ
うに確保できなかった点は心残りである。次回以降、その点に気をつけて授業を組み
立てたい。

読解・作文：読解と作文のクラスはいずれも学生が熱心に取り組んでおり、学期を通して
終始意欲的であった。出席率および授業態度は非常に良く、宿題の提出状況およびそ
の内容もおおむね良好であった。読解クラスの前週の「文法」「読解・会話」「トータ
ルスキル」の授業で習った文法・語彙に関してはよく理解できていたため、教科書の
文章は問題なく読み進められていた。しかし、一部の学生は、本文中で未習の文法や
語彙を推測しながら読み進めるのが苦手なようで、文章を一字一句理解しないと先に
進められずにいた。今後の課題としては、正確な精読だけでなく、大意把握する力を
養成するためにも読解ストラテジーなどももう少し授業で取り扱っていく必要があ
ると考えられる。作文クラスでは、既習の文法や語彙をしっかりと使いつつ、教科書の
モデル文の構成に沿って丁寧に仕上げる学生が多く見られた。中には、授業で習った
項目以外にも、自分が見聞きした言葉を調べながら文章表現に取り組む学生もいた。
宿題として提出された作文を教師から個別にフィードバックすることは行っていた
が、時間の都合上、授業中に学生同士の作文を互いに読み合う機会などは設けられな
かった。今後の課題は、協働的な「読む」「書く」活動を通して読解力・文章表現力を
高めていくことである。

総合スキル：本クラスでは、学習項目の復習と総合的なタスクを行った。ペア、グルー
プワークも多く取り入れたが、クラス仲が良好であったため、学生同士が助け合う場面
が見られ、活発に活動することができた。2回のビジターセッションでは、学生ボラン
ティアとの会話活動において、積極的に日本語を使用とする姿勢が見られ、楽しんで
会話をすることができたようだ。授業後の学生からのコメントからは、本活動の満足
度が高いことが窺えた。しかしながら、課が進むにつれ、難しい学習項目が増え、ク
ラスにレベル差が出てきたため、項目の整理や口頭練習に時間を費やすことが多か
った。そこで、今後は、学習項目の復習と、運用力の向上を目標としたアクティブな
活動のバランスを考えた授業設計を意識していきたい。

2022年度 J1S 授業記録

コース概要

J1Sは、日本語学習の経験はあっても、ごく限られた知識しか持たない、あるいは文法項
目が既習であっても、運用能力が不足していると思われる学生を対象とした、初級のコース
である。週3日という少ない授業時間の中で、既習の文法項目も含め、運用能力を高めるこ
とを目的としており、週5日のJ1コースよりも、ややレベル的に上の学生を対象としてい

る。

コースの詳細は、以下の通りである。

担当者名： <春学期>藤田恵、森井あずさ

<秋学期>末松史、森井あずさ、藤田恵

授業コマ数：週 3 コマ（文法、読解・作文）

履修者数：春学期 5 名、秋学期 10 名

使用教材：独自教材

コースの目標

日本語の表記や発音を含む、基礎的な能力を身につけ、買い物や道の聞き方など、日常生活の基本的な活動で日本語が使えるよう、運用能力を高めることを目標とした。また、ひらがな、カタカナ表記、基本的な動詞や形容詞の活用、約 500 語の単語を学習し、4 技能を総合的に伸ばすことを目標とした。

文型リスト

J1S で扱った文法項目は J1 と同様であるので、省略する。

授業の方法

今年度の J1S は、週 3 コマを 14 週、計 42 コマで行った。1 課～10 課まで、各課を 3～4 コマで学習するというペースで進め、文法を 2～3 コマ、読解と作文を隔週で 1 コマずつとした。

文法、聴解・会話：文法と語彙のテキストに沿いながら、既習項目の確認とパターンプラクティスを行った。さらに、習った文型について、聴解、会話、短作文等の運用練習を行った。その際、文型の単独での使用だけでなく、複数の文型を組み合わせた練習にも重点を置いた。

読解、作文：隔週で読解と作文のクラスを行った。読解では、文法で習った文型が使われている文章を読み、質問に答えたり、自分の意見を日本語で述べたりする練習を行った。作文では、習った文型や語彙を使って 400～600 字程度の作文を書く練習を行った。また、作文の時間には、漢字クイズを実施した（希望制）。

結果と課題

<春学期>

春学期の J1S は、履修者が 5 名であり、学期開始時は全員海外からオンライン受講、その後徐々に対面受講の学生が増え、最後は 1 名がオンライン受講、4 名が対面受講のミックス型で授業を進めていった。学期途中に受講形式の変化が何度もあったが、教師も学生も柔

軟に対応し、授業を行うことができた。

一部の学生は、語彙や文法項目の自主学習が不足し、授業についていけないことがあった。これは J1S クラスの毎回の課題であり、J0 からの継続生にたびたび見られる傾向である。J0 の生活日本語の学習から、J1S の語彙や文法を積み上げていく学習スタイルへの移行がスムーズにできるように、学生には指導をしていきたい。

<秋学期>

秋学期の J1S は、履修者 10 名で開始したが、学期の終盤に 2 名が個人都合による履修中止をしたため、最終的には 8 名で授業を進めた。久しぶりに全員対面受講の形式で学期を始めることができ、全員が同じ環境で活動することができた。

意欲が高く、授業活動に熱心に参加する学生ばかりで、学生同士の助け合いがよく見られるクラスであったが、宿題とクイズへの取り組みに気持ちが向かない学生が一部出てしまった。宿題とクイズへの取り組みは、学習の成果に比例し、期末テストの結果にも影響が出た。そのため、学生には、授業活動と自主学習を両方行うことが重要であることを伝えていくようにしたい。

2022 年度 J2 授業記録

コース概要

J2 は、非常に基本的な日本語（動詞や形容詞の基本活用、語彙 500）を身につけているものを対象とする。週 5 日、毎日スキル別（文法 1、文法 2、聴解会話、読解作文、総合スキル）に授業が展開されているが、基本的には文法 1 で習う文法項目、語彙、表現を軸に他のスキルは展開されている。

担当者名：<春学期> 富倉教子（文法 1）、末松史（文法 2）、小松満帆（聴解会話、読解作文）、

神元愛美子（総合スキル）

<秋学期> 高嶋幸太（文法 1）、末松史（文法 2）、小松満帆（聴解会話）、

泉大輔（読解作文）、三浦綾乃（総合スキル）

授業コマ数：週 5 コマ（文法 1、文法 2、聴解会話、読解作文、総合スキル）

履修者数：春学期 5 名、秋学期 17 名

使用教材：独自教材

コースの目標

接続詞や接続助詞を用いた複文の作成を含む、J1 よりやや進んだ日本語能力を身につけ、日常生活に必要な簡単な会話や自分の意見伝達が日本語でできるようにすることである。語彙数については 1000 を目標に増やす。

文法 1：さまざまな接続詞や接続助詞、文末表現、時間の表現などを理解し、それらを日常生活の中で使えるようになることが目標である。初級文法の理解と口頭練習を行うことにより、アカデミック場面、日常生活場面で簡単な日本語によるコミュニケーションができるようになることを目指す。

文法 2：さまざまな接続詞や接続助詞、文末表現、時間の表現などを理解し、それらを組み合わせて基本的な複文が正確に作れるようになることを目標とする。初級文法を使った短い文を作成することで、語彙の活用、接続、助詞等の定着を目指す。

聴解会話：文法 1 で習った文型や語彙を実際の日常生活の場面で使えるようになることが目標である。日本語を数多く聞いたり、話したりすることにより、アカデミック場面、日常生活場面での簡単なコミュニケーションができるようになることを目指す。

読解作文：文法 2 で習った文型や語彙を使って、簡単な作文が書けるようになること、及び、簡単な日本語の文章が読めるようになることを目標とする。

総合スキル：文法 2 で習った文型や語彙を正確に運用できるようになることと、未習の語彙や文型があっても対応が出来るスキルを身につけることを目標とする。また、実際のコミュニケーション場面で必要とされる瞬発力を身につけ、コミュニケーション能力を高めることを目指す。

文型リスト

J2 で扱った文法項目は以下の通りである。

課	文法項目
1	1. Review (J1 sentence patterns) 2. Speaker's Volition: I think I will ~ Volitional form と思う 3. Speaker's Intention : I intend to ~ ~つもりだ 4. ~んです② 5. Mimetic words ⑤ Laughing、Crying、Anger
2	1. Can; indicating one's ability ~ことができる・可能形 2. Verb/Adjective すぎる : Overdo~/Too~ 3. て form for indicating reason why one cannot do V 理由の「~て」 4. Anything、Anyone、Anytime、Anywhere、Any Noun 何でも・誰でも・いつでも・どこでも・どんな N 5. Particle で: indicating required cost、required time 値段・時間内の「で」 6. のに: Although、Even though *Review のに、が/けど、ても 7. Mimetic words ⑥ Feelings
3	1. V-方 How to V

	<ul style="list-style-type: none"> 2. Vながら V : Doing two things simultaneously 3. Have something with/on、 possession、 own ~がある 4. Obligation: Must / Have to ~なくてはいけない／なくてはならない 5. Concession: Not have to / It is all right if it's not ~ ~なくてもいい 6. By (time) : までに / Until (time) まで 7. Mimetic words ⑦ Weather
4	<ul style="list-style-type: none"> 1. When~: ~とき~ 2. Noun が要る・役に立つ 3. Comparative constructions 比較 AはBより・Aのほうが・Aほど・~の なかで一番 4. Adverbs often used in a daily conversation せっかく ちゃんと 一応
5	<ul style="list-style-type: none"> 1. Try doing something and see: ~てみる 2. Giving and Receiving Something さしあげる・いただく・くださる 3. Noun modifiers 名詞修飾 4. Mimetic words ⑧ Nature
6	<ul style="list-style-type: none"> 1. Intransitive Verbs and Transitive Verbs 自動詞・他動詞 2. Vて ある 3. Intransitive Vている vs Transitive Vである 4. Mimetic words⑨ : Sleeping 5. Compound Verbs ① Vはじめる・Vおわる・Vやむ・Vつづける
7	<ul style="list-style-type: none"> 1. Vて おく 2. ~が V みえる・きこえる・する 3. Giving and Receiving (favors、 some acts) ~てあげる・もらう・くれる 4. Want someone to do some action: Vてほしい・もらいたい・いただきたい 5. ~が・けど (けれども) 6. Imitative words : Caught a Cold ?
8	<ul style="list-style-type: none"> 1. あいだ VS あいだに 2. Purpose in coming and going ~に行く・来る・帰る 3. い-adjectives derived from verbs Vにくい／Vやすい 4. Expressing Purpose: ために・ように 5. Review: Various expressions for purpose 6. Compound Verbs ② Vあう・Vかける
9	<ul style="list-style-type: none"> 1. 伝聞 Hearsay、 Conveying information getting from another person、 media ~そうだ・ということだ・とのことだ

	2. Vてしまう 3. Review: Vている、Vである、Vてみる、Vおく、Vてしまう 4. [Question words] か / ～かどうか 5. V1 ないで V2 without doing V1、 do V2 6. Imitative words : Hitting、 Breaking 7. Compound Verbs ③Vなおす・Vかえす
10	1. 推量の表現 ① Expressing Speaker's Guess、 Conjecture ① そうだ 2. Decisions: ～ことにする・～ことになる 3. Rules: ～ことにしている / Customs: ～ことになっている 4. 比喩の表現 Expressing Resemblance、 Figurative expressions ～ようだ・ みたいだ 5. V-て いく・くる do V and come/go 6. Imitative words : Animals、 Birds

授業の方法

読解作文（月）、文法 1（火）、聴解会話（水）、文法 2（木）、総合タスク（金）の順番に授業が行われた。各スキル別の授業の方法は以下の通りである。

文法 1：文法と語彙のテキストに沿いながら、パターンプラクティスを中心にした口頭練習を行った。毎回授業のはじめに、新出語彙を暗記しているかどうかを確認する「語彙クイズ I」を行った。また、新出語彙の理解度を確認するために「語彙シート I」を宿題にした。

文法 2：文法のテキストに沿いながら、短作文を書く練習を行った。毎回授業のはじめに、新出語彙を正しく活用、運用できるかどうかを確認する「語彙クイズ 2」を行った。また、新出文法の理解度を確認するために「文法シート」を宿題にした。

聴解会話：聴解では、文法で学習した文法項目を、市販の聴解教材を適宜使用しながら聴解練習を行った。また、毎回、各課の代表的な文型を使った文章のディクテーションを実施した。会話では、当該文法項目を使用する実際の場面を設定し、日常生活で使えるようにするための会話練習を行った。また、新出語彙の運用の正確さを確認するために「語彙シート II」を宿題にした。

読解作文：読解では、様々なジャンルの文章を読んでから、そのトピックについて簡単なディスカッションを行った。さらに、授業で扱ったものとは違うジャンルの読み物を宿題にした。作文では、文法で学習した文型を使ったモデル作文を読み、600～800 字程度の作文を書く練習を行った。また、隔週で漢字クイズを実施した（希望制）。

総合スキル：既習文法、語彙を使って四技能を総合的に使用するタスク、ロール・プレイ、

スピーチ等を行った。また、日本人学生にボランティアとして参加してもらい復習と応用練習を行った。毎回授業のはじめには、新出文法を理解しているかどうかを確認する「文法クイズ」を行った。

結果と課題

<春学期>

文法 1： 学期全体を通して学習者のモチベーションは一定して変化することなく継続し、最後まで積極的に授業、課題及び活動に臨んでくれていた。また学習者同士、授業内外で協力し合っている場面も見受けられ、授業及び活動などが円滑に進められていた。課題としては、導入した項目に対する学習者の使用（定着）である。一度に導入される量が少なくない中で、今回は平均して比較的理解度が高い学習者であったようである。そのため、より実践形式での導入、練習などを行い、新しい文型を実際に使う回数を増やすなどの工夫が必要かと考えらえる。一方2回の試験（中間、期末）では、多くの学習者が期末試験で点数を伸ばしていたことが確認されている。これはテストに慣れるなど他の要因もあるだろうが、学習者の努力と成長が窺えたのではないかと考える。

文法 2： 全体的に出席率、クラスの雰囲気もとても良く、教室での活動、宿題、課題等に積極的に真剣に取り組んでいた。授業の流れとしては、宿題・課題のFB、よく見られる間違いや、学生からの質問を全体で共有し、文法項目の理解を確認してから教材（プリント、グーグルスプレッドシート等）を使って書く練習問題を行った。それから、応用問題として自由度の高い文作を毎回行った。日本語力の問題だけでなく、アイデアを出すのが得意かそうではないかで、自由度の高い文作では、たくさん文を産出できる学生と、全く出てこない学生との差が明確に出ることが多かったので、アイデアが出やすいような導入の仕方を今後検討していきたい。また、活動が面白くなるようにと、学生のアイデアや意見を取り入れることに集中しすぎた所が反省点である。文法の理解、定着を目的とした練習の量を増やすことを今後の課題とする。

聴解会話： 学期前半は全員がオンラインでの出席だったため、なかなかアクティブな授業運営が難しい側面もあったが、途中から4名が渡日し、制限がある中でも、教室内活動ができるようになり、授業にも活気が見られるようになった。積極的に発言する学生が多く、高い意欲は見られたものの、一方で、すぐに英語使用に移行してしまう学生が複数名おり、それに他の学生も影響され、いつの間にか英語で会話をしている、という場面が何度も見られた。都度声をかけ、日本語での発話を促したが、それを受けて努力し、最終的にはかなり発話力が伸びた学生と、日本語では発言量が極端に減ってしまい、会話力が伸びなかった学生とが出てしまった。そういった学生は、口を使っての練習が足りていないことから、聴解能力の成長にも困難が見られ、聞き取りが苦手な学生が多く、期末テストでも点数を伸ばすことができなかった。日本語でな

かなか積極的に発話できない学生たちに、いかに話す環境を整えるか、その使用を促していくかが今後の課題である。また、学期途中からは1名のみがオンラインでの参加となり、教室の雰囲気とうまく共有できないと難しさもあった。今後もミックス型での授業運営を行う際には、配慮が必要である。

読解作文： 学期を通して高い意欲を保ち、授業に臨んでいた学生が多く、クラスの雰囲気はよかった。ただ、全体的に語彙が不足している学生が多く見られた。作文では、それでも積極的に調べ、使ってみる学生と、知っている語彙だけで済ませようとする学生、あるいは品詞や活用等に留意せず、調べた語彙をうまく選択できずに使用していることにより、不自然な文を作ってしまう学生とに分かれた。読解では、知らない語彙があったときに、前後から予測して読むことを意識させたが、それが実践できた学生と、語彙で躓き、文意が読み取れなくなってしまう学生とが見られた。いかに学生の語彙を正確に増やし、その運用能力を高めていくか、工夫をしていくことが今後の課題である。

総合スキル：総合スキル：このクラスは日本語の運用能力の向上を目標とし、既習文型を定着させるために4技能を使用したタスク、ロールプレイ、スピーチ、日本人学生との会話、日本人学生へのインタビュー等の活動を実施した。また文型の復習や教員へのメールの書き方等学生のニーズに合わせた活動も適宜取り入れた。今学期は教室での英語使用が目立った。学生が日本語で会話を続けようとしても、相手が英語にスイッチしてしまい会話が英語になることが多くなった。しかし、会話を続けるための方法を学び、様々な活動を通して日本語を練習し、実際に日本人学生と話すことで、徐々に日本語の発話が増えた。学期末には学習した文型の使用も増え、日本語能力が向上した。ただ、あまり使用しない表現は忘れてしまっていたようだった。必要に応じて学期前半の復習も取り入れたい。授業形態だが、学期前半はオンライン授業で、学期後半は対面とオンラインのミックス型授業だった。ミックス型授業では対面の学生たちが教室内の活動に集中してしまい、ついマイクオフのまま話し続けたり、教室にいる学生だけで会話を進めたりする等オンライン参加の学生への配慮がかかる場面が多々あった。この溝が反省点であり、次回への課題である。学生が学習に全力投球できるように配慮し、活動を考えたい。

<秋学期>

文法1： J2の文法項目は非常に多岐にわたるため、毎回の授業で提示される学習項目を飲み込んでそれらをきちんと消化していくのも一苦勞といった様子であった。また、きちんと身につけたつもりでも、課が進むにつれて既習事項が記憶からこぼれてしまう場面が多々あったため、都度該当箇所に戻り、振り返ってもらう必要もあった。学期の後半になると、真面目に学習項目を身につけようとする学生が見られる一方で、モチベーションが維持できない様子の学生も見られた。今後の課題だが、前もって予

習・復習をきちんとしていない状態で授業に出席してくる学生もいたため、ある程度の事前知識をきちんと頭に入れてきたうえで授業に臨むよう、徹底して伝えることが重要だと感じた。

文法 2： この時間では文法 1 で導入された文法の復習、文法またボキャブラリーの定着を目的に、主な活動として短文作成をした。中間テストの結果から既習文法の積み上げ、復習が不十分であるとわかったので、各課の文法が十分に理解できているかどうか確認するために **Comprehension Check Sheet** の答え合わせに時間をかけ取り組んだ。その後、理解が不十分である学生に対し、短文作成や練習問題に取り組む間、机間指導で個別フォローしつつ、理解できている学生に助けをもらい学生同士でも助け合えるように促した。最初は受身だった学生の態度も、中間テスト後は改善が見られた。教室外での学習態度にも変化があり、宿題に取り組む際に質問を準備してくる学生が増えていった。それでもやはり復習、予習の重要性を自覚していない学生が多かった印象を受ける。授業中に扱ったプリントの終わらなかつたところを課題に出していたのだが、提出率が悪かった。今後の課題としては、宿題の重要性を明確に伝え、学生が宿題をきちんと期限までに提出することを癖づけるような指導、宿題の内容、出し方にも工夫を凝らしていこうと思う。

聴解会話： 学期前半は聴解練習と会話練習を中心に授業を運営したが、中間テスト以降、文法項目の理解をより促し、運用における正確性を高めるため、聴解練習は総合スキルクラスにて行うこととし、このクラスでは、新出文型を使った書き練習を取り入れ、文法の理解を確認した後、会話練習を行うこととした。その結果、きちんと文型の意味、使用場面、活用等を理解した上で会話練習を行うことができ、また、文型や語彙についての質問を受ける時間的な余裕もできたため、学生はより積極的に自信を持ち、発話することができるようになったと感じた。クラスの雰囲気としては、会話練習を好む学生が多く、ペアやグループで積極的に話す様子が多々見られたが、一方で、正確性に欠け、活用が不正確であったり、文末が消えてしまったりというような学生も見られた。また、やはり聴解練習が不足しており、なかなか日本語だけで話そうという意欲に欠け、すぐに英語に頼ってしまう学生もいた。今後は、より進んで日本語使用を行うような雰囲気づくりを徹底していく必要がある。

読解作文： 文法・語彙といった言語知識の差に起因して、読解力および文章表現力の差にも乖離が見られるクラスであった。そのため、読解クラスは当初、問題なく文章を読み進められる学生と、一文を追うのも苦しい学生に分かれていた。理解できている学生が他の学生に教えてあげながら読解を進める様子も見受けられたが、J2 の新出項目だけでなく J1 レベルの言語知識も不十分な学生にとってはかなり厳しい状況であった。中間試験の結果を受け、学期後半は、一つずつ文法や語彙を確認する「精読」型の授業スタイルに変更した。最終的に、一文一文の正確な理解力は身につけてきたものの、未知の文法や語彙を推測しながら大意を把握するような読解指導は行えな

かった。今後の課題としては、このようなレベル差の大きいクラスにおいて、一文ずつしっかり理解する「精読」を中心とした授業と並行して、読解ストラテジーを駆使して大意を把握する読解力の養成を目指していきたい。作文の授業に関しては、文法・語彙を正確に運用する力が追いつかず、助詞や活用のミス、不自然な表現が最後まで散見されたが、「書く」こと自体は好きな学生が多いようで、提出された作文の構成や内容などは比較的よくできていた。J2 コースでは学期後半から正確な運用を目指した文法・語彙指導を行っていたため、学期前半と比較すると、J2 の新出文型・語彙を積極的に用いて書こうとする姿勢が顕著に見られ、正確な文が作文でも多く見られるようになった。今学期は受講者の人数が多く、宿題の作文を添削して返却する物の、個別のフィードバック時間を授業中に設けるのは難しかった。今後の課題としてはレベル差が大きく、受講者数の多いクラスにおいても細やかなフィードバックを行えるよう、授業の方法を模索していきたい。

総合スキル： このクラスは日本語の運用能力の向上を目標とし、既習項目を使用した総合的な活動を行った。また、スピーチや日本人へのインタビューといった活動も行った。中間テスト以降は聴解も取り入れた。今学期は学生の日本語能力にやや差があり、授業を進めるうえで、学生が既習項目をどこまで理解できているか把握し、遅れている学生にどこまでのフォローが必要かを推し量るのが難しかった。頭では理解していても、運用となると正確性が下がってしまう学生が多かったので、スピーチやロールプレイのような応用の活動というよりは、短いやり取りやゲームの中で既習項目のポイントを押さえられる活動を多く行うようにした。今学期はビジターセッションを3回行うことができた。普段の生活で英語を話すことが多い学生達にとって、日本人大学生と日本語だけで話す機会が持てたのは非常に良かった。ビジターセッション後に書いてもらう振り返りコメントには、達成感や自分の日本語を内省する様子や今後の日本語学習へのやる気が見られた。向上心のある学生が多かったものの、期末テストのインタビューでは正確性を欠いたパフォーマンスをする学生も少なくなかった。一問一答形式でターゲット文法を使って答える練習を授業内でもう少し多く取り入れるべきだったと反省している。また、日本語のミスに自分で気づいてもらうためにも、学生の発話を録音して学生自身に聞いてもらう活動も取り入れても良いと思った。学生の特性に合わせた授業づくりを今後も検討していきたい。

2022 年度 J2S 授業記録

コース概要

J2S は、J2 と同様に初級半ばの学生を対象としたコースである。但し、J2 が週 5 日で行う内容を週 3 日で行うクラスのため、J2 より若干日本語能力が上のレベルの学生を対象としている。J2 のようにスキル別に授業が展開されるのではなく、文法項目を導入した日に口頭練習、短文作成、聴解会話といった四技能の練習もしていく。

担当者名：＜春学期＞数野恵理、森井あずさ、鹿目葉子

＜秋学期＞数野恵理、末松史、武田聡子

授業コマ数：週 3 コマ（文法、読解・作文）

履修者数：春学期 2 名、秋学期 15 名

使用教材：独自教材

コースの目標

非常に基本的な日本語（動詞や形容詞の基本的活用、語彙 500）を身につけている者を対象とする。J2S コース全体の目標は、接続語や接続助詞を用いた複文の作成を含む、J1 よりやや進んだ日本語能力を身につけ、日常生活に必要な簡単な会話や自分の意見伝達が日本語でできるようにすること、語彙数を 1,000 に増やすことである。

文型リスト

J2S で扱った文法項目は J2 と同様であるので、省略する。

授業の方法

週 3 コマを 14 週、計 42 コマで行った。語彙リストの語彙やテキストの文法の予習を前提とし、授業では、それらを日常生活で使えるようにするための練習を行った。具体的には、1 課～10 課まで、各課を 3～4 コマで学習するというペースで進め、文法を 2～3 コマ、読解と作文を隔週で 1 コマずつとした。読解と作文は、隔週で行い、毎週、読解または作文を一課ずつ進めた。また、作文の時間には、漢字クイズを実施した（希望制）。

なお、2022 年度春学期はオンライン授業でスタートしたが、学生の入国に伴い、ミックス型、対面授業へと切り替え、テストも筆記テストに戻した。秋学期は学期を通して、対面で行なった。

結果と課題

＜春学期＞

2 名とも目的意識を持って熱心に取り組んだ。宿題も期日までに提出し、フィードバックをしっかりと読んで、次の課題に活かしていた。学期はじめは来日がかかわらず、時差の関係で夜中にオンライン授業を受けていた学生は集中するのが大変そうだったが、来日後の対面授業では落ち着いて勉強できるようになった。日本での生活も楽しんでいるようで、学習動機がさらに高まり、授業の雰囲気もとても良かった。1 名は学期後半にしばらく体調を崩してしまっていたが、学生、教師、双方とも最大限できることを行い、J2S の勉強をカバーすることができたと思う。

今後の課題は日本人学生との交流の機会を設けることである。良い作文を書く学生達だったので、今後は日本人学生のボランティアを呼んで、発表する機会を作りたい。

<秋学期>

コロナ禍で春学期までは特別外国人学生数が少なかったが、秋学期は学期開始時から留学生が入国できるようになり、J2Sの履修者もコロナ前を上回った。

全体的には学習意欲が高く、熱心に授業を受けて宿題にも丁寧に取り組む学生が多かった。また、質問をする際にも日本語で伝えようという姿勢の見られる学生が多かったが、中には指示がきちんと通っているか不安になる学生もおり、英語が必要となる学生もいた。

今学期特徴的だったのは、ひらがなを間違えて覚えて化石化している学生がいたことである。母国でもオンライン授業になって手書きでひらがなを書いたり、文字のフィードバックを受けたりする機会が減っていたことが原因だと思われる。対面授業に戻り、手書きの機会が増えたので、宿題や作文で仮名表記についても指導することができたのはよかった。

また、春学期の課題として挙げたことであるが、秋は日本人のボランティア学生を一度呼び、2~3名のグループで会話をする機会を設けることができた。授業時間の都合上、聴解練習、会話練習が少ないため、日本人の友達がいる学生はいいが、そうでない学生が日本語と接する機会を作る必要がある。日本語のクラスであれば、途中で英語に切り替わることもなく、作文に書いたテーマなどについて日本語で話すこともできるので、今後も学期に一度は日本人学生を呼ぶようにしたい。

なお、今学期は体調不良や個人的な悩みなどで欠席が多くなる学生が複数いた。また、1限ということで遅刻が目立つ学生もいた。オンライン授業になってからクイズを授業冒頭で行うことをやめていたが、対面に戻ったので、遅刻をさせないためにも今後はまた授業冒頭でクイズを実施することを検討したい。

2022年度 J3 授業記録

コース概要

J3 は日本語の基礎を習得している者(1,00 語程度の語彙及び初級前半の文法等)、日常生活の基本的活動(買い物や依頼など)が日本語のできる者を対象とした初級後半のコースである。週5日授業が展開され、スキル別(文法、聴解会話、読解、作文、総合スキル)に学習を行う。

担当者名：<春学期>数野恵理（文法）、東平福美（聴解会話）、沢野美由紀（読解）、
武田聡子（作文）、長谷川孝子（総合スキル）
<秋学期>泉大輔（文法）、東平福美（聴解会話）、斉藤紀子（読解）、
黄慧（作文）、任ジェヒ（総合スキル）

授業コマ数：週5コマ（文法、聴解会話、読解、作文、総合スキル）

受講者数：春学期 5 名、秋学期 13 名
 使用教材：独自教材

コースの目標

より複雑な初級文法の導入および既習の文型の運用能力向上を目指した。その中で、各スキルのクラスでは以下を目標にした。

文法：条件や仮定の表現、受身や使役などを含むやや複雑な初級文法を理解し、それらを日常生活の中で使えるようになること。

聴解・会話：文法で習った文型や語彙を実際の日常生活の場面で使えるようになること。

読解：未習語彙や未習文型が一定程度含まれている文章であっても、これまで学習した語彙や文型の知識を応用して文章の内容を理解する力を身につけること。

作文：文法で学習した文型や語彙を使って簡単な作文が書けるようになること。

総合スキル：文法クラスで習った文型や語彙を正確に運用できるようになること。未習の語彙や文型があっても、対応できるスキルを身につけること。

文型リスト

J3 で扱った文法項目は以下の通りである。

課	文法項目
1	Sentence patterns you should know for this level
2	1. 推量の表現 Expressing a Speaker's Guess、 Conjecture ② ようだ・みたいだ 2. 推量の表現 Expressing a Speaker's Guess、 Conjecture ③ らしい 3. Time Expression ところ 4. Time Expression ばかり 5. ～がえり 6. Review : Time Expressions 7. そうだ、ようだ、みたいだ expressions often used in a daily conversation
3	1. 条件 Conditional ③ ば 2. ～ずつ 3. V-ていく／くる Change 4. Change of one's behavior 5. Change of one's ability 6. Review : Expressions for talking about some change 7. Adverbs indicating various changes 8. Adverbs often used in daily conversations ③ やっぱり・実は
4	1. 条件 Conditional ④ なら

	<p>2. V-ように思う／V-ようにする</p> <p>3. V-ようにしたができなかった、V-ようにしてもできない</p> <p>4. Fraction 三分の一、五分之一</p> <p>5. Review : 条件 Conditional</p>
5	<p>1. 推量の表現 Expressing Speaker's Guesses、 Conjecture ④ はずだ</p> <p>2. Review : Various expression for Speaker's Guess、 Conjecture</p> <p>3. ～の多く</p> <p>4. ～以外、以内、以上、以下</p> <p>5. Compound Particles ① ～について、～にもとづいて</p> <p>6. Adverbs often used in daily conversation ④ 確か・とくに</p>
6	<p>1. 受身 Passive Verbs</p> <p>2. Direct Passive Sentences 直接受身</p> <p>3. Indirect Passive Sentences 間接受身</p> <p>4. 受身形 (Passive Sentences) and てもらう Sentence</p> <p>5. Compound Particle ② ～によって</p> <p>6. Sentence ending particles 終助詞</p>
7	<p>1. Giving an Instruction ～なさい・ないでください・てはいけない</p> <p>2. Imperative form Command、 Prohibition 命令形、命令、禁止</p> <p>3. Indirect Imperative : ～ように 言う／伝える／頼む</p> <p>4. Review : Expression for Cause、 Reason</p> <p>5. Compound Particle ③ ～のかわりに、～にくらべて</p>
8	<p>1. 使役 : Causative Sentences</p> <p>2. Causative Verbs VS V-てもらう／くれる</p> <p>3. ～のは～です (emphasizing)</p>
9	<p>1. 使役受身 Causative Passive Sentences</p> <p>2. Causative V-てもらう／くれる／あげる</p> <p>3. 使役受身 VS 使役-て もらう／くれる／あげる</p> <p>4. ～ことに one's feeling、 emotion</p> <p>5. Noun のこと VS Noun</p>
10	<p>1. Review : 受身、使役、使役受身、V-てもらう／くれる／あげる 使役-てもらう／くれる／あげる</p> <p>2. Introduction to 敬語 (Honorific、 humble expressions)</p>

授業の方法

J3 は週 5 日のコースであり、文法、聴解会話、読解、作文、総合スキルの順番に授業を行った。各スキル別の授業の方法は以下の通りである。

文法：文法と語彙のテキストに沿いながら、パターンプラクティスを中心にした練習を行った。

聴解・会話：聴解では、文法で学習した文法項目に関し、市販の聴解教材を適宜使用しながら聴解練習を行った。会話では、当該文法項目を使用する実際の場面を設定し、日常生活で使えるようにするための会話練習を行った。

読解：様々な長さやジャンルの文章を読み、自分の意見を述べ合う練習を行った。

作文：文法で学習した文型を使ったモデル作文を読み、800～1000 字程度の作文を書く練習を行った。また、隔週で漢字クイズを実施した（希望制）。

総合スキル：文法で学習した文法項目を使用する総合的なタスクやロールプレイ、スピーチなどを行った。また、必要に応じて聴解や読解も組み込んだ活動を行った。

結果と課題

<春学期>

文法：5月以降は3名のみ参加となってしまう残念であったが、3名は学期前半のZoomでの授業、渡日後の対面授業、どちらにも積極的な態度で参加し、課題もすべて提出した。語彙は限られていたものの既に学習したことのある文法項目もあったことから、理解が早く、運用練習もたくさんできて、日本語力が伸びた。宿題やタスクのフィードバックはBlackboardで行ったが、紙で返却する場合とは違い、フィードバックをきちんと確認していない学生もいたかもしれない。オンラインで返却する場合には、毎回、確認の時間を確保したい。

聴解・会話：授業に継続して参加した学生たちは、オンライン授業でも対面授業でもずっと真面目に学習に取り組んでいた。学生は学習した語彙や文法項目を正しく使うことに気を遣いすぎているように感じたが、その結果、会話練習でも聴解練習でも日本語が上達している様子が見受けられた。今後の課題としては、J3クラス以前に習った語彙や正確な文法の定着である。わからない語彙はもちろん、曖昧な理解にしたままの文法項目は何度聞いても聞き取れないため、新しい文法の導入と並行して復習にも注力したい。

読解：学期を通して受講したのは3名で、全員真摯に学習や課題に取り組んでいた。自分がすべきことをきちんと把握していて、落ち着いた雰囲気クラスであった。授業は、宿題の読解問題やテキストを読み込んで理解することを目的に行ったが、それらの内容を自らのことと関連させて説明できるようにした。学期開始時には一文一文は理解できても、前後関係が理解できず、まとまりとして読めなかったが、3名ともどう読めばいいのか、何がポイントなのか理解できるようになった。このレベルの文法の復習も読解を通して行うよう心掛けた。今回課題として感じたことは、個々の学生の読解力に開きがある場合、上のほうの学生の力をどう引き上げるかということ

ある。少人数のため、それぞれのレベルに合わせた進め方についてももう少し考える余地があったのでは感じている。次回はその点を配慮して進めたい。

作文：作文例の構成や接続詞、内容を参考にして、最終的には1000字程度の作文を書くことができた。受身、使役、使役受身、授受表現では、助詞や誰が誰に対して行っていることなのかに混乱が見られたが、例文作成や作文を重ねていくことで、概ね理解が深まったようだ。特に期末の作文の内容からはそれぞれの学生の成長が見られた。作文のテーマによっては、授業中のブレーストーミングで、なかなか筆が進まないこともあったが、作文の宿題を期限日までに全て提出し、全授業出席をした学生もいた。原稿用紙を使って書くことにも慣れ、原稿用紙の使い方のルールはほぼ完ぺきだった。今後の課題としては、助詞の間違いを減らし、主語と述語のねじれない文を書くなど、より正確な文章を書いてほしい。

総合スキル：授業では、文型の復習をしながら、会話で使われる表現や日本語特有の会話の流れなどを繰り返し練習した。その結果、学習者の会話力が少しずつ上達していく様子が見られた。授業前半、動詞の活用形や文型を適切に使えないこともあったが、後半はそれらの間違いも自分で修正できるようになっていった。最後まで続けることができた学生に関しては、J3の文型は既習のものが多かったようだ。しかし、学習者自身からは、「余裕を持って学ぶことができてよかった」という意見であった。日本人学生との会話、ショートスピーチなどにも積極的に取り組み、楽しみながら日本語力を上げることができたと思われる。今後も、日本語を実生活で使うことを目標に、学習者に合った練習を取り入れていきたい。

<秋学期>

文法：全体的に熱心に授業を受けるクラスで、授業中に積極的に発言および質問をする学生が多かった。J3では、学期後半に「受身」「使役」「敬語」といった難易度の高い文法項目を扱うが、最初は苦戦しながらも、各々が復習を徹底して理解に努めていた。また、このような難易度の高い文法項目を導入した後は、重点的に復習を行うべき箇所を翌日以降の担当者に連絡し、1週間を通して当該の文法項目をしっかりと理解・産出できるように教師間の連携を行った。授業中の参加態度は意欲的であったが、一部の学生は出席率、宿題の提出率があまり芳しくなく、平常点が伸び悩んだ。中間・期末試験は、難解な文法項目が多い中でしっかりと対策を行って臨む学生が多かった印象である。また、学生同士で文法項目を教え合う様子も度々見られ、協力して理解を深めようとするクラスであった。しかし、日々の授業を欠席し、宿題や課題を疎かにしたことによって試験直前の準備だけでは間に合わなかった学生も見られた。「文法」では出席率や課題点、宿題の提出率が最終成績に大きく影響するため、遅刻・欠席の多い学生、宿題の提出率の悪い学生に対して早めの段階から声掛けを行っていたが、今後はより徹底して出席および宿題の提出を促す必要がある。

聴解会話：全体的に協力的な学生が多いクラスであったが、毎回出席している学生は積極的に発言してやる気が見られる一方で、欠席や遅刻が学生も多くいた。この授業は各レッスンの語彙クイズの実施と文法宿題のフィードバックから始まり、新出語彙や新規文法の復習した後、ペアワークやグループワークでの会話練習と聴解練習を行う。語学の授業は出席することに意義があり、授業前半の各レッスンの基礎学習で語彙や文法を正しく理解し、授業後半で他の学生とその理解を深めてほしい。課題としては、基礎学習と会話練習に時間を割いてしまうことが多かったのもっとディクテーションなどを行う聴解練習に時間をあてたりと時間配分に気をつけて授業を組み立てる必要があると考える。

読解：読解は初めからかなりよくできる学生と、漢字の読みや文法の理解で引っかかってしまう学生の間に差が見られた。授業ではクラス全体の間程度レベルの学生に合わせて、読み進める速度や内容確認をするよう心がけたが、理解に時間がかかる学生にとっては少し大変だったかもしれない。宿題は前半2回は教科書の後半部分のみとし、3回目以降は追加課題も与えたが、**Blackboard** を使った提出が苦手そうな学生もおり、追加の課題が出てきていなかったり、教科書の該当箇所が間違えて提出されるということもあった。

ほとんどの学生はクラスにきちんと出席し宿題も出ており、その結果、このレベルの目指す文法項目や語彙を含む読解力の向上があったと考えるが、欠席も多く、宿題の提出も滞ることが多かった目標レベルに至らなかったことは残念であった。初回授業でまずクラスに出席をすることと毎回の宿題をため込まずにきちんと出すことの大切さをしっかり伝えるとともに、宿題の出し方をよりわかりやすく明確に伝えることが今後の課題である。

作文：最初に作文を書く際に使う重要な文型の練習があったため、意識的に新しい文型を作文に取り

入れることができていた。作文を書く前に、まずテーマに関連するトピックについて、ペアで話し合ってもらうことで、作文を書く際のアイデアも生まれるので、大変有効な時間であった。J3のクラスは熱心な学生が多く、クラスの雰囲気も大変良かった。少しレベル差があり、J3のレベルについていくことに困難を伴う学生が2、3名いたが、授業中はお互いに助け合いながら学んでいた。学期後半は、学生たちの書く力もついてきて、作文の構成も含めて、日本語の間違ひも少なくなっていたのでフィードバックは効果的だったと思われる。課題としては以下の3点を挙げる。まず、原稿用紙の使用である。授業中にアウトラインの作成を行い、宿題として作文を書いてもらい、電子ファイルとして受け取っていた。しかし、中間テストや期末テストは原稿用紙を使っていたので慣れない学生がいたため、定期的に原稿用紙を使う練習をしてもよかったと思った。つぎに、宿題の提出が遅れている学生や未提出の学生への対応である。平常点が減点されるだけでなく、教師側も学生の作文の内容を確認することができないので

今後は宿題を出してもらえよう工夫する必要がある。最後に、試験の練習を兼ねて、限られた時間内で辞書などを使わずに作文を書く練習を行う必要性を感じた。学生一人一人に合った効果的なフィードバックをするのにはどうしたらいいのかということも大事なポイントになってくると思われる。

総合スキル：このクラスでは、総合的な日本語力の向上を目指し、その週に学んだ文型や語彙などを

使い、話す、聞く、読む、書く活動を行った。たとえば、日本人ボランティアとの初対面会話、母国についての発表、学習項目が使われた動画の視聴、敬語を使ったインタビュー調査などである。使役、受身、使役受身、敬語を扱った後半に入ってから、文法項目の復習を希望する声があったため、前半は文法の復習をし、後半はロールプレイなどの活動を行った。最後まで出席をしていた学生は全員、クラスでの活動に積極的に取り組んでいた。また、オフィスアワーに復習を希望する学生が数人いるなど、日本語学習への意欲が高い学生が多かった。学生間に日本語力の差はみられたものの、仲間意識が強く、互いに学び合うことの重要性を意識している学生が多かったため、活動を進める上での困難点はなかった。今後の課題としては、適切な時間の配分と教室活動の多様化が挙げられる。後半は、文法クイズの実施、文法の復習、活動という流れで授業を進めたが、文法の復習に時間をかけてしまい、会話などの教室活動に十分な時間を確保することができないときもあった。短時間においても実施可能で、かつ意味のある教室活動を工夫する必要がある。また、今学期は、その週の文法クラスで習った文型の正確な理解と運用を最も重視したため、「未習の語彙や文型があっても、対応できるスキルを身につける」という総合スキルのもうひとつの目標はあまり達成できていないように思われる。教室活動のバリエーションを増やし、より多様な語彙、文型を、学生たちが話したり、聞いたりできるようにする必要がある。

2022 年度 J3S 授業記録

コース概要

J3S は、日本語の基礎を習得し、1000 語程度の語彙力を持ち、初級文型が既習であるが、それらの運用能力が不足していると思われる学生を対象としている。週 3 日の授業の中で、既習の文法項目を確認し、その運用練習を行い、中級へとつなげていくためのコースである。

コースの詳細は、以下の通りである

担当者名： <春学期>金庭久美子、小松満帆

<秋学期>数野恵理、森井あずさ、金庭久美子

授業コマ数：週 3 コマ（文法、運用練習、読解・作文）

履修者数：春学期 4 名、秋学期 7 名

使用教材：独自教材（J3 と同じもの）

コースの目標

より複雑な初級文法の導入および既習の文型の運用能力向上を目指した。その中で、各スキルのクラスでは以下を目標にした。

文法：条件や仮定の表現、受身や使役などを含むやや複雑な初級文法を理解し、それらを日常生活の中で使えるようになること。

運用練習：文法で習った文型や語彙を実際の日常生活の場面で使えるようになること。

読解・作文：読解では、未習語彙や未習文型が一定程度含まれている文章であっても、これ

まで学習した語彙や文型の知識を応用して文章の内容を理解する力を身に着けること。作文では、文法で学習した文型や語彙を使って、きちんとした構成で作文が書けるようになること。

文型リスト

J3S で扱った文法項目は J3 と同様であるため、省略する。

授業の方法

<春学期>

2022 年春学期は、5 月下旬まではミックス型で授業を行い、それ以降は対面で行った。1 つのレッスンに対し、1 日目は文法導入、2 日目は聴解を含む運用練習、3 日目は読解と作文のように行った。従来、教室で紙で実施していたクイズをすべて Blackboard で 10 分で実施した。また、宿題は Blackboard に提出させ、メール等で返却した。中間テストは Blackboard で実施した。期末テストのうち、文法、読解は教室で紙のテストを行った。聴解と作文は Blackboard で実施した。会話は対面で教室で行った。学習時間を確保するために、中間テストの前に Blackboard での文法と読解の復習クイズ、期末テストの前に Blackboard での文法と聴解の復習クイズを与えた。さらに、読解と作文の時間に、希望者に漢字教材と漢字クイズを与えたが、選択した者はいなかった。昨年度同様、日本語ボランティアに来てもらい、J3 クラスと合同で会話練習を 2 回行った。1 回目は第 22 回の授業時に受身の練習（有名なものや有名なところを紹介するロールプレイ）、2 回目は第 34 回の授業時に敬語の練習（敬語を使ったインタビュー）のために行った。

<秋学期>

2022 年秋学期は学期を通して対面で授業を行うことができた。授業方法は春学期と同様で、1 つのレッスンに対し、1 日目は文法導入、2 日目は聴解を含む運用練習、3 日目は読解と作文のように行った。従来、クイズはすべて Blackboard で 10 分で実施した。また、宿題は Blackboard に提出させ、返却した。中間テスト、期末テストは、全て紙媒体で実施

した。会話テストは対面で教室で行った。学習時間を確保するために、中間テストの前に Blackboard での文法と読解の復習クイズ、期末テストの前に Blackboard での文法と聴解の復習クイズを与えた。さらに、読解と作文の時間に、希望者に漢字教材と漢字クイズを与えたが、7名中4名が最後まで行い、2名がレッスン5まで合格することができた。春学期と同様、日本語ボランティアに来てもらい、J3クラスと合同で会話練習を2回行った。1回目は第24回の授業時に受身の練習(有名なものや有名なところを紹介するロールプレイ)、2回目は第36回の授業時に敬語の練習(敬語を使ったインタビュー)のために行った。

結果と課題

<春学期>

非常に熱心で、協力的で、お互いに学び合えるクラスだったと思う。どの学生も自分でスケジュールをきちんと管理しており、文法については確実に学びを進めている様子が見られた。5月に2名が来日し、4名全員が教室で授業を受けられるようになってから、ペアでの活動も活発になり、会話が上手になっていった。4名のうち2名は既習であり、最初から日本語でやりとりができたが、今までの学習内容を整理し、力をつけることができたようである。また、2回行ったボランティアとの会話では、パートナーが変わるたびに同じ話をするのであるが、1人目でできなかったことは2人目、3人目の時には改善されており、1コマの授業内で予想以上に成長が見られた。

課題は読解と作文である。1名は読解の時間によく欠席したため、テストの点数もあまりよくなかった。やはり継続して読むことは大切だと思う。また毎週作文を書くことになっているが、後半は専門の授業もあり、提出が遅れ気味であった。J3Sは同じ時間に読解と作文の両方を行うので、全部の作文を出すのではなく、作文の回数を減らして、フィードバックでリライトの時間を増やし、よりよい作文がかけるような指導を考えたほうがよいかもしれない。

<秋学期>

今学期は最初から対面で、少人数ながら同じような学力の人が集まっていたので、とてもやりやすかった。日本での生活を楽しみながら授業にも熱心に取り組む人が多く、楽しい授業ができた。ペアワークなどは積極的にいき、クラス内での会話の時間は十分に取れたと思われる。文章を書くのが好きな学生が多く、作文では与えられたテーマについて、それぞれ自分が表現したいことを工夫して書いてよかった。コロナ禍が続く中、体調を崩す人も多く、遅刻、欠席が多い学生もいたが、全員が最後まで脱落せず合格することができた。

今後の課題は、以下の2点である。日本人のコミュニティーの中に積極的に入っていく人は、生きた日本語に触れる機会は多かったと思うが、授業外で日本語を使う場面が人によっては全くないようで、なかなか日本語が身につかない人もいた。クラスでもボランティアを呼ぶなどして今後も接触場面を用意したい。また、学期に数回、自分が書いた作文を声に

出して読ませたところ、漢字の読めない学生が多かった。漢字を調べて積極的に使うのはいいことだが、覚えていない漢字は振り仮名を振ることを徹底させたい。

2022 年度 J4 授業記録

コース概要

J4 は初級修了段階の学習者を対象とした、初級から中級への橋渡しを行うコースであり、文法・文型、聴解・会話、読解、作文の 4 クラスで構成されている。このコース全体の目標は、初級で学習した文型を確実に定着させることと、複数の文型を組み合わせで使用できるようになることである。さらに J4 では、語彙を増やし、流暢さを向上させることも併せて目標としている。

各スキルの詳細は以下の通りである。

<J4 文法・文型>

担当者名：<春学期>小林友美 <秋学期>井上玲子

授業コマ数：週 1 コマ
 受講者数：春学期 4 名、秋学期 13 名
 使用教材：独自教材

コースの目標

初中級で学習した文法事項、文型を復習しながら、エッセイや会話などで頻繁に用いられる中級文型を紹介する。学生が知識として持っている文型や語彙を、日常生活の様々な場面で活用できるレベルに高めることを目指す。

文型リスト

J4 で扱った文法項目は以下の通りである。

表 J4 文法で扱った文法項目

課	Part1	Part2
1	<ul style="list-style-type: none"> ・受身 ・自発 	<ul style="list-style-type: none"> ・～は～つつある ・～は～（で／に）さえ～ ・Vさえすれば／Aさえあ（い）れば／Nさえ～ば～ ・～とすれば、～（こと）になる ・（たとえ／仮に／もし）～としても～
2	<ul style="list-style-type: none"> ・使役 ・使役受身 	<ul style="list-style-type: none"> ・～にもまして～ ・（たとえ／仮に）～にしても～ ・いくら～にしても～
3	<ul style="list-style-type: none"> ・尊敬語 	<ul style="list-style-type: none"> ・（Vた／A／Nの）まま、～ ・Vつつ～

		<ul style="list-style-type: none"> ・～はVなり～
4	<ul style="list-style-type: none"> ・謙讓語 	<ul style="list-style-type: none"> ・Vことにしている／Vことになっている ・～は～ことから～ ・～は～こととなると～ ・～は～ことなく～
5	<ul style="list-style-type: none"> ・～ようにV ・～ようにする ・～ようになっている 	<ul style="list-style-type: none"> ・～して、(考えさ／思い知ら) せられた ・(無生物主語) が～を～させる ・～は～だけではなく、～の問題だ
6	<ul style="list-style-type: none"> ・Vばかり／Vばかり／Vてばかりいる ・Nばかり／Aばかり ・Number ばかり 	<ul style="list-style-type: none"> ・～からといって、～が必ずしも～わけではない ・～ずに～ ・～のか(どうか) については～
7	<ul style="list-style-type: none"> ・～が限られている／～を～に限っている ・限りがある／ない ・V(ない) 限り／Nの限り ・V(た) 限りでは／Nの限りでは 	<ul style="list-style-type: none"> ・～原因は～ことにある／～のは～からだ ・～と～では～が異なるので～ ・～や～は～のだから、たとえ～ても～ことはない ・～や～は～のだから、もし～たら～
	<ul style="list-style-type: none"> ・Nに限って(はずがない) ・Nに限り ・V(ない)／Nに限る ・Nに限らず 	<ul style="list-style-type: none"> ・～は～ので、～ても、どうしても～てしまう ・～は～から、～のに、～と、どうしても～てしまう ・(無生物主語) が～に～を生じさせる ・～たり～たりするだけでは～ ・～は～が～であることを利用して～
8	<ul style="list-style-type: none"> ・Vよう(か) ・Vようと思う／Vようとする ・Vようがない ・Vようとしている ・Vようとししない 	<ul style="list-style-type: none"> ・～時に、～と／ても～ ・私は～て、～ことに気が付いた ・～(こと)は～(のだ)から、もし～なら～
9	<ul style="list-style-type: none"> ・N (clause) というN ・NというN／Number というNumber 	<ul style="list-style-type: none"> ・～すると、～は～が～は～ ・～する時に重要なことは、～か(どうか) ということ (よりは／ことではなく)、～か(どうか) という(点／こと)である ・～ものとして(しまう)

授業の方法

<春学期>

授業は1回に1課のペースで進行した。学期の前半は、学生たちが苦手とする「受身」「使役」「使役受身」「敬語」を中心に、複合文型を用いて復習を行った。学期の後半は「ように」「ばかり」「かぎり(かぎる)」「意向形を使った表現」「というN」などの中級文型の練習を行った。

授業では、パワーポイントや教科書の PDF を使用しながら、ターゲットとなる文型・文法項目の説明と練習を行った。そして、その日に学習した文法・文型を使用した短文作成を宿題にした。宿題は添削し、個別にメールで返却し、間違いの多かった文型については、クラス全体で説明を補足してその用法を再確認させた。

<秋学期>

毎回、翌週扱う課のテキストを授業までに読んできてもらった。授業では、テキストとパワーポイントを使用しながら、文法・文型の説明と練習問題を行った。そして、その日に学習した文法・文型を使用した短文作成を宿題にした。宿題は、授業までにメールで返却し、FB は、新しい課の練習問題をしてもらっている間に、個別に行った。

結果と課題

<春学期>

今学期は、4名の学生が履修し、全員対面参加であった。残念ながら1名は連続欠席となってしまったが、それ以外の学生は、学習意欲が高く、熱心に取り組んでいた。教師側からの説明だけではなく、学生からの質問も多かったため、学生達の理解度を確認しながらクラスを運営することができた。また、学生同士がわからない点を教えあったり、設問に関する意見交換をしたりするなど、学生の主体的なやり取りが多く見られた。

宿題では、文作りを課したが、専門の授業が忙しかった院生1名を除き、宿題の提出率はよかった。しかしながら、文法項目の理解はできていたようだが、正確さや運用面では課題があったように感じる。そのため、添削し、コメントを付けた宿題を返却するだけではなく、間違いの多かった文型については、クラス全体で説明を補足してその用法を再確認させた。今後も、学習項目が確実に身につく、実際の運用につながるよう指導方法を工夫していきたい。

<秋学期>

今学期は、特別外国人学生12名と、大学院生1名が本コースを履修した。履修学生は、課で扱う文法・文型を予習して授業に参加し、一つ一つの課題を毎回しっかりとこなしていた。また、毎回課した短文作成練習の宿題も、遅れ提出があったものの、一度も欠かすことはなかった。

このクラスは文法・文型のクラスで、クラス活動は練習問題が主であったが、学生が自由に発言や質問ができるように、机間巡視して個々の学生に声掛けするなどして、クラスの雰囲気作りを心掛けた。また、中間テスト後に学生ボランティア5名に授業に参加してもらい、日本人学生との交流の機会を設けた。J4で扱う文法・文型項目の中に、敬語が入っており、実際に敬語を使用して話す練習を行った。同じ学生同士で話をするのができ、いい機会となったようである。

学生が理解できていない文法項目については、クラス内で FB の時間を設けて説明したが、履修者が 13 名で、時間も限られていたため、学生にとって効果的な FB ができたかどうかは疑問が残る。限られた時間内での効果的な FB については、今後の課題としたい。また、宿題は自由に文作する方法で課したが、文型の意味を取り違えて文を作成した学生もいたことから、学生にとって理解が難しい文型については、前件または後件を埋める等、理解を助ける提示方法を使用したい。

<J4 読解>

担当者名：<春学期> 武田聡子 <秋学期> 黄慧

授業コマ数：週 1 コマ

受講者数：春学期 4 名、秋学期 11 名

使用教材：独自教材

コースの目標

さまざまな分野の読解教材を数多く読み、徐々に長い文章にも対応できるようにしていく。読解を通して使用語彙、理解語彙を増やすとともに、初級文型や初級語彙が使用語彙にまで高まるような練習を行う。

授業の方法

<春学期>

オリジナル教材のプレレッスンから L11 まで、説明文、エッセイ、記事、物語、新聞の内容を毎週 1 課のペースで授業を進めた。L9 と L11 を除く課では、毎週、自習の読解の予習（ワークシート）を課し、授業では読解の音読、意味の確認、設問の答え合わせ、筆者の意図や要点について意見交換などを行った。L9 と L11 は速読を行い、授業中に配布し初見で読解を行った。前週に速読の読解内容の語彙を調べておくことが宿題になっていた。すべての課でクロスリーディング活動を実施し、語彙の確認だけではなく、主要な文型を確認し、時間に余裕があるときは、例文作成も行った。毎回授業の最初に、前週の授業で扱ったリーディングで練習した前週の語彙から 10 問、正しい語彙を選ぶという小テストを実施した。最後に、総まとめとしてすべてのユニットで学んだ語彙の復習と読解の復習をし、最終日は期末テストを Blakboard を使って実施した。

<秋学期>

プレレッスンから L11 まで、説明文、エッセイ、記事、物語、新聞の内容を、毎週 1 課のペースで授業を進めた。L9 と L11 の速読の回を除く課では、毎週、次週の読解の予習（語彙調べと設問）を課した。授業の流れは以下のとおりである。まず、授業が始まったら 5 分ほど時間を設け、復習を行ってから語彙クイズを実施した。クイズは次回の授業の前に返却

し、フィードバックを行った。次に、各課の読解文に関連するトピックを提示し、クラスメイト同士で話し合ってもらった。それから宿題として本文を読んで設問に回答してもらったものをみんなで共有して確認を行った。授業の最後は、語彙クイズに関わる語彙が入っている文章をペアで穴埋めするクロスリーディングを行った。また、速読の回では、予習なしで授業中に資料を配布し、語彙を推測しながら読み進めてもらった。全体での語彙確認をしてから、設問に移り、答え合わせを行った。宿題として、毎週、読解の教材で学習した語彙から、自分が特に覚えたいという思う語彙を5つ選択し、短文を作成させた。

結果と課題

<春学期>

6人の登録であったが、実際には5人の学生が熱心に授業に参加した。そのうち、学期を通してオンライン受講が2名、教室で3名が受講しミックスの授業を行った。漢字圏出身の学生が語彙クイズでは毎回満点または満点に近い点数を出す一方、非漢字圏の学生の中でも大健闘する学生もいたが、半分程度の点数しか取れない学生もいた。教室活動では、1名の学生が自由に好きなことを発言する傾向があり、授業の本題から脱線することもあったが、クラス全体は常にいい雰囲気で行われた。クロスリーディングでは、日本語の発音や発声の練習をもう少し時間をかけてできるとよかったが、授業の最後に実施することになるため、駆け足になり、ペアで実施してそのまま終了となるが多かった。読解そのものの理解はできても、語彙や表現の意味の確認と運用は宿題にとどまっていたが、教室で各自が作った例文を紹介し合う時間があったのもよかったのかもしれない。

<秋学期>

クラスの雰囲気が大変よく、毎回のペア活動やグループ活動では、助け合いながら進めることができていた。学期始めから真面目に取り組んだこともあり、学期中盤から後半にかけて、読解設問の正解率が上がり、理解度も高まって、読む力が伸びてきたことが実感できた。

事前予習は毎回全員毎回しっかりと取り組んできていたので、授業中のディスカッションやペアワークの時間が十分確保できた。クロスリーディングは2回目以降、振り仮名がついているプリントに変更することでペアワークが順調に行われた。しかし時間が限られていたといえ、振り仮名がついていない読み物を読む練習もしておけばよかったと反省している。

学んだ語彙の短文作成の宿題についても学生たちは毎回まじめに取り組み、宿題も提出していた。辞書やネットなどから調べたものをそのまま写したりする学生はおらず、きちんと自分の言葉で短文を作っていたことが印象的だった。短文作成時に間違えた箇所について毎回フィードバックを行っていたが、どれぐらい定着したかは測定していなかった。今後は定期的にフィードバックの効果を検証する必要があると思われる。

速読の回は知らない言葉があっても前後の文脈から意味を推測する練習ができて非常に

有益な回だった。実生活では、ゆっくり調べながら読める環境ばかりではないので、今後も引き続き、速読のような練習を取り入れる必要があると思われる。

<J4 作文>

担当者名： <春学期>小林友美 <秋学期>小林友美

授業コマ数：週 1 コマ

受講者数：春学期 5 名、秋学期 12 名

使用教材：独自教材

コースの目標

初級文型、初級語彙の定着及び応用力の育成を目的とする。具体的には、初級文型や語彙を使って正しい文章（単文だけではなく、複文も含めて）が産出できるようになることを目指すと同時に、400 字程度の短い文章が適切な構成で書けるようになることを目指す。

授業の方法

<春学期>

授業はテキストとワークシートを使用し、1 コマ 1 課のペースで進めた。授業の冒頭では前週に導入した文型で短文作成をするクイズを実施した。その日の課の学習は、PPT を使いながら、ターゲットとなる表現の意味、用法を理解させた後、設問を実施し、発表してもらった。その後、各課の作文のテーマに沿って文章を書き、翌週の授業で提出させた。添削をし、コメントをつけたファイルを各自に返却し、次回の授業で、代表者に発表をしてもらった。授業前半は例文を用いて 2~3 の新出文型を導入、テキストの例文確認、文作成を行い、後半は構成に注目して例文を読んだ後、課題に沿ったパラグラフ作成を行った。少人数クラスであったため、授業では下書きを書いた後、個別のフィードバックを行い、翌週に清書を提出してもらった。また、授業の冒頭では前週に導入した文型で短文作成をするクイズを行った。

<秋学期>

春学期同様、授業はテキストとワークシートを使用し、1 コマ 1 課のペースで進めた。授業の冒頭では前週に導入した文型で短文作成をするクイズを実施したが、秋学期は、助詞の穴埋めと活用の変換の設問に変更した。その日の課の学習は、PPT を使いながら、ターゲットとなる表現の意味、用法を理解させた後、設問を実施し、発表してもらった。その後、各課の作文のテーマに沿って文章を書き、翌週の授業で提出させた。添削をし、コメントをつけたファイルを各自に返却した。授業前半は例文を用いて 2~3 の新出文型を導入、テキストの例文確認、文作成を行い、後半は構成に注目して例文を読んだ後、課題に沿ったパラグ

ラフ作成を行った。

表 J4 作文の授業内容

pre-Lesson	初級文型確認の短文完成問題。
Lesson 1 定義	①留学とは、一定期間外国へ行き、その国の学校などで学ぶことだ。 ②私が会社を辞めたことで、家族の生活が大きく変わってしまった。 ③留学は人を人間的に成長させる。
Lesson 2 意見①	①最近、日本の大学生を見ていて気づいたことがある。 ②日本の経済が悪くなったのは、日本の政治家が無能だからだ。 ③両親の「成績が一番」という考え方が、子供を非行に走らせたのだろう。
Lesson 3 分類	①私は、医者という職業を目指している人は、その目的の点から2つのグループに分類されると思う。 ②この薬には麻薬のような成分が含まれているため、服用すると眠くなる。 ③留学という貴重な経験をその後の人生に役立てたいと思う。
Lesson 4 比較・対照 ①	①日本とタイとはどちらも米を食べる国だが、日本とタイとは、その食べ方や食べている種類が大変に異なっている。 ②日本とタイはどちらも米を食べる国だ。しかし、日本とタイは、その食べ方や食べている種類において対照的である。 ③東京の生活は便利だがストレスが多い。一方、地方の生活は東京ほど便利ではないが、ストレスは少ない。
Lesson 5 根拠・判断 ①	①日本人は、間違った平等主義の方向に進もうとしている。 ②私は、日本の社会問題、たとえば「就労者の高齢化」や「若年労働力の不足」といった経済的な問題に取り組んでいる。 ③自分の能力や適性がいかせるなら、転職してもいいと思う。
Lesson 6 定義②	①運動をせずに、食べてばかりいると、太りますよ。 ②もしあなたが、自分さえよければいいと考えているとするなら、それはとてもいけないことだ。 ③困っている人に手をさしのべ、弱者を苦しめている企業に立ち向かうことこそ、弁護士の役割である。
Lesson 7 比較・対照 ②	①速さという点では、飛行機は船とは比べものにならない。 ②100%とは言えないまでも、現在では多くの国でクレジットカードが使えるようになっている。 ③現代人の生活にとって、クレジットカードは必要不可欠なものである。
Lesson 8 意見②	①その会社は給料がいい。しかも、残業がほとんどない。そのため、その会社で働きたい若者は多い。

	②私 <u>は</u> 、親が子どもをしつけるの <u>は当然だ</u> と思う。 ③両親や先生とよく相談した <u>上</u> で、日本への留学を決めた。
Lesson 9 換言・例示	「つまり」「すなわち」「いわば」「いわゆる」
Lesson 10 根拠・判断 ②	①私は、安定した給料 <u>より</u> も、 <u>むしろ</u> 自由な時間が多いほうがいい。 ② <u>いつもは節約のために自炊しているが</u> 、 <u>時には外でおいしいものを食べることもある</u> 。 ③一度約束した <u>以上</u> 、守ら <u>なければなら</u> ない。
Lesson 11 ことわざの 説明	①そのニュースは、 <u>韓国を</u> はじめ、 <u>アメリカやヨーロッパ諸国</u> など、世界中に伝えられた。 ②お金がなくても、あなた <u>さえ</u> い <u>れば</u> 、私は幸せだ。 ③日本のことわざ

結果と課題

<春学期>

本クラスは、対面2名、オンライン2名の計4名のミックス型のクラスであった。クラス仲が良好であり、発話権を譲ったり、相手に話題を振ったりと、お互いを気遣いながら、授業に参加することができた。授業中は、教師の質問に答えるだけでなく、例文や例文から発展させた話題で活発な意見交換をすることもでき、学生間の主体的なやりとりが活性化できたように感じる。また、毎回、代表者に、作文を発表してもらったが、他の学生から質問やコメントが出て、気づきや学びが多かったようだ。

宿題として、毎回、1つのテーマで作文を課したが、課が進むにつれ、難易度が高くなったため、指定された複数の文型を用いて、自分の意見を明確に表現することに苦戦していた。助詞や活用の誤用、不自然な言い回しがあったため、添削の他、口頭でもフィードバックを行った。今後は、フィードバック時間の指導以外に、作文を見直し、自分で間違いを見つけ、修正する活動や、書き直しの活動を適宜導入していきたい。

<秋学期>

秋学期は、特別外国人留学生11名、正規院生1名のクラスであった。学生の取り組み態度は概ね真面目で、体調不良で欠席した学生がいたが、課題はほぼ問題なく提出できた。文法の導入、練習では、意味や用法は理解できものの、短文作成を課すと、助詞や活用の誤用が出てきてしまうため、その都度、丁寧に解説するようにした。教師のフィードバックを活かし、改善されていった学生がいる一方で、初歩的な誤用や口語の使用が最後まで直らなかった学生がいたことが残念であった。課題としては、履修者の人数が多く、宿題のフィードバックに十分に時間を取ることができなかったことである。宿題は、添削の他、適宜コメン

トを入れて返却していたが、その他に、口頭でのフィードバックや学生間での主体的な教室活動ができるように工夫していきたい。

<J4 聴解・会話>

担当者名： <春学期>山内薫 <秋学期>保坂明香

授業コマ数：週 1 コマ

受講者数：春学期 4 名、秋学期 13 名

使用教材：鎌田修・山森理恵・金庭久美子・奥野由紀子『リアルな会話で学ぶ にほんご
初中級リスニング Alive』ジャパントイムズ、太田淑子、柴田正子他『新・毎
日の聞きとり 50 日 (上)』『新 毎日の聞きとり 50 日 (下)』凡人社、独自教
材

コースの目標

日常生活における様々な場面での聴解と会話能力の育成を目指す。相手の話すことを正確に把握し、それに対して自分の意見などを正しい日本語できちんと発表できるようになることを目標とする。

授業の方法

<春学期>

スピーチ・発表 (20~25 分)・会話練習 (40~50 分)、聴解 (25~30 分) の 3 部構成で、学生の日本語力及び理解度に応じて、時間を調整しながら実施した。スピーチにおいては、スピーチ 2 回 (テーマ：最近の出来事、旅行の思い出を伝える)、発表 (学生ボランティアへのインタビューのまとめ) を行った。会話練習は『にほんご初中級リスニング Alive』を使用し、テキストに沿って進め、学生が会話文の内容や展開を理解しながら、相手の話に適切な反応ができるように練習を行った。また、聴解では、各週のトピックについての背景知識を確認した後、音声を複数回聞き、内容に関する質疑応答を通し、理解度を確認した。さらに、毎週の宿題として、音声データを聞き直し、宿題プリントの提出及び穴埋めクイズを実施した。期末テストは、聴解とロールプレイを 2 週に分け実施した。

<秋学期>

今学期の J4-4 聴解会話クラスでは、スピーチやその準備の活動 (約 20 分)、上記教材を使用した聴解および会話練習 (約 40 分ずつ) を 1 コマの授業で時間調整をして行った。

スピーチは学期を通して 3 回実施した。初回は 3 分間で「最近の出来事」について、2 回目は 5 分間で「旅行の思い出」について発表することを課した。このうち 2 回目のスピーチは発表の録画までを宿題とし、授業時には学生同士がビデオを視聴し合いコメントと質問を記述する形式をとった。3 回目は、学生が興味のあるテーマについて日本語母語話者

にインタビューをし、結果を分析して報告する調査発表を行った。

聴解のクラスは教材の流れに沿って授業を進めた。『日本語初中級リスニング Alive』では主に会話の聞き取りをし、聴解後に内容の確認や話の流れの推測をしたり、適切な反応ができるように会話練習を行ったりした。また、当該課に関連のあるトピックのロールプレイも実施した。『毎日の聞きとり』ではモノローグの聞き取りをし、内容質問で理解を確認した。その際、聴解の前作業として語彙や背景知識の確認、後作業として関連話題の話し合いを取り入れることもあった。

宿題はクラスで扱った音声を再度聞き、補完問題に答える内容で、翌週に同じ音声を用いて小テストを実施した。期末試験は、聴解とロールプレイを別の日に実施した。

結果と課題

<春学期>

学生3名（対面2名、オンライン1名）のクラスであった。ミックス型授業（対面授業のオンラインによる同時配信）であったが、学生は互いの状況を気遣いながら、大変協力的に授業に取り組んでいた。3名とも自発的に発話を行う学生で、学生間のインターアクションも活発に行われた。また、オンラインの学生は8時間という時差により早朝からの受講であったが、他の学生とともに、学期末まで学習意欲を保ちつづけている様子が窺えた。インタビュー活動及び発表においては、学生ボランティアに複数回多数参加してもらうことができ、日本語運用の機会を十分に活用していた。

本レベルの教材は、3名にとっては多少難易度が低く、特に会話練習で用いた『にほんご初中級リスニング Alive』においては、展開を迅速かつ的確に掴むことができるとともに、ロールプレイでは話題を豊富に膨らますことができていた。一方、聴解においては、詳細な箇所の内容まで聞き取れていたが、宿題プリントの提出及び穴埋めクイズでは促音や長音の箇所でのミスが見られた。上記の点は、聴解を含む他の活動においても、各自で注意するように促した。

期末テストは、3名とも授業での成果を発揮できた結果となった。今回は3名にとって、共通して教材の難易度が低かったため、口頭での表現の機会を増やしたり聴解の質問を広げ、調整を行った。今後も、教材の難易度があった場合の効果的な学習方法について考えていきたい。

<秋学期>

全体的におとなしい雰囲気の中で、日本語学習に熱意はあるものの、積極的に発言する学生は限られていた。また、学期前半に比べると、後半に意欲が低下したとみられる学生が数名おり、こうした積極性や取り組みが期末試験では結果として表れたように思われる。調査発表の質問作成やインタビュー活動、結果の分析など、自分自身で内容を深め、チャレンジできる課題に対し積極的に取り組んでもよかったように思う。意欲や問題意識の向上

のために、学生の産出したものに、フィードバックを多く与えたが、その後に改善がみられないこともあった。今後フィードバックの内容や方法を工夫したい。

日本語能力の面においては、聴解を不得手とする学生が多いように見受けられたが、使用した聴解教材は、今学期の学生にとってやや難しい内容だったかもしれない。このため聴解前の説明や準備に時間を要し、教材にある内容を十分に扱うことができないこともあった。時間調整と配分は課題だが、背景知識の活性化や基礎的な問題の聞き取りなどは宿題にして、それをもとに授業活動を充実させてもよかったように思う。

会話の活動では、クラスメートや日本語母語話者の学生と楽しんで話す様子が見られた。スピーチスタイルの違いも概ね理解し、場面に合った形式で話すことができたが、文法や語彙の不正確な産出がみられた。2回目の発表をビデオ形式にしたのは、発話をモニターすることが目的の一つであったが、正確性の向上に十分には繋がらなかったようである。聴解・会話クラスにおいても正確性を高められるような授業内容を検討していきたい。

2022年度 「J5～J7 文法・文型」授業記録

コース概要

J5～J7の文法・文型科目は、中級前半から中級後半あるいは上級前半レベルの文法や文型を習得していけるように設計されている。それぞれのレベルとも週1回の授業であるため、学生が授業外にも学習できるよう、宿題を課している。

J5のレベルにおいては、日本語能力試験N2レベルの文型に焦点をあて、初級の文型を応用しながら、進出の文型も着実に身につけていくことができるような教材、教室内活動を実施している。J6のレベルにおいては、日本語能力試験N2、N1レベルの文型に焦点をあて、論文作成や読解等に必要とされる高度な文型を習得していくための教材、教室内活動を実施している。そして、J7のレベルにおいては、引き続き日本語能力試験N1レベルの文型を導入しながら、さらに、日本語の文章を文法的に分析していく力を身につけられるような教材、教室活動を実施している。

各レベルの詳細は以下の通りである。

<J5 文法・文型>

担当者名：<春学期> aクラス：小森由里 bクラス：小松満帆
<秋学期> 長島明子

授業コマ数：週1コマ

履修者数：春学期 aクラス6名、bクラス4名、
秋学期 16名（うちNEXUS 4名）

使用教材：独自教材

コースの目標

初中級で学習した文法事項、文型を復習しながら、エッセイや会話などで頻繁に用いられる中級文型を紹介する。学生が知識として持っている文型や語彙を、日常生活の様々な場面で活用できるレベルに高めることを目指す。

文型リスト

J5 で扱った文法項目は以下の通りである。

課	助詞相当語	文型
1	～のかわりに、～について、～によって、 ～に比べて、～に基づいて	こ・そ・あ・ど Expressions
2	～に関して、～を問わず、～に応じて	と／ば／たら／なら Expressions
3	～に反して、～に対して、～において	こと Expression1
4	～に従って、～に沿って	こと Expression2
5	～に際して、～につれて	もの Expression1
6	～にとって、～に先立って	もの Expression2
7	～に渡って、～に代わって	Time Expressions
8	～にあたって、～に伴って	わけ Expressions
9	Adverbs used in daily conversations せめて、さすが (に)、やはり (やっぱり)、どうせ、つくづく	
10	「量が多い」ことをあらわす表現、 「よく」の使い方	

授業の方法

<春学期>

(a クラス)

授業は1回に1課のペースで進めた。各課で多数の文法項目・文型を扱うため、教科書以外に、形式・意味・運用上の注意点をまとめたハンドアウトを配布し、文型の意味や用法を説明した。毎回、教科書の次の課のわからない言葉の意味を調べ練習問題を予習するよう促した。また、授業で導入した文型や表現を用いて短文を作成することを宿題にした。提出された宿題シートには注意点を書いて返却しフィードバックを行った。学期の半ばで中間テ

スト、学期末に期末テストを実施した。

(b クラス)

毎週1課のペースで授業を進めた。授業では、パワーポイントを使用しながら、文法・文型の説明と練習を行った。文型の導入においては、他の類似文型と比較しながら、文型の意味や使い方をわかりやすく示すことを心がけた。毎回の宿題では、その日に学習した文法・文型を使用した短文作成を行った。

<秋学期>

毎回、翌週勉強する課の文法項目と説明を読んで、**Comprehension check** をやってくることを予習に課した。授業は1回に1課のペースで進めた。クラスではパワーポイントを使い、文型の意味、使用場面、接続の形、注意点などを説明し、必要に応じて類似文型・表現との違いを説明した後、テキストの例文を読んで、意味を確認した。例文は、テキストの他に、そのときに話題になっているできごとや学生の関心のあることなども使って提示した。その後、学習した文型を使って、簡単な文作成や文完成問題をした。課の中の**Comprehension check** や **Review** はグループで答え合わせをした後、全体で再度確認した。毎回、学習した課の文型を使った短文作成や文完成問題を10程度宿題にした。翌週、複数の学生が間違った箇所等を全体にフィードバックした。個別フィードバックは宿題用紙に記入し、必要な場合は返却人に個別に話し合った。

結果と課題

<春学期>

(a クラス)

6名が履修したが、全員入国していたため、初回からすべての授業を対面で行うことができた。履修生は真面目で熱心な学生ばかりで、全体的に出席率も宿題の提出率も高かった。授業は、教師からの一方的な文法説明にならないよう、練習問題の答え合わせなどにはできるだけピア活動を取り入れるよう心掛けた。おとなしい学生が多く質問が少ないため、新しく導入した文法項目が理解できているのか不安になることがあった。中間テストは総じて高得点だったが、期末テストは点数にバラつきが見られ、新しい文法項目が十分に身につけているわけではないことがわかり残念であった。

今後の課題として、授業中の学生と教員との距離が挙げられる。授業中の学生からの質問は少なかったが、実際は質問したいがクラスではしにくかったようである。コロナ禍の対面授業だったため学生との距離を保つよう気を配っていたが、ピア活動の際などにもう少し距離を縮めれば、学生が気軽に疑問点について質問できたのではないかと思われる。

(b クラス)

今学期も明るく積極的な学生が多く、よい雰囲気クラスが進められた。学期の初めには入国前の手続きや健康状態などにより欠席の続く学生もいたが、その後は全員が最後まで授業に出席した。また、4名中3名が学期途中に渡日し、ミックス型で授業を行うことになったが、オンラインで参加している学生に対する配慮もきちんとなされ、オンラインの学生も積極的に発言し、ミックス型でも完全対面／完全オンラインのクラスと同様に、互いに刺激し合う、よい環境で授業が展開できた。

一方で、課題も見られた。類似文型について、多くの例文を挙げながらその違いを説明し、学生も理解できてはいたが、実際の場面で文脈に沿って文を作ろうとすると、どの文型を使うか選べなかったり、間違ったりする場面が見られた。授業で扱う文型の数が多いので、きちんと整理できないまま次の課に進んでしまう学生もいたことから、今後はさらに予習復習を徹底させ、きちんと消化しながら先へと進むことを促していく必要があるだろう。

<秋学期>

結果と課題

意欲的に授業に取り組んでいた。出席状況も宿題の提出状況も良好で予習もやっていたので、授業は円滑に進められた。理解力も高く、学習項目の定着度は高かった。宿題の短文作成はコース開始当初はテキストの例文に似たような文を作る学生が多かったが、回が進むにつれて、自分の専門分野や、中級レベルの語彙や表現を用いた文を作成するようになっていった。日々の努力はテストや成績に如実に現れた。ただ、形式名詞や副詞に関する問題に間違いが見られたので、今後はこれらを正しく理解し運用できるよう、授業を工夫したい。

<J6 文法・文型>

担当者名：<春学期>小林友美 <秋学期>鹿目葉子

授業コマ数：週1コマ

履修者数：春学期6名、秋学期13名

使用教材：独自教材

コースの目標

日常会話や小説などで用いられるやや高度な文法、文型を理解する。

文型リスト

J6で扱った文法項目は以下の通りである。

課	文型
1	「理由・目的の表現」

2	「感情・心情・評価の文型」
3	「不快・非難・軽蔑の文型」
4	「判断・理性的評価を表す文型」
5	「推察・推量を表す文型」
6	「人や物の状態・性質を表す文型 1」
7	「人や物の状態・性質を表す文型 2」
8	「義務・当然を表す文型」
9	「その他の文型 1」
10	「その他の文型 2」

授業の方法

<春学期>

授業は1回に1課のペースで進め、毎回、翌週授業で扱う課の語彙、表現の意味調べを予習とした。教科書の例文で、文型の意味、接続、用法について、Q&Aをしながら確認した。また、難易度が高い語彙については、その都度読み方と意味を確認した。教科書の問題以外に、教師作成の前件後件作りや簡単な文作成問題を実施した。毎回の宿題では、その日に学習した文法を使用した短文作成を課した。

<秋学期>

毎週1課のペースで授業を進めた。授業では、パワーポイントを使用し、教科書内の文法・文型の説明と他の資料を使って補足説明も行った。また、似たような文型を教える際、表で提示し、その後、学生個人で復習・確認できるようにpdfとして配布した。さらに、教科書内の例文を選択して読んでもらい、その意味と文型の使い方を確認し、各文型を使った簡単な練習問題を行った。毎回の宿題では、その日に学習した文法・文型を使用した短文作成を行った。

結果と課題

<春学期>

学期前半はミックス型の授業であったが、学期途中から全員対面参加となり、学生間のやりとりがスムーズに展開された。連続欠席の履修者が1名いたのが残念であったが、その他の履修者は、出席率、課題提出率が良好であり、熱心に取り組む学生が多かった。扱う項目が多く、類似表現も多かったため、学習項目に優先順位をつけて授業設計をするなど工夫をしたが、実際の授業では計画通りに進められなかった項目もあった。そのため、毎回の宿題を丁寧に添削し、理解を確認するようにした。はじめはターゲットの文法を使用することに重きを置いた簡単な文が多かったが、回を重ねるごとに、場面を意識した文作りができるようになっていった。今後も、学生が実際に使える場面を想定し、運用につながるように工夫

していきたい。

<秋学期>

学問に対して真摯な態度で取り組み、規律性を持った学生達であった。知りたいことや疑問に思うことがあると、授業中や授業後に質問をした。昨年の反省を踏まえて、文法の相違点を説明する際は可視化した。しかし、詳細に文法を教えようとしたことから、やや情報量が多くなってしまった。いかにポイントを絞って教えるかが今後の課題である。

<J7 文法・文型>

担当者名：<春学期> 井上玲子 <秋学期> 長島明子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 16 名、秋学期 17 名

使用教材：独自教材

コースの目標

文学作品や専門的な雑誌記事、さらには公式なスピーチなどで用いられる高度な文型や表現を理解し、自分の会話や作文で流暢に使えるようになることを目指す。

文型リスト

J7 で扱った文法項目は以下の通りである。

課	文型
1	Lesson 1 「ながら、まま、つつ」
2	Lesson 2 意向形を使った表現／語彙とニュアンスの似ている表現
3	Lesson 3 「ところ」を使った表現／語彙とニュアンスの似ている表現
4	Lesson 4 「まで」を使った表現／とりたての助詞
5	Lesson 5 「時」を表す文型 1／似ている意味の使い分け
6	Lesson 6 「時」を表す文型 2／まとまりで覚えたほうが良い表現
7	Lesson 7 「時」を表す文型 3／覚えたほうが良い表現
8	Lesson 8 「時」を表す文型 4／覚えたほうが良い表現
9	Lesson 9 複合動詞／覚えたほうが良い表現
10	Lesson 10 副詞の呼応／覚えたほうが良い表現

授業の方法

<春学期>

毎週 1 課のペースで授業を進めた。毎回、翌週扱う課を読んでおくこととし、授業では、

まずグループで文型の意味、接続、用法の確認をし、練習問題をしてもらった。次に、全体で文法・文型の説明を行い、練習問題を全体で確認した。文法・文型の補足説明ではパワーポイントを使用した。毎回の宿題では、その日に学習した文法・文型を使用した短文作成を行った。

<秋学期>

授業は1回に1課のペースで進めた。クラスではパワーポイントを使い、テキストに沿って、文型の意味、注意点、似ている文型・表現との違いなどをテキストの例文を使って説明した。5課～8課の「時を表す文型」には意味が類似しているが用法が異なるものが多く出ているので、相違点を詳しく説明した。その後、補足説明や簡単な文完成練習を行った。各課の練習問題はグループで答え合わせをした後、全体で再度確認した。毎回、学習項目の文型・表現を使った短文完成問題を10程度宿題にし、翌週、全体でフィードバックした。J6までの文法項目で忘れてしまったものもあったので、それらも合わせて復習した。個別フィードバックは宿題用紙の中にコメントを入れた。

結果と課題

<春学期>

今学期は、特別外国人学生5名と正規学生11名の合計16名が履修したが、2名が出席しなかったため、14名のクラスとなった。学期の初めは日本に入国できなかった学生もいたため、対面とオンラインのミックス型でスタートしたが、5月末には、全員が入国し、教室に揃って学習できるようになった。

毎回課した短文作成の宿題も時には遅れ提出はあったものの、出席者は一度も欠かすことなく、課題に取り組んだ。このクラスは大人しい学生が多いクラスではあったが、クラス内の活動や宿題に真面目に取り組む、教師の指示にすぐに従うなど協力的で、授業運営がしやすい真面目なクラスであった。

昨年度は学期の後半から扱う文法・文型が多くなり、課によっては十分な練習時間を取れず、次回に持ち越すこともあったことから、今学期は予め学生と一緒にテキストを見ながら扱う文法・文型を確認し、再度予習を促した。予習をできていない学生もいたようだが、学生同士で確認する時間や全体で確認する時間を決めて行った結果、翌週に持ち越すことなく、スケジュール通りに進めることができた。ただ、今年度も履修学生からテキストの後半の文法・文型が難しかったという意見があったので、限られた時間の中で、特に課の後半の文法・文型の確認をどのように行うか、文型の取り扱い方や時間配分を引き続き検討していきたい。

<秋学期>

履修登録者のうち、2名は全く出席しなかったため、実際の受講者は15名だった。全員熱心に勉強に取り組み、出席率も高かったが、コースの後半に体調不良で欠席し宿題の提出が遅れ気味になった学生が数名いた。宿題の短文作成では、学習項目だけでなく既習の文型や表現も使っており、よく考えたことが窺われた。その成果はテストや成績に現れた。ただ、学習項目はよく理解し、正しく使えるものの、語彙が不適切な場合が時々見られた。これはネットで調べてそのまま使ってしまう文に合わないためだと思われる。この点を今後の課題とし、適切に使えるよう授業を工夫したい。

2022年度 「J5～J7 読解」授業記録

コースの概要

J5～J7の読解は、様々な分野の読解教材や生教材を読み、内容を正確に理解し、用語や表現を増やすとともに読むスキルを意識化する活動を取り入れて授業を展開している。

具体的に、J5、J6では説明文、エッセイ、新聞記事、小説など様々なスタイルの文章を取り上げ、読むスキルを獲得する。また、用語や表現を増やし、要約やディスカッションを行なう。J7では、より長い文章を読み、内容理解をした上で要約したりレジュメを作成したりすることを目指す。各科目の詳細は次に示す通りである。

<J5 読解>

担当者名：<春学期>数野恵理 <秋学期>高嶋幸太

授業コマ数：週1コマ

履修者数：春学期9名、秋学期7名

使用教材：独自教材

コースの目標

様々な分野の読解教材を数多く読み、内容理解する事ができるようになることを目標とする。また、徐々に長い文章にも対応できるようにしていく。読解を通して使用語彙、理解語彙を増やすとともに様々な読むスキルを学ぶ。

授業の方法

<春学期>

学期開始時は渡日前の学生もいたため対面とオンラインのミックス型、5月後半からは対面授業で進めた。宿題は読み物と内容理解、意見述べるワークシートをBlackboardに提出させ、漢字語彙クイズはBlackboardで実施した。授業では宿題の答え合わせから始めた。まずグループに分かれて音読、内容確認、ディスカッションをして、次に全員で確認したり意見交換をしたりした。さらに、制限時間内に同じテーマの別の読み物を読み、内容理解とディスカッションを繰り返した。また、2種類の読み物を分担して読んで、お互いに説明し

合う活動も行なった。学期末のテストはオープンブックのペーパーテストにしたが、入構制限でキャンパスに入れない学生はオンラインで同じテストを受けた。

<秋学期>

さまざまなジャンルでの読解ができるよう、ウェブニュースや新聞の投書、新書、短編小説などの文章を扱った。授業中での読解だけでなく、宿題として事前に課題を提示して自主的に読解をしてもらうようにしたり、漢字クイズを毎回の授業で実施することで、読解に必要な語彙力も同時に伸ばすようにしたりもした。

結果と課題

<春学期>

今学期の「J5 読解」は「大学生の日本語 B5 (異)」が併置されており、履修者 9 名のうち 6 名が「大学生の日本語 B5 (異)」を履修する初年次の正規学部生だった。

宿題は授業開始時間までに Blackboard に提出させていたため、授業前に学生の理解度を確認することができてよかった。漢字圏の学生は読むスピードは速いものの、読み物の内容をまとめて報告したり感想や意見を述べたりさせると日本語が不正確な学生もいたが、毎回何か書かせてフィードバックするようにした。

今学期は辞書やオンラインツールを使わずに読む練習が少なくなってしまったが、今後、授業時間内に読ませる際は何も調べずに推測して読ませるようにしたい。

<秋学期>

履修者が 7 名であったため、ピア・リーディングやジグソー・リーディングなどさまざまな形式での読解をするうえで、ちょうどよいクラスサイズのように感じた。学生もただ文章を読みこむだけでなく、内容を確認したり、説明したりすることで、理解を深められたように思われる。また、履修者は毎回の宿題をきちんとできてきたため、クイズの成績もよく、読解のスピードも速くなっていったように感じた。

今後の課題としては、どうしても読解だけだと単調になってしまうことがあるので、関連する映像資料や音声資料なども同時に提示できれば、より読解のモチベーションにもつながるのではないかと感じられた。

<J6 読解>

担当者名：<春学期>鹿目葉子 <秋学期>武田聡子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 4 名、秋学期 13 名

使用教材：独自教材

コースの目標

新聞記事や小説など様々な分野の読み物を読み、内容理解する事ができるようになることを目標とする。読解を通して使用語彙、理解語彙を増やすと共に、様々な読むスキルを学ぶ。また、文章のポイントを押さえた要約ができるようになることも目標とする。

授業の方法

<春学期>

読解教材として、説明文、エッセイ、新聞記事、小説など様々なスタイルを取り上げた。授業では、各スタイルにおける読解ストラテジーの習得、ストラテジーを用いた読みのスキルの学習や読解文の内容理解、読んだ内容に基づいたディスカッション、また、「私の好きな小説」や自国の「オーバーツーリズム」について調べ、発表を行った。毎回、読み物を読んで質問に答え、語彙を調べてくることを予習として課した。授業では、冒頭に語彙クイズを実施し、クイズの実施方法として **Blackboard** を使用した。活動としては、ペアで読んできた内容の確認と質問の答え合わせを行い、全体でディスカッションを行った。分担読解の際は、読んできた内容について、自分が担当した読解内容をクラスメイトに伝えるという活動を行った。期末テストは紙媒体を使って実施した。

<秋学期>

説明文、意見文、新聞記事、小説など、さまざまな読解教材を取り上げ、読解のストラテジーを意識して読む練習を行った。毎回、読み物を読んで内容確認問題に解答して **BB** にアップロードしておくこと、語彙調べをしておくことを予習として課した。授業の最初に漢字語彙クイズを実施した。クイズ実施の方法は、紙で配布し終わった人から提出してもらった。授業活動としては、黙読、音読、内容確認のための質疑応答、要約、分担読解などを実施した。分担読解はグループになり、まず自分たちの担当した読解の情報交換をしてから、別の読解を担当した人とペアになって情報交換をするようにした。期末テストは教室で紙による読解テストを実施した。

結果と課題

<春学期>

履修者数は4名であり、アットホームな感じだった。学生らは授業に熱心に取り組み、積極的な姿勢で学んでいた。特に、ディスカッションは白熱した。振り返りでは、学生から「様々な読解文を通して新たな知識が得られた」、「毎回のディスカッションを通して異なる考え方が学べた」、「批判的にものを見ることを学んだ」というポジティブな意見が挙げられた。また、自分の意見をクラスメイトに聞いてもらえたことが嬉しかったという学生もいた。

今回の授業を通して、「読解」という授業は、文章を読み、内容を理解することに注力するのではなく、読んだ内容を理解し、相手に自分の考えを伝え、新たな知識と考えを獲得す

るための活動を行うことが大切だとわかった。今後の課題として、学生が獲得した新たな知識と考えを社会に結び付けていけるような授業作りをしていきたい。

<秋学期>

今学期は13人の履修者がいたが、1名、1か月経ったところから欠席が続き、その後呼びかけに応じ1回は出席したが、後半はすべて欠席。履修科目が多すぎるという問題があったとのことだった。他の学生はおおむね出席率が高く、漢字語彙クイズは全員が8割以上正解するなど毎回高得点であった。予習や課題もきちんとしており、授業中のグループ活動やペア活動も活発に意見交換し、いい雰囲気で授業を進めることができた。オンラインで活用していたツールの一つであるPadletを引きつづき活用し、授業の最初のウォーミングアップで近況をシェアしたり、リアクションペーパーを書くのに活用した。利点としては、クラスメートが書いたものを横並びに読むことができるので、自分以外の意見を容易に知ることができた。マスクを着けたままの授業運営には多少の不安もあったが、早い段階で学生同士情報交換がすすんだようで、授業後または休みに一緒に過ごす学生たちがいるようで、和気あいあいとした雰囲気が授業外でも感じられた。1名オフィシャルではない早期帰国でテストを受験できずせっかくそれまで出席し、課題もこなしていたのに、期末テストを受けなかったことで単位は取得できなかったのが大変残念であった。期末テストを受験した11名は7割以上の成績おさめることができた。今後の次のレベルの読解授業を履修し、継続的に日本語学習を続けてほしい。

<J7 読解>

担当者名：<春学期>藤田恵 <秋学期>黄慧

授業コマ数：週1コマ

履修者数：春学期9名、秋学期15名

使用教材：独自教材

コースの目標

新聞記事や小説などの長文を読み、内容理解する事ができるようになることを目標とする。長文の読解を行い、語彙を増やすと共に、様々なスタイルの文章に触れて、読みのスキルを伸ばす。また、新聞記事の要約ができるようにする。

授業の方法

<春学期>

授業では論文、新聞記事、論説文、随想、小説等様々なジャンルの文章を扱った。読む前の活動と1回目の読みの活動を前週の授業後半に行い、次週までに再度文章を読み、内容確認問題への解答、文章の要約、レジюме作成などの課題を課すようにした。次週の授業では、

文章の内容確認を行った後、口頭発表やディスカッションなどの活動を行った。

<秋学期>

前半は、論文、新聞記事や天声人語の内容理解と要約練習、後半は随想、論説文、小説の内容理解を中心に授業を行った。

授業は基本的にまず当日扱う資料に関する背景知識について簡単に紹介し、グループで話し合いを行った後、読解資料を読んで内容を確認していく形をとっていた。

論文の読み方は市販教材を使用し、読む際のポイント、気を付けるべき点などを確認した。授業中にはそれぞれの専門分野でどのような論文を読んでいるのか、自分の専門分野の論文と教材のモデルとどのような違いがあるのかなども話し合った。

新聞記事の読み方は市販教材を用いて説明したあとに内容理解を行った。宿題として興味関心のある新聞記事を探して読み、その内容を要約してもらった。読んで理解するだけでなく、要約することで内容理解を促進できた。要約の練習は天声人語を扱う回でも行った。

随想、論説文、小説の内容確認の際には、ペアまたはグループ活動を取り入れた。ジグソーリーディング、再話などを取り入れて内容理解を深められるように工夫した。ペアワークやグループワークが終わってからは、ワークシートで各自確認し、その後、全体確認をした。母国との違いなども含めて自分の考え方や意見を簡潔に伝えられるような練習もしてもらった。

結果と課題

<春学期>

春学期の「J7 読解」は、9名の履修登録者がいたが、実際の出席者は7名であった。漢字圏と非漢字圏出身の履修者がいるクラスであったが、非漢字圏の履修者も読みの活動に特別な配慮なくついてきていた。

履修者全員が日本語でのレポート作成と、論文作成を控えていたため、今学期はレポート、論文作成に向けた読み物の読解とその内容を資料にまとめるための読解力がつくような活動を段階的に行った。J7レベルになると、JLPTのN1取得者もあり、内容確認問題が容易に感じるという自信から、学期開始時は読解クラス履修への動機が上がらない履修者もいた。しかし、J7読解の目標である「読みのスキルを伸ばす」という目標を、レポート、論文作成に向けた読解力の向上と位置づけ、授業活動を展開することによって、履修者の意識が変化していく様子が見られた。授業活動を進めるうちに、内容確認問題には解答できるものの、資料の内容をまとめるまでの読解ができていないことに気づき、課題作成のために読解を進めることによって、自身の読解力の向上を感じたようである。

本授業において、レポート、論文作成までは行わなかったが、その前段階となる、引用のための要約課題、参考資料のレジюме作成は、J7レベルの履修者のニーズが高く、動機を高めることにもつながることが分かった。これらの活動は、今後も積極的に取り入れ、次学

期には J8 レベルに達する読解力が備わるように、コースを運営していきたい。

<秋学期>

受講生はみんな意欲的に授業に参加し、真面目に課題に取り組んでいた。個々の読解のレベルも高く、内容もしっかり把握している様子だった。宿題も期日内に完成し、提出していたので、毎週しっかりフィードバックをすることができた。

漢字圏の学生が半分ぐらいだったため、読むスピードに差が出ていたが、非漢字圏の学生も理解度は高かったため、時間を少し伸ばすことで解決できていた。内容が長い読み物は事前に読んでくるように宿題にしていたので読むスピードが遅い学生も内容はしっかり理解できていた。

要約の練習においては、上手に要約できる学生がほとんどだったが、そうではない学生もいた。フィードバックの際に、要約をする際のポイントや書き方などを毎回確認してもらうことで、回数が増えるにつれて要約のスキルもあがっていた。

今後の課題としては学生同士のよい関係性を築くことである。今学期はコロナ対策もあり、固定メンバーでのグループワークが多かったため、メンバー同士が仲良くなったことは大変よかった。しかし、他グループの学生たちとの交流はあまりできていなかった。教師側から学生間の交流を増やすための働きかけがあまりできていなかったため、今後は毎回違うメンバーでグループを組むなどしてクラスの一体感を強めていきたいと思った。もう一点、課題として挙げられるのは、色々なジャンルの読み物を読んで勉強することも大事であるが、論文、新聞記事、論説文、小説などそれぞれのジャンルをもう少し広く、深く、多角的視点で見えていくのもいいのではないかと思った。今後は学生たちの興味関心に寄り添う際にどのような読み物を選ぶかということも課題になってくると思われる。

2022 年度 「J5～J7 作文」授業記録

コース概要

作文は、J5 は中級、J6 は中上級、J7 は上級レベルの日本語能力を身につけているものを対象としたクラスである。J5、J6 では毎週、J7 では隔週に作文課題を完成させ、構成、資料の引用など、アカデミックレベルで必要とされる作文スキルを身に付ける。

<J5 作文>

担当者名：<春学期>長島明子 <秋学期>富倉教子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 2 名、秋学期 9 名

使用教材：独自教材

コースの目標

初中級で学習した語彙の定着、およびさらに語彙数を増やすこと、初中級で学習した文型や語彙を使ってレポートや作文を書く力をつけることを目標とする。

授業の方法

<春学期>

学期中、7つのテーマで800～1000字の作文を書いた。授業ではテキストに沿って、その課のポイントの説明、テキストの練習へと進めた。練習や作文課題についてペアで話し合った。宿題の作文は原稿用紙でもタイプでもよしとした。フィードバックは、まずお互いの作文を読み、コメントしあい、共通の誤りは全体で共有した。その後個別に対応し、リライトした。授業開始時は学生が入国できなかったため、オンラインで、1名来日後対面・オンラインを使ったミックス型で、全員入国後は対面で授業を行った。テキストと資料の配布、課題の提出と返却、期末テストはすべてBlackboardで行った。

<秋学期>

毎回ハンドアウトを中心に実施した。クラス全員でその日の課題、ハンドアウトの内容を確認しながら、課題によって個人、またはペアワークを行った。個人及びペアワークは最終的にそれをクラス全体で共有し、その日の課題について内容の理解を深めるとともに、実践で正しく使用できるよう進めていった。また課題（作文など）についてはフィードバックを個々並びに、授業にてクラス全体に行い、習得すべき課題のフォローアップを行った。

結果と課題

<春学期>

履修した2名は意欲的で、出席率、宿題の提出率もよかった。両名とも協力的でピア活動は円滑に進められ、具体的なアドバイスやコメントができていた。作文は整った構成で、学習した表現を適切に使用し、自分の意見を述べることができた。要約も、与えられた読み物の内容を正しく読み取ることができ、ポイントを押さえて制限字数内にうまくまとめることができた。

ただ、抽象的な漢語を多用して内容がわかりにくくなってしまう、ネットで検索したと思われる語彙・表現が不自然に使われている、文と文、段落と段落をうまくつなげられない、などの問題が見られた。このうち1つ目と2つ目は回を重ねるにつれて徐々に改善が見られたが、文と文、段落と段落のつながりについてはなかなか改善されなかった。この点を今後の課題とし、指導内容を見直し授業を工夫したい。

<秋学期>

今学期いずれの学生も非常に熱心で意欲的に取り組んでいた。そのためか、学期の初めは

書き言葉や構成などにおいて整備されていない学生も数名見られたが、学期終盤に近づくにつれ作文の形が整うようになり、また作文全体も理解しやすくなるなど個々の成長が窺えた。

一方、個人差があるものの、日本語の文法や語彙の選択の誤りなどは少なくなかった。文法に関しては授業では触れてこなかったため、今後は文法の復習や指導なども必要に応じて行うことも考えられる。またハンドアウトの作文の構成は全体の統一を図るなどして学生に提示できるよう見直す必要性を感じた。

学生は現時点での知識と能力を使って様々な意見を述べてくれていた。内容は非常に興味深いものが多く見られ、今後はそれを全員で共有する時間も設けるとより良いと思われる。

<J6 作文>

担当者名：<春学期>金庭久美子

<秋学期>a クラス：三浦綾乃、b クラス：任ジェヒ

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 8 名、秋学期 a クラス 7 名、b クラス 8 名

使用教材：独自教材

コースの目標

レポートや作文の構成について学習し、毎回 800 字から 1200 字程度のレポートが書けるようにする。また、自分の意見の論拠となる資料やデータを読み取り、要約し、レポート中に正しく提示できるようにする。その際、きちんとした構成で文章が組み立てられるようにする。

授業の方法

<春学期>

今学期は 5 月まではミックス型の授業で、5 月 25 日以降は全員対面授業で行った。プレレッスンと 4 つのテーマを扱い、4 回のレポートを課した。授業では、1 つのテーマを 3 回の授業で取り扱い、独自教材のテキスト及び Master of Writing を用いた。まず、確認問題を実施し、その後、テーマの内容理解をした。次に、レポートで使用する表現やレポート作成のルールを確認し、構成メモを作成した。そして、構成メモとレポートを宿題とし、提出させた。課題は全て Blackboard に提出させ、学生が提出した構成メモとレポートは教師が添削し、コメントをつけて返却した。フィードバックの日は個別に対応し、リライトを行った。

<秋学期>

今学期は対面で授業を行ったが、資料の配布と課題の提出においてはBlackboardを活用した。今学期、特に焦点を当てたのは、次の4点である。それは、1) 4つの異なるテーマに沿った読み物の内容を理解し、その社会的背景を知ること、2) テーマに対して独自性のある意見を持つこと、3) 読みやすい文章構成を意識すること、4) 読み物を正しく引用しながら作文を書くことである。授業ではそれぞれのテーマごとの読み物をまず個人で読み、読んだ内容をペアで、そして最終的にはクラス全体で確認を行った。またテーマや読み物について、履修者の母国における状況や履修者なりの意見を述べてもらったりした。同時に、文型の復習や引用の仕方、参考文献の書き方をテキストの問題を行いながら学んだ。作文の前には構成メモを作成したり、資料を調べたりした後、ペアもしくはグループで話し合い、そこでの気づきを作文につなげてもらった。作文を書いた後は、「独自性」、「構成」、「引用の仕方」を中心に教師が個別にフィードバックを行った。

結果と課題

<春学期>

履修者8名は全員大学院生であった。1名のみ本国で仕事をしているとのことで、授業には出席することができなかった。8名中5名が4つの課題を最後までやり遂げることができた。残りの2名は病気で欠席したためその回のレポートが提出できなかった。大学院の専門の授業があって、忙しいと思うが、自分たちのレポートにおける弱点に気付いており、それを克服するために努力している様子がうかがえた。「構成」と「引用」については、個人差はあるものの全体的に進歩が見られた。特に「構成」のうち、序論と結論の部分の書き方は改善されたと思う。参考文献の書き方は、Master of Writingを何度も一緒に確認したため、期末テストでは正確に書かれていた。

今後の課題は、引用した後はどうそれを関連付けるかということである。引用内容の解釈やそれに対する意見が上手く書くための指導を考えていきたい。

<秋学期>

(a クラス)

履修者は7名いたが、初回授業から一度も出席しない学生が1名いたため、実質6名のクラスであった。少人数だったが、テーマの理解を深めるための話し合いやクラス内での意見交換は活発であった。作文の構成メモは書いてきたら履修者をペアにして授業内で共有させ、互いに質問やアドバイスをして必要に応じて修正してもらった。自分の作文の概要を客観的に見る時間をしっかり作ったことで、履修者はきちんとした構成の作文が書けるようになった。

一方で、引用や独自性の点では課題が残った。授業内の練習では正確にできていた引用や参考文献の書き方が、次の週の授業で、または宿題の作文や期末テストで正確にできていないことが多かった。授業時間は限られているため難しいが、定着を図るために、より多くの

練習問題に繰り返し取り組む必要があると強く感じた。また、引用と自分の意見の書き分けが全体的に弱かったと感じる。表現パターンを紹介したら実際に文を書いてみたり、履修者同士で作った文を読み合ったり、表現パターンを使っている文章と使っていない文章を読み比べたりなど、履修者の気づきと学びをより促せるような授業内の練習を今後は考えていきたい。

(b クラス)

今学期は、「独自性」、「構成」、「引用の仕方」という3つに焦点を当て、5つのテーマ(4つの課題と期末)について作文を書いてもらった。「構成」と「引用の仕方」に関しては、適切な引用の重要性を強調し、さらに授業中に繰り返し練習を行ったため、回数を重ねるごとに正しく使えるようになっていった。「独自性」に関しては、難しさを感じている履修者もいたが、個々が持つ社会的、文化的背景を活かした文章、留学生ならではの視点に基づいた文章などをフィードバックの際に例として示すことで、徐々に改善がみられた。

課題としては、信ぴょう性の高い資料の選択方法と、より多様な資料を用いた引用の練習が挙げられる。インターネット上に一般公開されている多くの情報や論文などの中から、文章の主張に最も適した資料を選択すること、また、引用にバリエーションが見られることに難しさを感じている履修者もいた。履修者が引用する資料の多様性を考慮し、今後は、さまざまなジャンルの資料を用いて、直接引用および間接引用する練習を、授業中に行っていく必要があると思われる。

<J7 作文>

担当者名：<春学期>長島明子

<秋学期>aクラス：栃木亜寿香、bクラス：小林友美

授業コマ数：週1コマ

履修者数：春学期4名、秋学期 aクラス6名、 bクラス7名

使用教材：独自教材

コースの目標

これまでに学習した語彙や文型を使って、「作文」ではなく、大学レベルで必要とされるレポートや報告書等の長文作成を行うことを目的とする。

授業の方法

<春学期>

授業は3回に1課のペースで進め、学期中4つのテーマでレポートを書いた。授業では、テーマに関連した課題文と資料を読み、内容についてペアや全体で意見交換をし、テーマへの理解を深めた。その後、自分でも資料を探し、論点や構成を考えて構成メモを作成し、レ

ポート作成へと進んでいった。各課の3回目にフィードバックとリライトを行った。まずピアでお互いのレポートを読んでコメントしあった後、全体と個別にフィードバックを行い、リライトした。授業開始時はまだ入国できない学生がいたため、5月上旬までは対面・オンラインを使ったミックス型で行い、全員が来日した5月中旬以降は対面で行った。テキストと資料の配布、課題の提出と返却、期末テストはすべて Blackboard で行った。

<秋学期>

授業は3回に1課のペースで進め、学期中4本のレポート課題を課した。各課の前半はテキストの課題文を読み、「内容理解とテーマの整理」についてグループで意見交換をした後、構成メモを作成し、レポートの準備を行った。後半はレポート課題で使用する資料を受講者自身が準備し、それをもとに構成メモを再検討し、さらにピアあるいはグループで推敲をするようにした。レポートの内1回は、課題に基づいたアンケートを作成し、収集した後にレポート作成を行った。フィードバックは、学期中に3コマを使用し、各自の提出課題に対するフィードバックをもとにリライトをし、再提出を課した。

結果と課題

<春学期>

履修した4名は意欲的に課題に取り組み、課題も期限内に提出した。また、オンラインで授業に参加した場合でもビデオをオンにしてくれたおかげで、話し合いなどが円滑に進められた。

コース前半では問いの立て方や結論の部分に何をどう書いていいのかわからず、戸惑う学生が多かった。しかし、『**Master of Writing**』を参考にしたり、テキストにある表現を使ったりするなどして、回を重ねるにつれて進歩が見られた。また、最初は直接引用が多かったが、次第に間接引用を使えるようになっていった。ただ最後まで、参考文献が正確に書けない、間接引用がうまくできない、ただ引用した文のみで構成される節を書く、という学生もいた。この点は個別フィードバックでも指導したが、なかなか改善されなかった。この点を今後の課題とし、授業で引用の練習や節内の構成のしかたに十分時間が割けるよう、工夫したい。

<秋学期>

(a クラス)

履修者のうち登録のみの学生もおり、実質4名の参加者だった。前半は4名共出席していたが、後半になるにつれ2名の欠席が見られた。授業で扱った直接引用・間接引用について、初回レポート内では作成することが難しい様子であったが、2回目の作文レポートからは全員が引用表現を使用できていた。日本語で長い作文(レポート)を書いた経験のない学生もいた為、初回レポートのフィードバックと共に、**Master of Writing** を用いたレポート

の基礎確認や文末表現の練習などを扱う時間を全体に設けた。

授業中の学生の様子であるが、全員積極的にディスカッションに加わり、活発な議論が交わされた。出された疑問や不明点は自然と学生間でのディスカッションの題材につながり、後半は学生同士で問題解決する場面も多く見られた。4回のレポート提出が課されるクラスであったが、回を重ねるごとに提出が滞り、欠席する学生も見られた。

レポートの構成や引用などの機能を用いたレポート作成に関しては、講座を通して進歩が見られた。しかしながら、間接引用のまとめ方や、引用を絡めた意見の表出表現、またコロケーションについては課題が見られる学生が多かった。以上3点を課題とし、授業内でもこれらを意識した指導をおこないたい。

(b クラス)

秋学期の J7b クラスは、7名が履修登録したが、実際にクラスに参加したのは5名であった。非漢字圏の学生もいたが、語彙力、漢字力ともに高かった。5名は出席率、課題提出率が高く、大変熱心に取り組むことができた。ペア・グループワークでは、学生同士で考えを深め、新たな視点を見つけることができたように感じる。また、課題の1500字程度のレポートを書いたことがない学生が多い中、唯一経験者であった正規院生が、先行研究の検索方法やアンケート調査の方法について、クラスメートにアドバイスをしながらリードしていた点もよかった点である。

論拠に基づいた文章を書くことに慣れていない学生が多かったため、当初は、構成や見出しのつけ方、引用の仕方についての課題が目立った。しかし、技法や表現を繰り返し取り扱い、練習を重ねた結果、次第に改善されていった。今後は、間接引用の適切なまとめ方や本文のどの部分に引用を導入するのか等の引用箇所について、より意識できるよう指導や練習を工夫していきたい。

2022年度 「J5～J7 聴解・会話」授業記録

コース概要

聴解・会話は、J5は初中級、J6は中級前半、J7は中級修了レベルの学習者を対象としたクラスである。週1回のクラスで、グループディスカッションやプレゼンテーション、ロールプレイ、ディベートなどを学生が行うことが多い。そのため、履修者には積極的に授業に参加することが望まれる。

<J5 聴解・会話>

担当者名：<春学期> 高嶋幸太 <秋学期> 平山紫帆

授業コマ数：週1コマ

履修者数：春学期3名、秋学期12名

使用教材：オリジナル教材

コースの目標

初中級修了レベルの学生を対象としたコースであり、日常生活における様々な場面での聴解会話能力の育成を目指す。相手の話すことを正確に把握し、それに対して自分の意見などをきちんと発表出来るようになることを目標とする。

授業の方法

<春学期>

発表活動としては、グラフの説明と時事問題というトピックを設定し、それぞれスピーチを行った。また、テキストを用いて聴解やロールプレイなどの練習を実施した。そして、授業の始めに前の週の復習としてディクテーション・クイズも行った。あわせて、テキストの課が終わるごとに、ミニドラマを作成し、教室で発表した。

<秋学期>

授業を前半と後半に分け、前半にはスピーチ、後半には聴解や会話の練習を行った。スピーチは学期中に2回行った。聴解・会話では、「勧誘」「許可」「提案」の3機能に焦点を当て、会話の内容を聞き取る練習やディクテーション、カジュアルな場面とフォーマルな場面での会話の練習等を行った。また、各機能の学習が終わるごとに、ロールプレイのミニドラマの発表を行った。

結果と課題

<春学期>

履修者が3名だったため、きめ細かく聴解練習や会話練習などができた。聴解においては、「会話スピードが速い」「使用単語が難しい」などの理由から、内容を理解できなかった箇所は、繰り返し音声を聞き返すようにし、できるだけ豊富なインプットに触れる機会を持つよう心がけた。

また、今学期においては、ボランティア学生を募集し、ロールプレイの練習もできたので、クラスメイトや教員以外の人とも日本語でやり取りする活動を取り入れることができた。履修者もボランティア学生とのロールプレイを楽しんでいる様子であった。ただ、1度しかそのセッションを実施しなかったため、今後はあと1、2回程度機会を増やしてもよいのではないかと感じた。

<秋学期>

今学期はどの学生も終始意欲的に取り組んでいた。スピーチへの取り組みは特に素晴らしく、どの学生も入念に準備して発表に臨んでいた。また、1回目の発表でフィードバックされたことを2回目の発表に生かそうとする学生が多く、学期の中での上達が顕著に見ら

れた。聴解についても、学期当初はディクテーションで正確に聞き取ることができない学生が多かったが、練習を重ねるうちによく聞き取れるようになっていった。

一方、課題もある。会話練習ではフォーマルな場面とカジュアルな場面での表現の使い分けを重点的に学習したが、スピーチスタイルを一定に保つことが難しい学生が多く見られた。フィードバックを工夫するなど、学生への意識づけの方法を見直していきたい。

<J6 聴解・会話>

担当者名：<春学期>aクラス：高嶋幸太、bクラス：小林友美

<秋学期>aクラス：小林友美、bクラス：小松満帆

授業コマ数：週1コマ

履修者数：<春学期>aクラス7名、bクラス6名

<秋学期>aクラス9名、bクラス7名

参考教材：瀬川由美・紙谷幸子・北村貞幸『ニュースの日本語聴解 50』スリーエーネットワーク、鎌田修他『中級から上級への日本語なりきりリスニング』the Japan Times など、生教材（インターネットニュース）

コースの目標

中級前半修了レベルの学習者を対象として、実質的な運用能力の育成を目指す。聴解では、時事問題をテーマに、正確に把握できるようになることを目標とする。会話では、相手や場面にふさわしい日本語が流暢に話せるようになることと、プレゼンテーションにおいては、アンケート調査を行い、その結果について比較しながら考察を行うことを目標とする。

授業の方法

<春学期>

(aクラス)

聴解では、隔週でニュース音声を聞きつつ、内容把握をし、最後にクラスで話し合いをするという形式で進めた。会話では、普通体で話している音声を聞き、それを踏まえて、会話練習を行った。また、毎週ディクテーション・クイズをしたり、課が終わるごとに、扱ったテーマに関してミニ発表を実施したりもした。あわせて、わかりやすい構成になるよう意識し、2度プレゼン発表も行った。

(bクラス)

14回の授業ではディクテーションの小クイズ、ニュースの聴解練習、会話練習、プレゼンテーションを行った。毎回、会話のテーマに関連した話題の聞き取り練習を宿題として与えており、事前に自習用音声教材を聞いてくるように指示した。宿題の確認のため、授業開始時にディクテーションのクイズを実施した。ニュースの聴解練習は全6回実施し

た。会話では会話内容の聴解練習を行った後、聞き返しをする練習を行い、最終的には教材の会話と同じ話題でペアで発表させた。また、プレゼンテーションは、サンプルの PPT で練習を行った後、独自のテーマのアンケート調査を行い、その結果を比較しながら発表するというものだった。期末テストでは、聴解はニュースの聴解テスト、会話テストは調査結果をまとめたプレゼンテーションを実施した。

<秋学期>

授業ではディクテーションの小クイズ、ニュースの聴解練習、会話練習、プレゼンテーションを行った。毎回、会話のテーマに関連した話題の聞き取り練習を宿題として与えており、事前に自習用音声教材音声教材を聞いてくるように指示した。宿題の確認のため、授業開始時にディクテーションのクイズを実施した。ニュースの聴解練習は全6回実施した。会話では会話内容の聴解練習を行った後、聞き返しをする練習を行い、最終的には教材の会話と同じ話題でペアで発表させた。また、プレゼンテーションは、サンプルの PPT で練習を行った後、独自のテーマのアンケート調査を行い、その結果を比較しながら発表するというものだった。期末テストでは、聴解はニュースの聴解テスト、会話テストは調査結果をまとめたプレゼンテーションを実施した。

結果と課題

<春学期>

(a クラス)

聴解では、さまざまな教材からニュースを聞き取ったのだが、「無人 AI 決済コンビニ」「海外に輸出される日本食」など学生にとってなじみのあるテーマでは、活発に話し合いをしている様子だった。また、会話練習では、最初の頃はなかなか丁寧体が抜けなかったのだが、学期が進むにつれ、普通体などくだけた表現を使えるようになっていった。

今回は、2 度学生ボランティアを教室に招き、対面でディスカッションを行ったのだが、楽しそうに情報交換をしていた。中・上級クラスになると、扱えるテーマは多岐にわたるが、学生同士の話し合いは互いにとってよい刺激になるため、適宜入れていったほうがよいと感じた。

(b クラス)

履修相談後、複数の学生がレベル移動になり、対面 2 名のクラスになった。明るく、大変熱心な学生達であり、いい雰囲気での授業運営をすることができた。毎回のディクテーションは、回を重ねるごとによく聞き取れるようになり、期末テストも高得点であった。ニュースは、学生の身近なテーマを取り扱ったこともあり、関心を持って活動に取り組めたようである。会話は、学期前半に、カジュアルな表現を取り扱ったが、話体については丁寧体と混合してしまう学生もいた。そのため、繰り返しの練習や意識化の必要性を感じた。学期後半の

プレゼンテーションでは、2名とも大学院生ということもあり、アカデミックなテーマで調査、分析をして発表することができた。

少人数のクラスであったため、ロールプレイやプレゼンテーションの発表の日は、abクラス合同で授業を実施したり、学生ボランティアに2回授業に参加してもらったりして、他の学生とインターアクションをする機会を設けた。今後も、少人数の場合の会話練習の活動や発表の仕方を工夫していきたい。

<秋学期>

(aクラス)

秋学期のJ6aクラスは、9名が履修登録したが、実際にクラスに参加したのは8名であった。大変熱心な学生が多く、いつも質問や確認が出てくる積極的なクラスであった。クラス仲が良好であり、和やかな雰囲気の中、ペア・グループワークを進めることができた点もよかった。

自宅学習として課した聴解練習は、きちんと準備をしてくる学生が多く、ディクテーションクイズは毎回高得点であった。ニュースの聴解練習では、普段日本のニュースを視聴しないこともあり、当初、自然なスピードの音声を聞き取ることが困難な様子であったが、徐々に概要の聞き取りの他、細部の聞き取りまでできるようになっていった。

学期前半に取り扱ったカジュアルな会話の練習は、アニメやドラマ、日本人の友達から聞いたことがある表現ではあるものの、使用することは難しいという声が出た。そこで、授業では2回のビジュアセッションを設けた。同年代の学生ボランティアと実際に日常会話を話すことで、モチベーションと運用力の向上に繋がったのではないかと思う。今後も、口頭でのアウトプットの機会を多くする教室活動を模索していきたい。

(bクラス)

非常に落ち着いたクラスで、学生同士の仲が良く、活動や課題に取り組む際にも、助け合ったり、アドバイスし合ったり、協力的な姿勢の見られる、とても前向きなクラスであった。クイズのための準備や宿題となっている課題についても、自主的に行い、授業に臨んでいた。授業では、前半は友だち会話、後半は発表のための堅い表現を学んだが、コードスイッチが苦手な学生があったため、会話の場面設定を増やし、様々な場面での会話の練習をする機会が持てるよう、工夫していくことが今後の課題である。

<J7 聴解・会話>

担当者名：<春学期>山内薫

<秋学期>aクラス：井上玲子、bクラス：藤田恵

授業コマ数：週1コマ

履修者数：<春学期>5名、<秋学期>秋学期 aクラス4名、bクラス3名

参考教材：荻原稚佳子・伊藤とく美・齊藤眞理子『日本語超級話者へのかけはしーきちんと

伝える技術と表現—上級から超級へ』スリーエーネットワーク、生教材（動画など）

コースの目標

中級修了レベルの学習者を対象とし、アカデミック場面での聴解能力および会話能力の育成と、場面にふさわしい日本語の習得を目指す。生の教材を用い、日常生活だけでなく、講義や講演などやや専門的な内容や社会問題、時事問題についても細部まで正確に把握し、流暢に意見が言えるようになることを目標とする。

授業の方法

<春学期>

授業は聴解と会話の 2 部構成で進めた。聴解においては、経済、社会問題を取り扱った動画を視聴し、内容把握と語彙や表現の確認を行った。4 つのテーマのうち、2 つは 2020 年度以前に扱った教育とファッション開発業界に関するテーマ、2 つは新型コロナウイルスの影響を受ける教育と冷凍食品開発業界に関するテーマを扱った。また、動画視聴後は、テーマである社会問題について ab クラス合同でディスカッションを行った上で、レポートとして内容要約と意見文、及びリライトの提出を課題とした。会話においては教材で、他者に伝わるような表現や展開を考えながら練習を行った上で、ロールプレイとプレゼンテーションを課題とした。期末テストとしては、①プレゼンテーション及び②DVD の内容要約を実施した。なお、2 回のプレゼンテーションは ab クラス合同で、パワーポイントを用いて行った。

<秋学期>

聴解と会話の 2 部構成で進めた。聴解では、経済、社会問題を取り扱った動画を視聴し、今学期は、日本の塾教育、アパレル業界の取り組み、冷凍食品業界の取り組み、廃棄物活用の取り組みの 4 つの内容を取り上げた。動画を視聴する前にキーワードや語彙リストの確認を行い、動画視聴後に内容について理解できたことを全員で共有したり、視聴したテーマについてのディスカッションを行った。また、前の回に視聴した部分のディクテーションクイズを行い、さらに、1 つのテーマの視聴が終わるごとに、内容の要約と意見文の提出を課した。会話は、語彙や表現などを学び、内容に即したテーマのプレゼンテーションを 2 クラス合同で 2 回行った。また、新出語彙の確認問題をクイズ形式で 3 回実施した。

結果と課題

<春学期>

(a クラス)

実質 2 名の小規模のクラスとなったが、2 名とも学期末まで遅刻や欠席がなく、発言や意見も積極的に交わされ、協働して授業に取り組むことができていた。課題の提出に関しても遅延することなく、毎週、真剣に取り組んでいた。また、ab クラス合同でのディスカッションやプレゼンテーション活動においては、質量ともに充実した意見交換が行われ、満足している様子が窺えた。2 名とも日本語のアカデミックレベルが高く、特に聴解においては、語彙リストは必要なく、要約においてもキーワードやキーフレーズを掴み、的確な表現を用いながら作成することができていた。一方で、プレゼンテーションにおいては、パワーポイントの作成や発表練習に十分な時間を取ることができなかつた。対面やオンラインの切り替えが要因の一つとも考えられるが、今後、時間配分においては、授業形態に影響を受けないように、より工夫していく必要がある。

(b クラス)

b クラスも 3 名と小規模で、学生たちの活発な発言により成り立つクラスであった。学生全員がビジネス専門の院生で、興味関心が近いということもあり、教室外（専門科目で用いられている表現など）の日本語を教室内で話題にするなど、積極的に日本語と関わろうとする姿勢が多くみられた。そのおかげで、テキストの表現だけでなく、学生たちの日常生活の中の「聞く」「話す」日本語についても、意見交換や知識情報の共有ができた。個人的には、学生主導の授業が如何に重要であるか考えさせられるクラスであったと思う。また、緊急事態宣言により授業形態が複数回変わったにもかかわらず、学生間の連携によりトラブルなく、スケジュール通り授業を進めることができたのも今学期評価できる点である。一方で、授業形態の切り替えにともなう課題もみられた。b クラスでは、オンライン授業になってから、ディクテーションとレポートの提出先をブラックボードあるいは Zoom のチャットと 2 か所用意していた。ブラックボードのシステムエラーなどにも対応できる、より効果的な方法だと判断していたが、実際には学生に混乱を招いてしまった。学生に寄り添って、より正確で簡潔な指示をする必要があったと反省している。学生にとってわかりやすい指示と説明とは何かを考え、実践にいかすことを今後の課題としたい。

<秋学期>

(a クラス)

学期の前半では、語彙リストがなければ動画の内容把握が難しかったようだが、視聴する前に、どんな内容かを推測し、語彙リストを確認してから動画を視聴した。視聴後に、学生に取ってもらったメモを基に全体で内容の確認を行うことで内容の理解が深まったようである。回を重ねるごとに内容のポイントの抑え方もわかってきたようで、後半は語彙リストを事前に確認しなくても内容把握ができるようになった。

今学期は、ab クラス合同の授業を 2 回設けた。1 回目は、お互いの教室が離れていたた

め、Zoomで繋ぎ、プレゼンテーションを行った。abクラス共に、テキストのテーマをもとに各自が興味を持ったテーマについてしっかり調べてきて、発表に臨んでいた。ただ、Zoomセッションで、しかも初対面の学生もいたことから、1対1のやり取りに終始し、クラス内でのやり取りには発展しにくかったようである。2回目は、同じ教室でプレゼンテーションを行った。質疑応答では発表者がオーディエンスに質問をするという形式を取ったことで、クラス内での意見交換が弾んだように思う。

(bクラス)

秋学期のbクラスは、履修者が3名であり、少人数であることを活かし、各学生の授業内での発話機会を多くとるように心がけた。聴解パートでは、動画に出てくる語彙リストを配付し、語彙の拡充を図った。ディクテーションクイズの結果や、動画視聴後のディスカッションの様子を見ると、語彙の獲得は見られたが、その一方で漢字表記が身につかず、ディクテーションにおいてひらがな表記が目立つ学生がいた。そのため、学期の後半から、一部自己採点を取り入れ、学生自身に表記を修正させるようにした。その後の様子を見ると、本クラスの学生においては、効果的な方法であったと思う。会話パートでは、テキストを用いて、語彙や表現を導入しながら、PPTを用いたプレゼンテーションを行った。発表者としての姿勢は概ねできていたが、聞き手側となったときに発表内容を理解しているにもかかわらず、質問が出せないという課題が見つかった。そのため、FBでは、どのようなポイントに対して質問を行ったらよいのかを全体で確認した。その結果、期末で行った2回目のプレゼンテーションでは、質疑応答においてやりとりが増えていた。

今学期は少人数であったこともあり、発表を個別に行い、会話練習やディスカッションなどで個々の学生の発話機会を多くとることができた。一方で、この人数であっても、授業内活動をやや急いで進める場面もあった。今後は、クラス人数が多くなることを見込まれるため、クラスサイズにかかわらずJ7レベルのコース目的が達成できるような活動内容を検討していきたい。

2022年度 J8 授業記録

コース概要

J8は、既に高度の文法・漢字・語彙を習得しており、大学における学習・研究が十分日本語で行える学生を対象としたコースであり、様々な目的に沿った科目を展開している。展開している科目は、大学や大学院での学習、研究生生活のための日本語能力を伸ばす科目と、実社会の中で求められる日本語能力を伸ばす科目、日本語そのものについての知識を身につける科目など、多岐にわたっている。また、J8で展開する科目は、短期留学生のみならず、学部や大学院の正規学生（日本語を母語としない学生）の履修も可能であり、様々な背景を持つ学生が、一緒に学ぶ機会も提供している。

各科目の詳細は次に示す通りである。

＜日本の社会と文化A＞

担当者名：＜春学期＞武田聡子

授業コマ数：週 1 コマ 履修者数：春学期 13 名 使用教材：独自教材
--

コースの目標

社会問題、芸能文化など日本の文化・社会に関する様々なトピックをとりあげ、それについて理解を深めながら、日本語による受発信力をつける。

授業の方法

日本の文化や社会に関わるテーマを選び、それに関する文献を読んだり、映像を見たりする。講義も行うが、主としてテーマについてのディスカッションやプレゼンテーションを中心とした授業を行い、最後に自分でテーマを決めたプロジェクトワークを発表する。

結果と課題

正規学部生が 13 名、内 4 年生が 3 人、残り 10 人は 2 年生であった。最初は 4 名がオンライン、残りは教室からでハイブリッドでスタートした。結局 1 名が最後まで母国から受講したため、終始ハイブリッドの授業となった。教室のマイクと持ち込みのカメラでオンラインの学生と教室の学生と一緒にグループ活動を行ったり、意見交換をしたりすることもできた。コース全体では、テーマを 5 つ取り上げ、まず自分が興味を持っている日本の社会と文化に関わるテーマで自己紹介も兼ねた発表を行った。その後、同じ興味を持つ同士をグループにし、話し合った末、一つのテーマを決めて行うグループ発表、日本人学生ボランティアにインタビューする活動、SDGs をテーマにしたリサーチと発表、その後の授業の中で、SDGs に関する映像を見てリアクションペーパーを書かせた。最後に、自分の好きなテーマで行うプロジェクトワークの発表を実施した。今学期は、どのテーマでも質疑応答とディスカッションにも時間を使い、力を入れた。またリアクションペーパーを書いてもらい集計したものを無記名でクラス全体でシェアし、お互いから学び合うことにも力を入れた。課題としては、個々の発表の際に気になった、発音や発表姿勢を個別に指導する時間が持てたらよかったかもしれない。

＜日本の社会と文化B＞

担当者名：＜秋学期＞高嶋幸太

授業コマ数：週 1 コマ 履修者数：秋学期 13 名

使用教材：独自教材

コースの目標

時事問題など日本の文化・社会に関する様々なトピックをとりあげ、それについて理解を深めながら、日本語による受発信力をつける。

授業の方法

日本社会や日本文化に関連するトピックを選択し、それに関する映像教材を見たり、文献や記事を読んだりする。教材から学んだことをもとに、ディスカッションをしたり、ミニ発表などを行ったりし、最後のまとめとして授業テーマに関連したプレゼンテーションを行う。

結果と課題

初回の授業で履修者から意見を募り、4つのトピックを選定した。その4つは、①日本のインバウンドビジネス、②日本食文化、③日本の就職事情、④日本のテクノロジー・サービス・システムであった。

各トピックを3週にわたって取り扱った。基本的には第1週目に、トピックに関連する映像教材を視聴し、ディスカッションを行った。2週目では、文献や記事を読み込んできて、それをクラスメートとジグソー・リーディングする活動で、最後の3週目にはそのトピックに関するミニ発表を行うというものであった。どの週でも、課題を事前にこなし授業に参加する様子が見て取れた。また、ボランティア学生との交流が2回でき、活発に交流できている様子であった。また今学期では、コロナの濃厚接触者やり患してしまう学生が複数名いたため、別途課題を提示するなどの措置を取り、対応を行った。

課題としては、参考文献を引く際、きちんと提示されていない学生がいたため、今後はレジュメや発表を行ううえでのルールを徹底するよう指導していければと感じた。

<日本の社会と文化C>

担当者名：<秋学期>小林友美

授業コマ数：週1コマ

履修者数：秋学期7名

使用教材：独自教材

コースの目標

日本の企業風土、日本的経営、日本式サービスなど日本での就職に関心がある学生にとって有用なトピックをとりあげ、それらの知識を獲得すると同時に、高度な文型や語彙を増やし、日本語による受発信力をつける。

授業の方法

授業の方法 「日本の企業風土」「日本的経営」「日本型サービス」をトピックとして取り上げ、それぞれの専門家をゲストスピーカーとして招き、ゲストスピーカーの講義を軸として授業を進める。

結果と課題

今回の履修者は 特別外国人留学生 2 名と正規学部留学生 5 名で、TA の配置もあった。出席率、課題提出率が良好であり、全員熱心に授業に参加することができた。レジュメ作成の未経験者が 2 名いたが、クラスメートや TA との活動、教師のフィードバックを通し、回を重ねるごとにコツを掴んでいった。日本企業への就職を希望する学生が多かったこともあり、レポートでは、各自、自身の関心に引き付けたテーマで、ゲストスピーカーの講義や事後学習の資料をもとに、自分の意見を論述することができたように思う。全体的に積極性には欠ける雰囲気であったが、TA の働きかけもあり、ディスカッションや分担読解等のペア・グループワークでは、お互いを尊重し合い、活発に活動することができたように感じる。今後も、学生間での主体的学びを促せるような工夫をしていきたい。

< 社会の中の日本語 A >

担当者名：< 春学期 > 末松史

授業コマ数：週 1 コマ
履修者数：春学期 4 名
使用教材：独自教材

コースの目標

流行語、擬音語・擬態語など、社会言語学的側面から日本語についての理解を深めるとともに、日本語による受発信力をつける。

授業の方法

日本社会に対する理解を深めるため、非日本語母語話者が知っておくと役立つと思われる日本語に関するテーマ：配慮表現と擬音語・擬態語に関する論文をクラス全員が読み、一人が発表、それから、テーマに関するディスカッションを行った。

結果と課題

履修者は 4 名で全員が正規学部生で、学期の前半 1 名が授業に来なくなったが、どの学生も授業に積極的で、毎回ディスカッションでは様々な意見が飛び交いアクティブな授業になった。配慮表現では、学生が自分たちの学校生活、バイト先でどのような配慮表現に出会

ったことがあるか、そのとき、どう感じたか等、彼らの体験をクラス全体で共有してくれた。ビジターセッションでは少人数だったにもかかわらず時間が足りなくなるくらい活発な議論ができた。

擬音語・擬態語ではその歴史や機能を学習し、まんが、文学、歌、日常生活、様々な場面で使用される擬音語・擬態語の役割、そして新しい流行語がどのように生まれていくのかについて扱った。「ちびまる子ちゃん」のオープニングテーマ「おどるポンポコリン」の中国語、韓国語、日本語の擬音語・擬態語の比較はとても面白かった。ビジターセッションでは、中国語、韓国語、日本語のオノマトペクイズで盛り上がった。

配慮表現では、こちらが選んだ論文・資料から学生が好きなものを選んで、発表してもらい、擬音語・擬態語では学生の興味のある論文を自分で選んでもらい、合計2回発表してもらった。

配慮表現では、学生全員が興味を持ち学生主体の活発なクラス活動が実現できたが、擬音語・擬態語では興味のある学生とそうでない学生の差が大きく、授業への参加度にバラつきが出た。今後はアンケート調査など、学生がより能動的に学べる方法を模索したいと思う。

<社会の中の日本語 B >

担当者名：<秋学期>長島明子

授業コマ数：週1コマ

履修者数：秋学期17名

使用教材：独自教材

コースの目標

役割語、インターネットの日本語など、社会言語学的側面から日本語についての理解を深めるとともに、日本語による受発信力をつける。

授業の方法

今学期は若者言葉、メールの文体、呼称、役割語の4つのテーマを取り上げた。授業ではそれぞれの概要を講義した後、テーマに関わる論文を読み、レジュメを書いたり、ディスカッションを行ったりした。メールの文体の授業では、実際に教師宛に依頼のメールを書く練習を行った。役割語は映画を視聴したり小説の一部を読んだりすることで、登場人物がどんな役割語を使っているかを分析させた。第9回の授業には日本人学生3名に来てもらい、ビジターセッションを行った。学生はそれまでの授業から興味・関心のあるテーマを選び、質問を準備し、当日ゲストの学生に質問した。セッション後、まとめた内容を提出させた。

期末レポートでは、授業で取り上げた4つのテーマの中から1つを選び、論証型もしくは調査報告型のレポートを書くことを課題とした。その内容を最後2回の授業でパワーポイントを使って発表させた。

結果と課題

今学期は受講生が多く、活発なグループディスカッションが行えた。ビジターセッションでは、外国人が若者言葉を使うのをどう思うか、場面によって自称詞をどう使い分けるかなど普段から疑問に思っていたことをゲストに質問することができた。各テーマに関する知識も授業で学ぶことで知識を増やしていったようである。最終プレゼンテーションではよく準備をしたことが窺える発表が多かった。ただ、日本語能力にレベル差があり、プレゼンテーションに使うスライド、プレゼンテーションのしかた、レポートの作成などについてフォローが必要な学生も数名いた。今後はこの点に留意して指導したい。

<論文読解の技法>

担当者名：<春学期>（池袋）谷啓子、（新座）三浦綾乃

授業コマ数：週1コマ

履修者数：春学期（池袋）7名、（新座）2名

使用教材：独自教材

参考教材：浜田麻里他『大学生と留学生のための論文ワークブック』くろしお出版、1997

コースの目標

様々な分野の学術論文を読み、日本語の学術論文の構成をつかむとともに、論文で用いられる様々な表現を理解することに重点を置きながら、日本語による受発信力をつける。

授業の方法

まず初めに論文とは何か？を話し合ってから論文を探す手法を学んだ。第2回は、自分の専門分野の論文を数本持ちよって紹介し、その中から今期自分が担当する論文を1本選び、担当者側が用意した共通論文1本と平行して分析を進めた。

学期前半は独自教材で論文各部の役割や要素、表現を確認し、練習問題を経て担当論文の分析（課題として提出）→授業で共有、という流れであった。分析や共有後の気づきの記入にはオリジナルの「担当論文シート」と論文のPDFを使い、Blackboardに提出されたものにコメントをつけて返却した。なお、新座キャンパスでは、今学期はGoogleスプレッドシートを用いて課題の作成をし、そこに教師はコメントをつけた。

後半は担当論文を先行研究の役割、データの種類、調査方法などの面からさらに分析した。最終課題として、担当論文についての詳細なレジュメを作成し、口頭発表と質疑応答を行った。発表では専門の異なるクラスメイトが分かるよう専門用語や背景の補足説明を行い、担当論文の研究意義や特徴についてコメントをしてもらった。

本科目は教材や授業方法について、コロナ禍のオンライン授業スタートより整備を進めてきた。説明動画や使用するシート類、論文のPDF共有等、対面でもオンラインでも対応可能な

形になっていたため、両キャンパスにおいてハイフレックスとなった今期もスムーズに運営できた。オンライン化以前はOHCを使用して授業内発表をしていたが、今期も全員基本ZOOMに入り、手元のPCで論文の細かい図や小さな文字を拡大して鮮明に見せることが出来、オンラインの良さを感じた。

結果と課題

<春学期>

(池袋)

今期の履修者は5学部から7名の2年～4年生で、うち大学院進学志望者は1名だった。今期は当初7名中2名が母国からのZOOM参加で、途中1名が入国し、後半は1名のみZOOMのハイフレックス形式となった。履修理由としては「論文の構成や語彙を知りたい」という論文に関する知識やスキルアップを目指すものが多く、他に「日本語力を高めたい」が挙げられていた。

欠席も少なく、全員熱心に分析の課題や授業内の共有活動に取り組んだ結果、様々な論文のタイプを知り、実際の論文から構成や論文独特の表現を学べた。最終発表の質疑応答からも自分の担当論文をしっかりと理解できているのが分かった。

課題として出された担当論文シートは、教師が各論文と照らし合わせて確認、必要に応じて修正コメントを入れて授業前にフィードバックしている。これを授業前に確認している学生は、授業での共有時に修正をふまえて発表していたが、時折フィードバックを未確認の学生もいた。これについては直前でも確認するよう伝えたい。

前述の通り、担当論文は各自が第2回に専門分野より1本に絞るが、総論など論文のタイプによっては教材で扱う表現が少ない場合がある。この点については毎期教師側もアドバイスはしているが、第2回目以降も候補とした論文を複数並行して見てから絞る形も提案したい。

(新座)

履修者は2名と少なかったが、熱心な学生達であった。2名のうち1名は日本未入国のため、一学期を通して対面とオンラインのミックス型の授業を行った。資料の共有のために全員Zoomに入るようになっていたため、特に大きい問題はなく授業は毎回スムーズに進んだ。学期の中盤、どちらか一方の学生の欠席が続いたため、スケジュールを少々変更した。履修者が少なかったため、学生の理解と必要性に合わせて進度を変えられたことは結果的には良かった。ただ、履修者が少ないことから学生は様々な論文に触れることがかなわなかったため、授業で扱ったような論文に出てくる特徴的な言葉や表現が論文に見当たらず、指導が難しいと感じることもあった。しかし、最終課題のレジュメ発表と質疑応答では、2名の学生が担当論文についてよく読み、理解できている様子がわかった。

今学期はGoogleスプレッドシートを用いて担当論文と共通論文の分析を行った。学生が

編集している様子がリアルタイムで見えるため、フィードバックが即座にできてコメントもつけやすいのが良かった。教師は学生が編集した時間もわかるし、また学生はファイルにアクセスしやすく、わざわざ Blackboard に提出しなくても済むので、互いの負担が少なかったのではないかと思う。しかしその反面、Google に慣れていない学生にとっては操作がやや大変で上手く編集できなかつたり、教師からのコメントを見ていなかたりすることがあった。逆に負担を感じていたようなので、その学生は途中からメールでエクセルファイル提出しても良いことにした。今後も Zoom を用いた授業が続いていく可能性を考えた場合、どのようなツールが授業で効果的に使えるかさらに検討していきたい。

<論文作成の技法>

担当者名：<秋学期>（池袋）谷啓子、（新座）（0名のため開講せず）三浦綾乃

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：秋学期（池袋）4名、（新座）0名

使用教材：大島弥生他『ピアで学ぶ大学生の日本語表現 第2版』ひつじ書房, 2014.

浜田麻里他『大学生と留学生のための論文ワークブック』くろしお出版, 1997.

北原保雄監修（独）日本学生支援機構・東京日本語教育センター『実践研究計

画作成

法』凡人社, 2009.

コースの目標

卒業論文や学術論文など、レポートよりも長く学術的な論文の書き方について学ぶことに重

点を置きながら、日本語による発信力をつける。

授業の方法

今期は全て対面授業であった（担当者コロナ罹患のため1回は ZOOM 双方向で実施）。前半は各自の専門分野に関する論文を探し、担当論文を1本決めて分析、論文の大まかな構成を把握した。専門や関心の異なる分野の論文に触れることで、論文にも様々なパターンがあることを確認し、並行して論文特有の日本語表現を学んだ。自身の担当論文の分析を紹介する際には、ZOOM も併用し、色やコメントをつけた論文をスクリーンと手元の PC 両方で確認した。

後半は、研究計画書に必要な要素や表現を学びながら、サンプルを参考に各自が取り組みたいテーマを研究計画書にしていった。先行研究の収集と整理を行いながら課題文作成→研究目的文作成、動機・背景作成、研究方法、研究意義とすすめた。最終回では、作成した研究計画書を発表し、質疑を行った。

これまでの「担当論文シート」「研究計画フォーム」は引き続き使用し、課題の提出には

blackboard を利用した。また、今期より文献リスト、文献メモ、用語の整理は1つの Excel にまとめた。

結果と課題

(池袋)

履修者は学部 2~4 年生 4 名で、うち 2 名は大学院進学も考えていた。体調不良による欠席が目立ったため、全体の進度がなかなか揃わなかったが、最終的には全員研究計画書を提出した。

概ね、前半で論文の構成や表現、後半で論文準備の基本が身についたと思われる。

課題として、後半で各自興味があるテーマを進める際に、関連する語彙に馴染みがなかったり、背景知識があまり無かったりすると下調べや課題文作成に時間がかかる場合があった。担当論文を選ぶ初回に各自のテーマを意識化させ、自身のテーマにより近いものを選ぶようにすると後半がスムーズかと思われる。

また、専攻問わず、SNS に関する問題をテーマとする学生が増えている。新しい分野の語彙は使い方が定着していないものもあることから担当者も確かなリソースで調べながらフォローしていく必要性を感じた。

(新座)

開講せず

<キャリアの日本語 A>

担当者名：<春学期> (池袋) 沢野 美由紀、(新座) (0 名のため開講せず) 佐々木藍子
<秋学期> (池袋) 金庭久美子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 (池袋) 15 名、(新座) 0 名、秋学期 (池袋) 14 名

使用教材：『立教就職ガイド 2024』

『外国人留学生のための就活ガイド』

(参考資料『改訂版 留学生のための就職内定ワークブック』)

コースの目標

日本の就職活動の全体の流れや要点を理解するとともに、エントリーシートの書き方 (効果的な構成、適切な文体や語彙等)、面接で求められる日本語 (適切な応対、マナー) など、実質的な日本語スキルの獲得を目指す。

授業の方法

<春学期>

就職活動の流れ、基本的な知識を学ぶところからスタートし、主として『立教就職ガイド』、『外国人留学生のための就活ガイド』を用いて授業を行った。具体的には、自己分析、エントリーシート・履歴書の書き方、業界・企業分析、志望動機の書き方、ビジネスマナー、面接での答え方などについて学び、就活に対応できる力を養うべく授業を進めるとともに、専門家にお越しいただき、就活に関する講義もお願いした。また、刻々と変わる就活戦線の状況を知るため、日本経済新聞の記事を適宜使用した。

<秋学期>

本授業は3つのステップに分けて授業を進めた。第一ステップでは就職活動の概要と流れ、自己分析を取り扱い、日本の就職活動について理解を深め、自己分析を始めた。第二ステップではエントリーシート、履歴書の書き方、書類送付の仕方について扱い、就職活動で必要な作文スキルの向上を目指した。特に、エントリーシートの文字数制限に留意させた。第三ステップでは第一ステップ、第二ステップで学習した内容を踏まえ、ビジネスマナー、就職活動の面接の形式について学習した。具体的には、よく出題される質問の回答について1つずつ検討・練習していき、集団面接の練習を行った。また、適宜企業分析やビジネス敬語の練習をするほか、ゲストスピーカーとして株式会社 i-plug の田中申明氏を迎えるなどし、就職活動への意識を明確にした。

結果と課題

<春学期>

(池袋)

登録者は15名で、うち13名が学期を通して受講した。就活に関するスキルアップを目指し、毎回メンバーを変えてペア/グループワークを繰り返す中で、お互いに学び合い、表現などを習得していった。

就活の基礎となる自己分析や志望動機を語るためには極めて個人的なことも話す必要があるため、信頼関係と雰囲気作りへの配慮もこのクラスのポイントであった。それが全員にとって好ましいものだったかどうかかわからないが、フィードバックのしかたなどに配慮することで、忌憚のない意見を言える・受け入れる関係がある程度は築け、学生の成長につながったと思われる。中には実際に就職活動中であつたり、先輩や友人などから様々な情報を得ている学生もいたため、それらを共有することも心掛けた。

ただ、エントリーシートや履歴書にどのような内容が求められるのか、何を書くとポイントを外していると判断されるのかという点について、文化的な考え方、発想の違う留学生に理解してもらうのは非常に難しかった。あまり多くの例を示しても逆効果になることも考えられるので、その点はもっと勉強し、学生が理解しやすいように進めたいと考えている。

(新座)

開講せず

<秋学期>

(池袋)

今学期は正規学部生が 10 名、院生が 4 名であった。どの学生も卒業後は日本での就職を希望しており、就職活動に対する意識が高く、非常にまじめな学生ばかりで、出席はもちろんのこと、課題にもしっかりと対応していた。特にエントリーシートの作成や面接の練習では、日本語の力も直結するため苦戦している学生もいたが、全員最後までやり遂げることができた。また、授業とは別に就職活動で問われる時事問題に触れるため、グループで最近のニュースについて話す時間を設け話し合いの後、自分以外のグループの人が話した内容とそれについてコメントを発表する時間を設けた。学生たちは日本だけでなく自国、世界のニュースを取り上げており、グループで毎回違うトピックが話し合われた点で大変良かったと思う。

クラス全体でも授業を重ねるたびに、学生同士も仲良くなり、ペア練習も非常に実りのある活動となった。当初、自分の個人的な内容をペアに伝えることに抵抗がある人がいると思われたが、お互いのいい点を吸収しあってよりよいエントリーシート、よりよい面接の質問の答えとなっていく様子が見えてきた。

今後の課題は、文字数にあったエントリーシートを書き、時間に見合う面接の受け答えをすることである。J8 レベルなので高い日本語能力を持っているが、同じ内容を 300 字から 100 字にする際には語彙を慎重に選んだり、名詞句にしたりする必要があり、それができるようになるまでどの学生も苦戦した。また、面接の練習の際も話しすぎてしまう学生もおり、コンパクトに良い印象を与える受け答えにするために、何度も練習した。数名は発展途上の段階で最後を迎えたが、今後、実際に就職活動を行って回数を重ねればさらに上達すると思われる。

<キャリアの日本語 B >

担当者名：<春学期> (池袋) 藤田恵

<秋学期> (池袋) 井上玲子、(新座) 佐々木藍子

授業コマ数：週 1 コマ

受講者数：春学期 (池袋) 10 名、秋学期 (池袋) 13 名、(新座) 4 名

使用教材：独自教材

コースの目標

就職試験で出題される日本語関連項目について学びながら、日本で行われる就職試験を理解する。また、数多くの問題に触れることによって日本語や日本文化・社会についての知識を増やす。

授業の方法

<春学期>

就職試験の言語能力に関する分野から、同意語、反意語、慣用句など語彙力に関するテーマや文章読解に関するテーマなどを選び、練習問題を通して必要な知識や問題に対応するためのストラテジーを身につけさせた。授業冒頭には前回の授業内容に関わる小テストを行った。また、学期末には、学習範囲を網羅した模擬テストを行い、答え合わせを通して不十分な点を各学生に認識させ復習を促したうえで、その翌週に期末テストを実施した。

<秋学期>

(池袋)

就職試験(SPI)の言語能力に関する分野から、同意語、反意語、慣用句など語彙力に関するテーマや文章読解に関するテーマなどを選び、練習問題を通して必要な知識や問題に対応するためのストラテジーを身につけさせた。授業冒頭には前回の授業内容に関わる小テストを行った。また、学期末には、学習範囲を網羅した模擬テストを行い、答え合わせを通して不十分な点を各学生に認識させ復習を促したうえで、その翌週に期末テストを実施した。小テストは Blackboard で行い、模擬テストと期末テストは筆記で行った。

(新座)

就職試験 (SPI) の言語能力に関する出題範囲から毎週いくつかのテーマを選び、問題を解きながら必要な知識や対策を学習した。扱った内容は、同義語・反意語・同音異義語、2語の関係、ことわざ・慣用句・故事成語、難読漢字、部首・仮名遣い、名言・名句、四字熟語、敬語、文法、文学作品、文章並び替え、読解問題である。毎回、次週の授業で扱う内容の練習問題を宿題として課し、授業では答え合わせとともに関連する内容について触れながら解説を行っていった。

また、授業で学習した内容の理解度・定着度を確認するため、毎回の授業開始時に前回は扱った内容の小テストを継続した。そして、学期末は学習範囲を網羅した模擬テストを実施し、その翌週に期末テストを行った。

結果と課題

<春学期>

春学期の「キャリアの日本語 B (池袋)」クラスは、10名の履修登録があったが、実際に学期末まで出席したのは9名であった。

就職試験の問題を数多く課題に出し、学生には事前の予習と、授業後の課題の提出を課した。また、次の回には前に扱った範囲の小テストを行い、学期末に向けては全範囲の模擬テストによって復習をしたうえで、期末テストを行った。

暗記をする項目が多いテストとなったが、毎回の小テストのための復習と課題の提出を

きちんとしていた履修者は、期末テストにおいて本クラスの目標を達成していることが確認できた。一方で、欠席が多かった学生、課題の未提出が多かった学生は、遅れた分を取り戻せないまま学期末までできてしまっていた。毎回の積み重ねが大切なクラスであるので、この点を次回以降も注意していきたい。

このクラスでは、授業中の活動として予習した試験問題の解説と答え合わせに時間を割くことが多いため、学生が授業活動によって何を得ているのか、毎回の小テストの点数以外に測ることが難しく、課題であった。そのため、今学期は、解説や答え合わせの内容をきちんと捉えることができたか、授業後にも課題の提出を課すようにした。その結果、履修者の誤用の傾向や疑問点、解説の必要な部分を提出物から確認することができ、その後の授業の進め方に活かすことができた。しかし、履修者の手元に資料が残るように、デジタルファイルでの提出を毎回授業で2回課すことが、負担となっている可能性もある。授業のよりよい進め方と、適切な課題提出の回数を調整して、今後も改善を続けていきたい。

<秋学期>

(池袋)

今学期は、正規学部生 11 名、特外外国人学生 2 名が本コースを履修した。就職試験を意識している学生が大半であったが、日本語力の向上のために履修した学生も数名いた。体調不良等で欠席する学生もいたが、授業に出席した際には、履修学生は全員、復習予習も十分に行って授業に参加していた。

今年度は、小テストは Blackboard で行い、模擬テストと期末テストは筆記で行った。期末テストの前に模擬テストを挟んだため、筆記試験の出題形式を把握して期末テストに臨んだと思われるが、難読漢字の読みや国文法、歴史的仮名遣いなどの記述問題については、点数の差が見られた。出題範囲が広いため、復習が十分にできなかった可能性がある。学期中からクラスで扱った学習項目の復習を促してはいたが、もう少し具体的な説明が必要だったのかもしれない。履修学生にとって、このクラスで扱う項目は難しいと感じる項目もあるため、学期の初期段階からテスト対策の意識づけを促す授業運営を行っていきたい。

(新座)

今学期の履修者は、正規学部生の 2 年生 4 名であった。年々、履修者の学年が低くなってきている印象がある。日本での就職を意識して早めに準備に取り掛かる学生が増えてきているのではないかと思われる。実際にこのクラスでも 2 年生の時点で半数の 2 名は日本での就職を希望しており、残りの 2 名は検討中で、日本での就職も選択できるよう、日本語の知識のブラッシュアップを目的として受講したようであった。

全体的に熱心に取り組む学生達で、出席率も良く、毎回の課題はきちんと提出があったが、多少遅刻をする学生がいたり、小テストでは得意なものと不得意なもので学生に差が見られたりした。また、課題をやってくる段階ではミスの多い学生であっても、小テストや模擬

テスト・期末テストではしっかりと復習をして良い点を取る学生も見られた。そのため、しっかりと個々の学生を見守ることの重要性を改めて実感した。

この授業では、就職試験で出題される日本語関連項目の対策という性質上、個々での学習が多くなる傾向があった。可能な範囲で関連する内容をもとに学生同士の活動も取り入れたが、授業期後半になるに従い、その時間を作るのが難しかった。今後は、授業後半にも学生同士の活動を取り入れるよう工夫していきたいと考える。

<ビジネスのための口頭運用力 A>

担当者名：<春学期>（池袋）三浦綾乃、（新座）佐々木藍子

<秋学期>（池袋）金庭久美子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期（池袋）17 名、（新座）5 名、秋学期（池袋）11 名

使用教材：独自教材

参考：

『人を動かす！実践ビジネス日本語会話上級』、『BJT 読解・聴読解実力養成問題集』、

『新装版商談のための日本語』、『新装版ビジネスのための日本語』、

『BJT 模試と対策』、『にほんごで働く！ビジネス日本語 30 時間』

コースの目標

日本語の談話の特徴について理解を深めるとともに、敬語や待遇表現など、日本企業で働く際に必要となる口頭運用力を身につける。

授業の方法

<春学期>

（池袋）

全 14 回の授業の中で「会議」「電話対応」「商談」の代表的なビジネス場面を 3 つ取り上げ、ロールプレイを通してそれぞれの場面において必要な表現力、対応力を身につけることを目標に練習を行った。各場面を勉強した後は、ロールプレイテストを行った。各回の授業の進め方としては、まずその回の場面設定を提示し、具体的にどのようなビジネス場面かを学生にイメージさせて共有した。その後、モデル会話を提示し、そこで使われている表現を確認し、口頭練習をして表現の定着を図った。そしてロールプレイと応用ロールプレイの練習へと進んだ。ロールプレイはできるだけクラス内で発表する機会を設けるようにした。さらに、自分のアウトプットを可視化するために、ときどき作ったロールプレイのスク립トを提出させ、添削して返却した。また、授業ではロールプレイの会話練習と並行してビジネス場面の聴解力を養うため、ビジネス日本語能力テストの聴解練習も行った。最終回の授

業では、聴解のテストも行った。

(新座)

本授業ではビジネスシーンでよくみられる「会議」「電話対応」「商談」の場面を取り上げ、さらにそれぞれの場面を細分化し、そこで必要な表現力、対応力を養成することを念頭に授業を行った。各回の進め方は、まずその回で扱う場面設定を提示し、プレタスクとしてロールプレイを試みた。プレタスクでは自身がどこまで対応できるのか、どの部分がうまく表現できないかを確認した上で、どのような表現や対応が必要かを把握した。そして、その場面で行われる談話をいくつかに分割したモデル会話を順次導入していき、その都度ペアで口頭練習を行った。最終的には、分割されたモデル会話を統合したロールプレイを行い、まとめとした。ロールプレイではよく間違いが起こりそうな部分について取り上げ、教師がフィードバックを行った。また、授業では場面ごとの会話練習と並行してビジネス場面の聴解力を養うため、ビジネス日本語能力テストの聴解問題も行った。

<秋学期>

(池袋)

本授業では、ビジネスにおける三つの基本的な場面（「会議」「電話対応」「商談」）を設定し、各場面における口頭運用力を育成するように進めた。具体的には、「会議」は①提案・申し出、②説明（プレゼンテーション）、③賛成・反対、④質疑応答、「電話対応」は①基本、②応用、「商談」は①指示・確認、②訪問、③依頼・断り、④お詫び（クレーム処理）を取り上げた。流れとしては、各場面において、基本的な表現を確認したのち、ペアでロールプレイ、またはグループでミーティングのロールプレイなどを行った。ロールプレイに対するフィードバックを行う際、適切な言語行動及び非言語行動、及び社内と社外の表現の異なりや配慮すべき点について考えさせ、再度ロールプレイを行った。また、三つの基本的な場面の学習後に、まとめのロールプレイテストを行った。さらに、ビジネス場面での聴解力及び対応力を育成するため、定期的にビジネス日本語能力テストの聴解問題を扱い、期末テストではビジネス場面の聴解を10問出題した。

結果と課題

<春学期>

(池袋)

履修者は17名であったが、そのうち1名は就職活動が忙しいとのことで、学期の序盤から一切出席しなくなった。残りの16名は比較的出席率も良く、最後まで真面目に授業に取り組んでいた。日本語能力にはそこまで大きい差が無かったため、授業も進めやすかった。発言が少なく、おとなしい学生達であったが、「ビジネス場面で使われる日本語表現を知りたい」「会話が上手になりたい」「敬語が使えるようになりたい」「日本で就職したい」とい

う強い思いがそれぞれの学生にあり、毎回の授業のロールプレイの練習に一生懸命取り組んでいた。初めはぎこちなかった会話も、回を追うごとに慣れてきたようで、ロールプレイの内容にも学生の工夫が見られるようになった。敬語は最後まで苦戦していたが、学期の初めと比べると上達した様子が見られた。

学期の途中で「ロールプレイのときに相手に任せきりにしている学生がいて不公平だ」とある学生から相談があった。当時はミックス型の授業をしていたこともあり、なかなかクラス全員の様子に注意を払えていなかったと反省した。少々ペアの組みかたを配慮し、全体に向けての注意喚起をした。さらに考えたスクリプトを一人ずつ提出させる機会を設けることによって、怠ける学生が出ないように工夫した結果、この問題はある程度改善されたように思う。

履修者がやや多く、どのようなロールプレイテストのやり方が適しているのか決めかねたため、全3回のテストをそれぞれ異なる方法で実施した。その場で発表させる方法も、録音を提出させる方法もそれぞれに良さがあると感じた。ピア評価をする場合は、録音したファイルを共有して聞き合う方法が学生の時間の融通も聞き効率的で良かったように思う。テストの方法としては、録音を提出させるよりも、教師またはクラスの前でその場で発表させた方が、会話が機械的にならず臨場感があって良かったように思う。学生に聞いてみたところ、録音を提出する方法は何回もやり直しができるからプレッシャーが少なくて良いという声もあったが、その場で一発勝負のテストのほうが気合が入っている、本当に会話しているみたいでいい、という意見も少なからずあった。今後もテストの実施方法については検討していきたい。

(新座)

今学期の履修者は学部2年生と3年生の5名の履修であった。うち1名の学生は授業開始時期にオンラインでの参加であったが、途中から無事入国でき対面での参加となった。ビジネス日本語に関する授業ということで、半数以上の学生が卒業後に日本での就職を希望していた。まだ就職については考え中という学生もいたが、全員自身の日本語力を高めたいと意欲的に参加していた。

今学期は、授業時間内に各回のまとめのロールプレイまで終わらないことがあったため、翌週までの課題としてロールプレイのスクリプトを作成することにした。教師は提出されたスクリプトを翌週の授業の前にチェックして各学生に返しておき、翌週の授業では学生がフィードバックされた内容を確認・訂正してからロールプレイを実施するという方法を取り入れた。この方法により、癖になってしまっている文法的な間違いや表現・語彙の間違いについて、意識的に修正できるようになったと考える。ただ、今学期に履修した学生も基本的な日本語は流暢に話せるものの、敬語については形式的な間違い、方向性による使い方の間違いも多々見られた。授業では、前半に何回かに分けて敬語を復習する時間も取ったが、敬語の形式的なことから復習し、さらに方向性・ウチヤソトといった関係性などを踏まえた

練習まで行うべきであったと考える。今後は、この点についても計画的に取り入れていきたい。

<秋学期>

(池袋)

本授業の履修者は11名であったが、そのうち10名はほぼ欠席もなく、積極的に参加した。本授業の「会議」では、場面を意識できるように社内リクレーションについての会議、「電話対応」では相手がいる場合、不在の場合の社内の人とのやりとり、社外の人とのやりとり、「商談」では商談の流れを意識させるために、地域に特化した商品の売り込みに成功するが、クレームが発生しその対応をするというストーリーで授業を行った。その結果、学生達は「会議」「電話」「商談」のどのパートでも実際のビジネス場面をイメージしながら取り組むことができ、達成感があったという声が聞かれた。また、その際、毎回異なるペアでロールプレイを行ったが、どのペアもお互いに協力してより良い会話ができるように努力している様子が見えられた。ビジネス日本語能力テストの聴解問題では、ビジネス特有の表現が聞き取れないことがあったが、クイズには答えることができ、このクラスは聴解能力が高いと感じられた。

今後の課題としては、すでについてしまっている癖をどう直すかということである。文法的に間違った表現を注意せずそのまま使ったり、日本語の定型表現を覚えていて、場面を考えずにそれを使用してしまったりすることがあった。場面と状況を意識させ、正しい表現を選択し、使えるようにくり返し練習することが重要だと思われる。

<ビジネスのための口頭運用力B>

担当者名：<春学期> (池袋) 平山紫帆

<秋学期> (池袋) 平山紫帆、(新座) 佐々木藍子

授業コマ数：週1コマ

履修者数：<春学期> (池袋) 7名、<秋学期> (池袋) 4名、(新座) 1名

使用教材：なし

コースの目標

ビジネスで必要とされる談話レベルの日本語力を、ソリューション・デザイン型活動を通して身につけ、より高度なビジネス日本語運用能力の獲得を目指すとともに、日本でのビジネスの進め方への理解を深める。

授業の方法

<春学期>

授業の進め方は、初回の授業で「ソリューション・デザイン (SD) 型活動」の狙いや意義、進め方を説明した。2週目以降は、学期を前半後半に分け、前半は「商品開発」、後半

は「問題解決」に関するタスクを提示し、グループごとに SD 型活動を進めていった。

毎回の SD 型活動では、教師は各班を移動しながら活動を見守り、注意すべき口頭表現を記録した。授業の最後には、班ごとに会議の報告をさせるとともに、クラス全体に対して口頭表現のフィードバックを行った。

そして、案が固まった段階で、まず 1 回目のグループ発表を行った。そしてグループ同士でコメントをしあうコンサル活動を行い、その内容を踏まえて発表を修正し、最終プレゼンを行った。プレゼンはフィードバックのために録画した。プレゼン後にはピアフィードバックを行い、翌週、録画を一緒に見ながら教師がフィードバックを行った。

また、この活動とは別に、毎回、ビジネス語彙に関するプリントを宿題として課し、添削して返却するとともに、使い方に注意が必要な語彙については教室で解説した。

<秋学期>

(池袋)

授業の進め方は、初回の授業で「ソリューション・デザイン (SD) 型活動」の狙いや意義、進め方を説明した。2 週目以降は、学期を前半後半に分け、前半は「商品開発」、後半は「問題解決」に関するタスクを提示し、グループごとに SD 型活動を進めていった。

毎回の SD 型活動では、教師は各班を移動しながら活動を見守り、注意すべき口頭表現を記録した。授業の最後には、班ごとに会議の報告をさせるとともに、クラス全体に対して口頭表現のフィードバックを行った。

そして、案が固まった段階で、まず 1 回目のグループ発表を行った。そしてグループ同士でコメントをしあうコンサル活動を行い、その内容を踏まえて発表を修正し、最終プレゼンを行った。プレゼンはフィードバックのために録画した。プレゼン後にはピアフィードバックを行い、翌週、録画を一緒に見ながら教師がフィードバックを行った。

また、この活動とは別に、毎回、ビジネス語彙に関するプリントを宿題として課し、添削して返却するとともに、使い方に注意が必要な語彙については教室で解説した。

(新座)

本授業では、ソリューション・デザイン (SD 活動) の方法を取り入れ、授業を行った。まず、最初の授業で、ソリューション・デザイン型の授業の主旨や目標、進め方について説明し、活動内では会社内のシーンを想定して、会議形式で行うことを周知した。その上で、会議で使用する表現や司会の役割、議事録の書き方を学習した。その後は、「商品開発」と「問題解決」のそれぞれのテーマにつき 5~6 週ずつ使い、「プレタスク」「SD 活動 (会議)」「成果発表のためのプレゼン」「振り返り」という流れを 1 つのセットとして、テーマごとに 2 回行った。プレタスクではそのテーマに関連する用語や概念、背景知識について、ブレインストーミングしながら、学生からキーワードを引き出した。わからなかった用語については、翌週までに調べてきて、授業内で発表し確認した。その後、タスクを提示し、調査や相談をしながら、SD 活動を進めた。2~3 週ほど SD 活動を行ったところで、発表を行ったが、その

際、ポイントとなる点について、事前に確認を行ってから実施し、発表後は教師が上司の立場から、コンサル活動を行った。その内容を踏まえ、発表内容を修正し、最終プレゼンを行った。プレゼン発表の翌週には、プレゼンを録画した動画を見ながら、学生と教師で振り返りを行った。このような流れで2つのテーマについてSD活動を2回行った。この活動のほかには、ビジネス用語に関する語彙クイズも毎週の授業の最初に行った。

結果と課題

<春学期>

今学期は、学生一人一人の向上心が非常に強いだけでなく、お互いに協力し合って高め合おうとする姿勢が強く感じられるクラスであった。毎回のSD型活動では、どちらのグループも活発に意見を交わしながら、プレゼンでよりよい提案ができるよう、話し合いを進めていた。また、プレゼンの直前練習でも、お互いにアドバイスやコメントを言い合い、入念に準備をしていた。そして、発表時の質疑応答でも、ピアフィードバックでも、熱心に質問やコメントを行っていた。今学期は、一部の学生ではなく、クラス全員がそうした姿勢であったというのが大きな特徴である。

今後の課題としては、フィードバックの質の向上を挙げたい。毎回の授業やプレゼンの後にフィードバックを行っているが、今後は、特に毎回の授業でのフィードバックの内容や方法を見直し、より効果的な方法を探っていきたいと考えている。

<秋学期>

(池袋)

今学期は、履修者が4名であったため、2人ずつのグループに分かれて活動を行った。今学期も皆一様に熱心で、協力し合いながら活動を進めていた。商品や解決策のアイディアなども非常に素晴らしいものがあった。

一方、課題も見られた。今学期は2人のグループで、控えめな学生が多かったため、相手の学生が提案するとそれを深く議論する前に受け入れてしまうということが度々あった。2人の際にも、議論が深められるような方法を考えたい。

また、今学期は、会議後の報告やプレゼンテーションにおいて、各論的な説明から始まったり、同じような話が何度も出てきたりするなど、全体の構成が見えにくいと感じることが多かった。今後は全体をわかりやすく伝えるということに、もっと履修者の注意を向けていきたい。

(新座)

この授業では、SD活動のグループをいくつか作り、グループ内やグループ間で互いに話し合ったり、コメントしあったりすることで、学びを深める予定であったが、新座キャンパスのクラスでは受講生が1名であったため、グループで協働するというような活動を行うことがかなわなかった。そこで、活動の際には、教師は先輩社員役、受講生の学生は後輩社

員役となって会議を行いながら、進めていくこととした。教師は、受講生が各課題を進める中で悩んでいる点について助言や軌道修正を行ったり、悩んでいる点、どう進めればよいかわからない点について受講生自身が内省できるような発問を行ったりして、SD 活動を見守るようにした。

また、受講生は2回のSD活動を1人で進めることになったため、会議の議事録やプレゼンテーションの資料作成など毎回全て1人で行う必要があった。しかし、この受講生は日本語学習に非常に熱心な学生だったため、とても意欲的に頑張る様子が見られ、全ての活動を1人で行った。受講生が1人ということもあり、フィードバックもその受講生に合わせ、具体的などころまで指導することができ、受講生自身の満足度も高かったようである。

このクラスでは、複数のグループが作れなかったため、成果発表のプレゼンテーションの際には、ボランティア学生に参加してもらうよう試みたが、学期末ということも相まって協力者が集まらなかった。そのため、日本語教育センターの先生にご協力いただいた。たくさんコメントをいただき、学生も非常に勉強になったと喜んでいて、結果的には良かったが、今後は受講生が1名であった際の方法について、もう少し検討する必要があると考える。

<ビジネスメールと文書>

担当者名：<春学期>（池袋）谷 啓子

<秋学期>（池袋）谷啓子（新座）鹿目葉子

授業コマ数：週1コマ

履修者数：春学期（池袋）8名、秋学期（池袋）10名、（新座）7名

参考教材：村野節子、山辺真理子、向山陽子（2015）『タスクで学ぶ日本語ビジネスメール・ビジ

ネス文書 適切にメッセージを伝える力の養成をめざして』スリーエーネットワーク

川島冽（2008）『5分で送信 ビジネスメール速書き文例集』すばる舎

コースの目標

日本語の書き言葉によるコミュニケーションについての理解を深めながら、ビジネスメール、報告書、依頼状などの様々なビジネス文書の読み方、書き方について学び、使えるようになる。

授業の方法

<春学期>

授業はメイン教材にそってビジネスメールとビジネス文書の特徴について学び、実際に作成するという方法で進めた。

テキストでは舞台となる企業や登場人物が設定されており、各課は「クレームを言う」「人を紹介してもらおう」等、ビジネス場面で起こりうる状況でビジネスメールや文書を作成する課題が課せられる。毎回の課題は期日までに blackboard に提出してもらい、担当者が添削、コメントを入れて次回の授業前に返却するようにした。

各回の授業の流れは、①前回の課題へのフィードバックと関連する表現のフォロー、②新しい課の状況把握→「役に立つ表現」「練習問題」、③新しい課の課題説明→時間が余れば課題作業、であった。

時間内は特に①のフィードバックに重きを置いた。毎回1名の作成例を全体共有し、作成者に迷った点を話してもらい、クラスメイトからコメントをもらってから解説に入るようにした。第4～5回頃までは担当者がすぐ解説をしたが、中盤以降、全員がメールの流れや敬語に慣れてからは、まず要修正の作成例を見せ、どこを直したらいいか、なぜか、をクラスで意見を出し合った後に解説するようにした。また③課題については授業時間内に一緒にメールの大きな流れを考えたり、その場で作成して共有したりすることもあった。

なお、メインテキストの他、議事録や稟議書については補足資料の作成と配布、メール例などは他教材を利用したり、実物を見せたりすることで、よりビジネスシーンへのイメージを高めてもらうようにした。議事録作成は教材に沿った会議音声聞いてメモをとったものを仕上げ、印刷したものを見せ合い、レイアウトも含め検討した。

<秋学期>

授業はメイン教材にそってビジネスメールとビジネス文書の書き方や使える表現を学び、実際に作成するという方法で進めた。各回は、①前回の課題へのフィードバック、②新しい課の状況、「役に立つ表現」とそれに関する使い方などの説明、練習問題、③課題説明後、各自課題作業、という流れであった。課題は期日までに blackboard に提出してもらい、添削、コメントを入れて次回の授業日までに返却した。回によっては blackboard ではなく、実際のメールに作成した文書を添付して担当者に送付する練習も行った。メイン教材の他、敬語やメール事例などは他教材を利用したり、教師個人のビジネス経験を話すなどして、よりビジネスの現場を知ってもらうよう努めた。また、課題のフィードバックでは、クラスメイトの回答例を参考に、良い点、改善点をみんなで確認しあった。最終課題はビジネスメールと議事録の作成を行った。

結果と課題

<春学期>

(池袋)

春学期は全員入国済の学部生だったため、初回より対面授業となった。履修者は学部の2～4年生で、「将来日本で活躍したい／就職活動のため」と履修の目的意識がはっきりしている学生が多かった。また、アルバイトやサークル活動で敬語の使用に迷うことがあるので、

という声も聞かれた。久しぶりの全員対面授業だったが、中には入国したばかりで入学後初の対面という 3 年生もおり、自己紹介の際に自然に出る拍手やグループワークで相手の反応が分かるなど、対面コミュニケーションの良さを感じた。

1 名履修中止が出たが、それ以外の 7 名は熱心に参加し、毎回の課題も全て提出した。毎回のフィードバックの際に作成例を全体共有・検討したこと、第 9 回頃からは全員の作成例から、テキスト解答例には無いが特に良く書いていて皆の参考になる部分を全体共有したことが課題のモチベーションにつながったのではないだろうか。

学期前のコーディネーターとの打ち合わせを受けて、今期より進度を見直し、前半の基本パートと敬語復習に余裕を持たせるようにしたところ、フィードバックにおける敬語の修正が例年より早い時期に減った印象である。また、先学期までは基本で扱うビジネス「文書」と「メール」の違いがしばらくあやふやなままの学生が見られたが、今期は殆ど見られなかった。その他今期の改善点としては、各課に登場する企業や人物の関係性を中心に、これまでより状況を詳しく説明するようにした。これは学生との雑談の中で「次々新しい人が出て来ると覚えられない」という声を聞いたためである。

授業時間内に課題メールを作成する場合、すぐに取りかかれる学生と、学期後半でも考え込む学生に分かれた。個々のスタイルの違いもあるが、大まかなメールの要素と流れが頭に入っているかどうか一因だと感じた。構成要素と流れは基本パートで学ぶが、その後も簡略化したものを見せる（または必要に応じて見られるようにする）、どこで「役に立つ表現」が使えるかヒントを与えることで、各課で学んだことを活かして効率的に作成できると思われるので次期への課題としたい。

<秋学期>

(池袋)

今期は全対面授業であったが、1 回のみ担当者コロナ罹患のため ZOOM 双方向で実施した。履修者は学部・特外の 2 年～4 年生で、最後まで参加した 8 名は授業と毎回の課題にしっかりと取り組んだ。

授業では学生の前回課題の作成例から特に説明が必要と思われた部分について全体にフィードバックを行った。当初、慣れないうちは説明に受け身であったが、徐々に敬語やビジネスメールの感覚が身に付き、フィードバック時には修正すべき点に気付いたり、よりよい表現について意見が出てきたりするようになった。学生からもメールを書くスピードが速くなった、定型を覚えたので途中まで迷わず打てるようになった、という声が聞かれた。

使用テキストにそってビジネス文書も一定の書式で練習したが、近年は社内クラウドが進んでいる企業も多く、書式は多様化している。日本での就職を意識している学生もいるので、最近のビジネス現場の状況も適宜紹介しながら進めていくことが望ましい。

(新座)

今学期は対面の授業で実施し、当初 7 名の参加であったが途中から 6 名になった。授業では、学生が主体的に課題に取り組むことを目的としたため、内容については端的に説明をした。クラスはアットホームな雰囲気、各自が自分のペースで課題に取り組んでいた。大半が日本での就職を希望していることから、メール内の言葉の選択や使い方、相違点について積極的に質問をし、ビジネスメールを学ぶことに高いモチベーションを持って臨んでいた。また、今後役に立つ授業であるという意見も聞かれた。今後の課題として、就職前の学生であることから、「書く」ことだけに焦点をあてるのではなく、ビジネスに求められる能力や知識も含めた授業作りが望ましいと考える。

2022 年度 Japanese Language and Japanese Culture A、B 授業記録

コースの概要

すべての特別外国人学生を履修対象とし、履修のための日本語レベルは問わない。日本語という言語に関連する文化的・歴史的背景や事例を日本語の言葉や表現とともに学ぶ。

<Japanese Language and Japanese Culture A>

担当者名:<春学期>小松満帆

授業コマ数：週 1 コマ
履修者数：春学期 12 名
使用教材：独自教材

コースの目標

日本語という言語に関連する文化的・歴史的背景や事例を日本語の言葉や表現とともに学び、さまざまな日本文化の体験を通して、日本語という言語に対する興味を深め、日本語という言語を知ることが目的とする。

授業の方法

日本の地理と観光、生活習慣、県民性、お笑い、アニメ、祭り、踊りというテーマで、日本の文化・歴史的背景を学んだ。学生によるブレインストーミングを経て、講義を行い、テーマについてのディスカッションを行った。途中、地域の子育てアソシエーションで活動されている医学療法士の方をゲストに招き、「日本の子育てと子どもの遊び」というテーマで講義をしていただいた。また、学期中、日本人学生を招いてのディスカッションを 3 回実施した。学期途中で Show&Tell (個人による短い発表)、中間プレゼンテーション (グループ) を行い、学期末には、授業で扱ったテーマについて、自身の経験や自国・地域の状況と比較しながら考察するレポートと、その内容について発表するプレゼンテーションを課した。なお、授業は、学生の日本語レベルに合わせ、すべて英語で行った。

結果と課題

正規学部生 1 名、特別外国人留学生 12 名が履修登録したが、うち 1 名が一度も出席しなかったため、11 名で授業を行った。学期開始当初は 1 名のみが対面、10 名がオンラインという状況であったが、学期の途中にオンライン受講の学生全員が渡日を果たしたため、学期の後半は 11 名全員が教室に集まって、授業を行うことができた。アメリカ、インドネシア、タイ、ドイツ、モロッコ、台湾、スウェーデンという幅広い背景を持つ学生が集まったため、ディスカッションなどでも、各国と日本とを比較することで、扱ったテーマについて、より理解を深めることができたと思われる。また、意欲の高い学生が多く、発言も多くなされ、意見交換が活発に行われた。

学期途中に実施した Show&Tell では、1 枚写真を見せ、自分と日本文化との出会いについて 1 分間で話す、という短いプレゼンテーションを行った。また、中間プレゼンテーションでは、グループで日本の都道府県 1 つを選び、その説明と観光における工夫や努力について発表してもらった。いずれの活動においても、オリジナリティの高い、興味深い内容が発表され、グループワークでは、ちょうど渡日の時期と重なった学生が多かったが、SNS などを利用し、グループメンバーと密に連絡を取り合いながら、効率よく担当を決め、互いに助け合い、短い時間で完成度の高い発表を準備することができた。

ゲストスピーカーには「日本の子育てと子どもの遊び」というテーマで、日本で（特に東京で）子育てをしていく難しさや解決策、ご自身がなさっている「プレイリヤカー」の活動（子どもの遊び道具を載せたリヤカーで公園等を回り、子どもたちに自由に遊んでもらいながら、保護者たちとの繋がりを広げようという活動）および日本の伝統的な遊びについてお話しいただいた。ゲストスピーカーから学生に対し、「プレイリヤカー」にどんな道具を載せておいたらよいかを考える、というディスカッションテーマを出していただいたが、学生からは、各自の経験も交えつつ、ユニークな提案が複数なされた。後日、学生たちにはリアクションペーパーを提出させたが、日本の子育てや遊びについて、新たに多くのことを学んだ、という好意的な感想がほとんどであった。

学期末のプレゼンテーションおよびレポートでは、それぞれがよい着眼点でテーマを設定し、授業で学んだ内容をさらに深めた興味深いものが多かった半面、何人かは、レポートやプレゼンテーションの経験が少なく、明確な結論がなく、状況を報告しただけ、というものも散見された。今後の課題としては、内容面のサポートだけでなく、必要な学生には、レポートやプレゼンテーションの基礎的な部分からきちんと指導していく必要がある。

<Japanese Language and Japanese Culture B>

担当者名:<秋学期>小松満帆

授業コマ数:週 1 コマ

履修者数:秋学期 35 名

使用教材:独自教材

コースの目標

日本語という言語に関連する文化的・歴史的背景や事例を日本語の言葉や表現とともに学び、さまざまな日本文化の体験を通して、日本語という言語に対する興味を深め、日本語という言語を知ることが目的とする。

授業の方法

日本の歴史、冠婚葬祭、防災、労働、スポーツ、音楽というテーマで、日本の文化・歴史的背景を学んだ。学生によるブレインストーミングを経て、講義を行い、テーマについてのディスカッションを行った。途中、国家機関において農業政策を専門とされる方をゲストに招き、「日本の農業と食」というテーマで講義をしていただいた。また、2回の授業を利用し、「アニメ・アテレコワークショップ」も行った。ワークショップでは、役割語・キャラクター表現について学んだあと、マンガ・イラストの1シーンの台詞を考える、アニメのシーンにオリジナルの台詞をあて、アテレコ体験をする等の活動を行った。学期中、学生のディスカッションに参加してもらうことを目的として日本人学生ボランティアを3回募集したが、残念ながら1名ずつしか参加がなく、日本の状況や経験について紹介してもらうにとどまり、履修学生全員が日本人学生と話す機会を設けるのは難しかった。課題としては、数回のリアクションペーパーの提出、質問シートの提出、中間レポートとして Show&Tell（日本との初めての出会いについて、写真を1枚以上添付して紹介するショートレポート）を課し、学期末には、授業で扱ったテーマの中から自由にテーマを選択し、自身の経験や自国・地域の状況と比較しながら考察するプレゼンテーションを実施し、期末レポートとして、その内容をまとめる課題を課した。プレゼンテーションは、履修者数と時間の都合から、グループで行った。なお、授業は、一部の学生の日本語レベルに合わせ、ほぼすべて英語で行った。

結果と課題

正規学部生2名、特別外国人留学生33名が履修登録したが、うち1名が途中で履修を取りやめたため、最終的には34名でのクラスとなった。アジア、アメリカ、オセアニア、ヨーロッパからの学生が履修し、自身の経験や各国の状況と比較しながら、活発に議論が行える授業となった。クラスサイズが大きかったため、クラス全体で発言する学生は限られていたが、意欲の高い学生が多く、グループに分かれてのディスカッションでは発言も多くなされ、意見交換が活発に行われた。

学期途中に実施した Show&Tell では、これまでの学期はクラス内でショートスピーチを実施していたが、履修者が多かったため、ショートレポートを提出するように変更した。写真を1枚以上添付し、日本／日本文化との初めての出会いについて紹介する、という内容であったが、多くの学生がアニメやマンガを取り上げており、アニメ・マンガコンテンツの世

界での広がりを見直しを再確認させられた。

ゲストスピーカーには「日本の農業と食」というテーマで、埼玉県庁にて農業政策を担当されている方をゲストに招き、日本の食料自給率や食品の輸出入、日本の食の将来について講義をいただき、意見交換を行った。主な日本食については知っていたり、食べたことがあったりする学生は多いが、日本の食糧事情について知っている学生は少なく、リアクションペーパーでも高い関心が窺えた。

学期末のプレゼンテーションおよびレポートでは、それぞれがよい着眼点でテーマを設定し、授業で学んだ内容をさらに深めた興味深いものが多かった半面、意見や考察、結論がなく、ただ情報を列挙しただけのものや、参考文献が提示されていないものなど、指示に従っていないものも見られた。人数が多く、全体を把握し、指導しきれなかったことが反省点である。

<Japanese Language and Japanese Society A>

担当者名：小森由里

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 6 名

使用教材：独自教材

コースの目標

日本語という言語に関連する社会的・歴史的背景や事例を日本語の言葉や表現とともに学び、日本語および日本社会への理解を深めることを目的とする。

授業の方法

日本語および日本社会に関するテーマを毎回 1 つずつ取り上げた。地域方言、社会方言、名前の変遷、ボディランゲージ、日本語の表記体系、日本の教育制度などである。授業は、冒頭にそれぞれのテーマについて 10 問ほどの質問を学生に投げかけて考えさせた後、講義を行いながら質問の答えを示すという形式で進めていった。授業後半には、各テーマについて日本と学生の出身国とを比較させ、類似点および相違点についてグループでディスカッションさせ発表させるなどして、学生の積極的な参加を促した。また、ビジターセッションを 3 回設けて日本人学生と交流する機会を取り入れた。3 回のセッションでは、授業で扱った「地域方言」「社会方言」「名前(ファーストネーム)」「教育制度」について日本人学生にインタビューさせ、その結果を発表させた。さらに、ゲストスピーカーとして神主を招き、神道や神社について講義をお願いした。その翌週の授業では、ゲストスピーカー宛てにお礼状を書く活動も取り入れた。期末レポートは、授業で扱ったテーマの中から 1 つ選択させ、日本と学生の国の状況を比較してまとめさせた。期末レポートについては学期の最後のクラスで一人ずつ発表させた。

結果と課題

コース前半は、履修生 6 名のうち 5 名がオンラインでの出席だったが、後半には渡日することができ全員で対面授業を行った。学生 1 名がコース前半は休みがちだったが、後半は 6 名そろって授業をすることができた。学生の日本語力は入門・初級から中上級レベルまでさまざまだったため、授業はすべて英語で行った。学生たちは毎回熱心にディスカッションに参加し、授業後に提出させたリアクションペーパーからいずれのテーマにも関心を持って取り組んでいたことが読み取れた。また、コース最終日の振り返りから、学生たちが最も興味を持ったのはゲストスピーカーによる神道の講義だったことがわかった。学生たちにとって神主による講義および龍笛の演奏は初めての経験で、直接さまざまな質問ができたことが印象的だったようである。3 回のビジターセッションにおける日本人学生との交流も非常に好評であった。

一方で、コースの振り返りの際に、過去には本コースで茶道を経験することができたのに、今学期は茶道のクラスがなく残念だったという声があがった。コロナ禍のため対面授業であってもさまざまな制約があるが、徐々にかつての授業内容に戻していければと思う。

< Japanese Language and Japanese Society B >

担当者名：小森由里

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：秋学期 27 名

使用教材：独自教材

コースの目標

日本語という言語に関連する社会的・歴史的背景や事例を日本語の言葉や表現とともに学び、日本語および日本社会への理解を深めることを目的とする。

授業の方法

授業では、日本語と日本社会に関するテーマを毎回 1 つずつ取り上げた。テーマは、日本の祝祭日、人称詞、敬語、短歌・俳句、色・動物のイメージ、日本の食生活、衣生活、住生活、日本の社会問題などである。毎回テーマについて講義をしたうえで、クラスでディスカッションや発表をさせて学生の積極的な参加を促した。日本人学生にも 3 回参加してもらい、色・動物のイメージ、呼称や敬語についてインタビューする活動や、日本人学生に協力してもらい短歌・俳句を作るという体験学習も行った。また、ゲストスピーカーとして神職を招き、日本の神話と雅楽についての講義をお願いした。期末レポートでは、色や動物のイメージ、呼称、敬語のほかに、コースで扱ったテーマの中から 1 つ選択させ、日本人を対象に調査を行ったり学生の国と日本との比較をさせたりしてまとめさせた。

結果と課題

コース前半は出席率が高かったものの、後半は体調を崩し欠席する学生が目立った。ただ、授業中は熱心でクラス内活動に積極的であったため、大きなクラスだったが運営しやすかった。学生の日本語は初級、中級、上級とレベルがまちまちなため講義は英語で行った。授業では日本語や日本社会に関するさまざまなテーマを取り上げたが、リアクションペーパーから、学生がどのテーマにも興味を持って取り組んでいたことが読み取れた。また、最終クラスで行ったコースの振り返りから、ゲストスピーカーによる日本の神話、日本語の色・動物のイメージに学生たちがとりわけ関心を持ったことがわかった。日本人学生の助けを借りながら短歌・俳句を作成したことが印象的だった、敬語の講義や日本人学生へのインタビューを通して敬語の理解が深まったというコメントも多かった。特に、ビジターセッションで日本人学生との交流を楽しんでいたことがうかがわれた。毎回多くの日本人学生が協力してくれたお蔭である。一方で、書道に挑戦してみたかった、着物を着てみたかったというコメントがあり、対面授業になっても、コロナ禍以前の授業形態に戻れないことが残念である。

2022 年度 日本語演習 授業記録

コースの概要

演習科目は、初級、初中級レベルの日本語を用いて、内容を学ぶ科目であり、演習 1 は J2 レベル、演習 2 は J3 レベル、演習 3 は J4 及び J5 レベルの学生を対象とするものである。演習科目は、いわゆる語学の科目ではなく、学生が身につけているレベルの日本語を「道具」として用いながら、演習 1 では「アニメ／日本の歌」、演習 2 では「映画／まんが」、演習 3 では「小説／詩」について内容理解を目指す科目である。

演習 1～3 の詳細は以下の通りである。

<演習 1>

担当者名：<春学期> 末松史、<秋学期> 鹿目葉子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 1 名、秋学期 8 名

使用教材：独自教材

コースの目標

日本のアニメや歌を取り上げ、それらの作品を通して、現代日本の社会や文化、日本人の考え方などについての理解を深める。

授業の方法

<春学期>

3つのメインテーマ「1. アニメ聖地巡礼—アニメを利用した都市開発・地域活性—」、「2. アニメと四季—一年中行事と企業戦略—」、「3. アニメと学校—日本と自国の学校生活の比較—」を授業で取り上げた。それぞれの内容に関わる日本のアニメや歌を部分的に視聴し、そのテーマについて学習し、理解を深めた。適宜クイズや質問をし、気づいたことを話し合ったり、学生の自国と比較をしたりしながら授業を行った。2回のビジターセッションがあり、テーマに関するインタビューやディスカッションを行った。学期末には授業で学習したテーマの中から1つ選び、授業の内容やビジターセッションで学んだことを活かし、自国と日本との違いや、その背景についてまとめることを発表とレポート課題とした。

<秋学期>

長編アニメ1本を視聴し、毎回タスクシートとディスカッションを行った。また、2回のmini作文と3回の発表を課題とした。さらに、ビジターセッションを2回実施した。タスクシートは、「見る前に」「内容理解」「セリフから考える」に分け、「見る前に」では、日本文化に関して今持っている知識で問いに答え、自国の文化と比較した。「内容理解」ではアニメ視聴後、アニメの内容だけではなく、アニメ内の日本文化に関して考えた。また、「セリフから考える」では、登場人物がなぜそのセリフを発したのかについて、文化的背景から考えディスカッションをした。プレゼンテーションは「私の好きなアニメ」「私の好きなアニソン」について、自分なりの観点から分析をして発表をした。また、最終発表では、「比較」をテーマに2つのアニメを取り上げて発表をした。主な使用言語はJ2レベルの簡単な日本語であるが、英語も使用した。

結果と課題

<春学期>

受講者は1名であったが、テーマについて積極的に学び、課題や宿題に真剣に取り組むだけでなく、テーマについて予習や、前回の授業に対するコメントや質問も準備して、授業に参加していた。

全2回のビジターセッションはとてもいい機会となった。学生1名に対して複数の学生ボランティアが参加し、活発なディスカッションを行うことができた。学生にも、学生ボランティアにも相互的にいい学びの場を設けることができた。この授業を通して日本に対する理解を深められたことはもちろん、改めて自国の文化について考えるきっかけになったようだ。

今後の課題としては、ディスカッション以外の活動も取り入れて、よりアクティブな学びの時間を提供できる工夫をすることである。

<秋学期>

受講者は 8 名であった。今学期は対面での授業であったことから、ディスカッション等の活動が盛り上がりを見せた。授業に積極的に参加し、お互い助け合いながら課題に取り組んでいた。プレゼンテーション後の振り返りをみると、クラスメートからプレゼンテーション技術や表現の仕方など、多くのことを学んでいることがわかった。

その一方で、既習の日本語を更に使用する頻度を上げるための工夫が課題である。

<演習 2>

担当者名：<春学期>井上玲子

<秋学期>小澤雅

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 2 名、秋学期 6 名

使用教材：独自教材

コースの目標

日本の映画、マンガ、ドラマをテーマとして授業を行う。毎学期、いくつかの作品を取り上げ、それらの作品を通して、現代日本の社会や文化、そして日本人の考え方などについての理解を深める。また、このクラスは「日本語」の授業ではなく、これまで参加者が勉強してきた日本語を「道具」として使って日本文化や日本社会を学ぶことを目標としている。

授業の方法

<春学期>

日本の「衣食住」を理解することを目標に授業を展開した。授業では、「和食」「弁当」、「制服」、「日本の家」等のテーマを取り上げ、①日本文化・社会の導入、②母国との比較、③テーマに合った内容のドラマや映画を視聴、④ディスカッション・発表という順で進めていった。②と④を行う際には、母国との違いや感想を述べるだけでなく、その背景や理由まで考えさせるように工夫した。また、学期中盤には、日本と自分の国の違いを紹介するプレゼンテーションを行い、学期末には、授業で学習したテーマの中で気になっていることを一つ取り上げ、自分の国と日本との違いや、その背景についてまとめることを、レポート課題として提出させた。

<秋学期>

「日本の衣食住」をテーマとし、「和食」「弁当」、「制服」、「日本の家」等のトピックを取り上げた。それぞれの内容に関わる日本のドラマ、映画、アニメ、ドキュメンタリーを部分的に視聴し、気づいたことを話し合ったり、自国の状況を紹介しあって比較を行ったりした。また、学期の途中には、自分たちの国の作品を紹介し、そこから読み取れる文化的な特徴や

日本文化との違いを分析するプレゼンテーションも行った。学期末には授業で学習したテーマの中で得に興味を持ったものを一つ取り上げ、自分の国と日本との違いや、その背景についてまとめることをレポート課題として提出させた。

結果と課題

<春学期>

今学期は、2名の学生が履修した。前半の2ヶ月間は入国できず、オンラインでの参加だったが、2名共5月末に入国し、後半は教室で直接顔を合わせて話し合いをすることができた。2名はJ3クラスと一緒に勉強しているクラスメートであったため、話し合いも初回の授業からスムーズに行うことができた。

履修学生は、初回の授業から積極的に日本語を使用して発言していた。学期の前半では、わからない言葉を英語で言ったり、教師に日本語でどのように言うかを聞いたりして発言をしていたが、授業回数を重ねるごとに自分自身で辞書を調べて発言するようになっていった。ドラマや映画の視聴前後に書くワークシートや期末レポートでは、履修学生はJ3レベル以上の語彙や表現を積極的に使用して書いていた。

学期中盤に行ったプレゼンテーションでは、非常に面白い内容のトピック（服装の比較、マナーの比較）を取り上げて発表した。プレゼンテーションの日には、学生ボランティアにも参加してもらったが、学生ボランティアからの質問にも丁寧に日本語で答えていた。プレゼンテーションの後に、日本文化についてのディスカッションの時間を設けたが、履修学生も学生ボランティアも積極的に交流していたのが印象的だった。ディスカッションの時間があまり多く取れなかったのは残念であったが、お互いの文化を共有する場を作れたのではないかと思っている。

<秋学期>

履修者は皆、日本文化に対して非常に関心が高く、「衣食住」に関する毎回の課題にも熱心に取り組んでいた。履修者の国籍は米国（三名）、台湾（二名）、豪州（一名）であったので、それぞれの国の社会や文化を紹介しながらディスカッションを行った。日本語のレベルに多少の差はあっても、それぞれが積極的に参加し、毎回深く議論することができていた。また、プレゼンテーション発表日には、学生ボランティア数名に参加してもらい、日本人学生とのディスカッションも活発に行なわれた。履修している学生達にとっては、日本語で発表したり日本人学生とディスカッションをしたりすることで自信がついたようだったし、日本人学生にとっては新しい考え方を学べて刺激的だったそうで、有意義な機会となった。課題としては、作品を流す際に字幕（できれば英語）があった方が内容理解に役立つことを考えると、教師側が用意できる作品が限られてしまうという点があるが、コーディネーターの先生のおかげで学期を通して様々な作品を扱うことができたので、学生達は非常に満足していたと思う。

<演習 3>

担当者名：<春学期>金庭久美子、<秋学期>金庭久美子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 10 名、秋学期 6 名

使用教材：『レベル別日本語多読ライブラリー にほんご よむよむ文庫』アスク出版、
青空文庫、NHK for school 「おはなしのくに」、たどくのひろば
星新一『きまぐれロボット』角川つばさ文庫、など

コースの目標

プレースメントテストで J4、J5 レベルにプレイスされた学生を対象とする。これまでに習った日本語の語彙や文型を用いて、できる限り日本語で授業を進める。参加者が「道具」として日本語を用いることによって、授業を理解し、日本の小説や詩についての理解を深めることを目指す。

授業の方法

<春学期>

クラスでは短編小説、川柳、短歌、詩を扱った。授業では精読はせず、担当者があらすじや感想について発表をした後で、担当以外の学生とその話についてディスカッションを行った。毎回、小説を読んだあと、ブックレポートの宿題を課した。

今学期はオンラインで公開されている青空文庫や NHK for school 「おはなしのくに」等を使用した。そのほか、学期末にはオンラインで公開されている多読教材(たどくのひろば)を紹介し、そこから各自好きなものを選んで読んだ。最後にビブリオバトルで本の紹介をして、レポートも提出させた。

<秋学期>

今学期は、読み物として、芥川龍之介『白』、『魔術』(青空文庫)、星新一『きまぐれロボット』(角川つばさ文庫)、詩は中原中也「サーカス」(青空文庫)、高村高太郎「レモン哀歌」(青空文庫)を取り上げた。芥川、中原、高村の作品に関しては、教師主導で進めたが、星新一『きまぐれロボット』は、1日に2つの読み物を読むこととし、それぞれの担当者がストーリーに対して、クラスメイトへの質問を1頁につき2つ以上用意させ、足りないところは教師が内容確認の質問をするという形で進めた。最後に『きまぐれロボット』で未読の読み物の中から好きなものを選び、ストーリー紹介と感想を発表させ、どの読み物が読みたくなったかについて投票を行った。毎回の読み物に対しては、ブックレポートを書かせた。

結果と課題

<春学期>

このクラスは 10 名（1 名長期欠席）でスタートした。また、1 名海外におりミックス型授業で開始したが、5 月 27 日からは 9 名全員、教室での対面授業に移行した。非常に学習意欲が高く、毎回きちんと宿題をしてきた。毎回読み物のその作家や時代背景について紹介したうえで、物語の内容について話してもらったので、なぜそのような物語が書かれたのかということについて考えながらディスカッションを進めることができた。

最後のビブリオバトルの本の紹介はどの学生も自分の好きな読み物だけあって、読んだことのない人にもうまく伝わるように準備していて非常によかったが、最後の話し合いを学生主導で行った結果、司会の進め方がうまくできない者もあり、クラスメイトの意見が十分に得られない者もいた。

今後の課題は、教材の拡充である。できるだけ多くの教材を用意し、学生達が自主的に選べるようにしたいと思う。

<秋学期>

このクラスは 6 名で、特外生 5 名、大学院生 1 名のクラスであった。全員ほぼ欠席がなく、毎回の授業のブックレポートも期日までに提出した。芥川龍之介の読み物は、旧仮名遣いがあり語彙が難しいところもあったが、ストーリーの内容は理解できたと思う。星新一の『きまぐれロボット』は今回初めて取り入れ、全員に貸し出し用の本を用意した。学生達には辞書なしで読めると好評だった。全部で 27 のストーリーがあるが、クラスで一緒に読んだ読み物が 11、発表会でそれぞれが読んだ読み物が 6 つであった。自分で選んだ読み物に対し、読解のための質問を作ってくるという課題を与えたが、どの学生もこちらが想定する以上のよい推論の質問を考えてきており、1 頁ずつ学生達と読み、担当の学生が質問すると言うやり方でいった。1960 年代に書かれたものと思われないほど、現代の科学にも通じるところがあり、読んだ後のディスカッションでは科学の進歩について話し合うことが多く、学生達の発想に驚かされた。詩は初日と最終日に扱ったが、高村光太郎の「レモン哀歌」については、ある学生から「80 年以上前に生きていた人の経験と感情を理解し、感動させるのは詩や文芸などの本質だと思う」というコメントをもらい、この詩を扱ってよかったと思った。

今後の課題は、やはり学生のレベルにあった読み物を用意するという事だろう。今回扱った星新一の読み物は J4、J5 レベルの学生にちょうどよい読み物だったと思われるが、長すぎず、短すぎず、楽しめる読み物をこれからも開拓していきたい。

2022 年度 総合日本語 4～6 授業記録

コースの概要

J4～J6 の学生を対象とする。学生が知識として持っている文型や語彙を、日常生活のみ

ならず、大学での学習や研究活動の様々な場面で活用できるレベルに高めることを目指す。

<総合日本語 4-6A>

担当者名：鹿目葉子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 5 名

使用教材：独自教材

コースの目標

J4 から J6 の学生を対象とする。学生が知識として持っている文型や語彙を、日常生活のみならず、大学での学習や研究活動の様々な場面で活用できるレベルに高めることを目指す。

授業の方法

読解を中心に、内容確認やディスカッション、発表を行った。扱ったテーマは、「観光地」「祭り」「江戸しぐさ」である。読解教材は、同じ内容でレベルの異なるものを準備し、授業外でレベルに合った読解文を読み、質問に答えることを宿題とした。また、読解で扱った「観光地」「祭り」に関する作文の宿題を 2 回出した。毎回の授業には TA が参加し、ディスカッション、作文のフィードバック、学生の個別作業中のフォロー、発表用 ppt の作成例など、授業活動に積極的に関わった。

結果と課題

J5 の学生 2 名と J6 の学生 3 名の履修者であった。途中、1 名の学生が体調不良で参加しなくなったが、残り 4 名は積極的に授業に参加し、課題等に熱心に取り組んでいた。ミックス型の授業であったが、学生達はチームワーク良く、助け合いながらグループ活動を行っていた。TA も各学生とコミュニケーションを図りながら、学生の質問に答え、個別作業のフォローをし、学生らが作業に取り組みやすい環境作りをしていた。授業では、作文とリライイト 2 回、発表 4 回を課したが、回を重ねるごとに、ライティング力とプレゼンテーション力の向上を感じた。学生からは、クラスメイトとの話し合いや発表を通して、自分に足りない部分を見直すことができ、新たな考えや知識を獲得できたことが良かったという好意的な意見が聞かれた。課題としては、TA との交流や活動の効果的な取り入れ方や様々なツールの利用など、授業作りを工夫していきたい。

<総合日本語 4～6B>

担当者名：三浦綾乃

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 4 名

使用教材：独自教材

コースの目標

J4 から J6 の学生を対象とする。学生が知識として持っている文型や語彙を、日常生活のみならず、大学での学習や研究活動の様々な場面で活用できるレベルに高めることを目指す。

授業の方法

本授業は VTR を素材とし、「スマホの使用」「若者の消費行動と価値観」「イクメン」の 3 つのテーマから現代日本を考えた。各テーマは 3~4 週に 1 つのペースで学習を進めた。1 週目はテーマの導入・ウォーミングアップ→事前に配布した語彙リストの言葉の意味を確認（意味を調べてくるのは宿題）→VTR を視聴→内容確認を行った。VTR は前半と後半に分けられているため、2 週目は 1 週目と同様の流れを繰り返した。3 週目はテーマについてディスカッションをしてクラスで意見を共有し、さらに発展的な活動としてミニプレゼンテーションまたは作文を行った。各テーマの終わりには学習した語彙や表現を復習するためのプリントを配布した。最終課題のプレゼンテーションは、授業でメインとして扱った 3 つのテーマの中で最も興味を持ったものを選び、視点を絞ってプレゼンテーションを行った。発表に際しては、資料としてレジюмеを作成した。

結果と課題

学期の初めはオンライン授業であったが、途中から全員日本への入国が叶い、完全対面授業となった。1 名、途中から全く出席せず、最終的に 3 名という小さいクラスになってしまったが、明るく真面目な学生達であった。多少の日本語のレベル差はあったが、互いを尊重し合い、興味を持ちながら学び合う姿が見られた。また、このクラスには TA が参加してくれたため、学生は教師以外の日本語母語話者と話す機会が多かった。「日本語の会話が上手になりたい」と話していた彼らにとって、TA がいることは非常に有意義であった。クラスではプレゼンテーションやディスカッションなど、話す機会を多く設けた。ディスカッションは録音し、再生しながら日本語の文法・表現をフィードバックした。初めは恥ずかしがっていたが、熱心に教師と TA からのフィードバックに耳を傾けていた。授業で習った語彙や表現を使って意見交換ができるようになり、日本語の上達を感じた。

ただし、履修者が 3 名だったため、ディスカッションの際に 1 つのグループしか作れなかったため、常に同じメンバーとのディスカッションになってしまったのが残念であった。また、途中で学生の理解度に合わせて課題のスケジュールを調整したが、終盤に課題の提出が重なってしまい、学生の負担になってしまった。授業の進度とのバランスを取りながら、課題の量と提出のスケジュールにもう少し余裕を持たせたい。これを今後の課題としたい。

<総合日本語 4-6C>

担当者名：鹿目葉子

授業コマ数：週 1 コマ
履修者数：秋学期 6 名
使用教材：独自教材

コースの目標

J4 から J6 の学生を対象とする。学生が知識として持っている文型や語彙を、日常生活のみならず、大学での学習や研究活動の様々な場面で活用できるレベルに高めることを目指す。

授業の方法

読解を中心に、内容確認やディスカッション、発表また作文を行った。扱ったテーマは、「若者」と「日本の外国人」である。読解教材は、J4、J5、J6 それぞれのレベルに合ったものを用意し、語彙リストを添付した。授業外でそれぞれのレベルに合った読解文を読み、質問に答えることを宿題とした。また、読解で扱った「若者」と「日本の外国人」に関する作文の宿題を 2 回出した。毎回の授業には TA が参加し、ディスカッション、作文のフィードバック、学生の個別作業中のフォロー、発表用 ppt の作成例など、授業活動に積極的に関わった。

結果と課題

今学期の履修生は、J4 の学生 2 名、J5 の学生 3 名、J6 の学生 1 名であった。どの学生も積極的に授業に参加し、課題等に熱心に取り組んでいた。国籍や日本語レベルが異なることから、お互いを知ろうと努力し、学生達はチームワーク良く、助け合いながらグループ活動を行っていた。TA も各学生とコミュニケーションを図りながら、学生の質問に答え、個別作業のフォローをし、学生らが作業に取り組みやすい環境作りをしていた。授業では、作文 2 回と発表 3 回を課した。フィードバックから学んだことをしっかりと活かしており、回を重ねるごとに、ライティング力とプレゼンテーション力の向上が感じられた。学生からは、クラスメイトとの話し合いや発表を通して、自分に足りない部分を見直すことができ、新たな考えや知識を獲得できたことが良かったという好意的な意見が聞かれた。今後は、さらに新しい情報を取り入れた授業作りが課題である。

<総合日本語 4～6D>

担当者名：三浦綾乃

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：秋学期 11 名

使用教材：独自教材

コースの目標

J4 から J6 の学生を対象とする。学生が知識として持っている文型や語彙を、日常生活のみならず、大学での学習や研究活動の様々な場面で活用できるレベルに高めることを目指す。

授業の方法

今学期はすべて対面授業であった。この授業では日本の四季と年中行事を題材に、視聴覚教材を軸に関連する語彙や表現を学んだ。視聴覚教材は、NHK の DVD 「しばわんこ和の心」を部分的に使用した。授業は 1 課「冬」、2 課「春」3 課「夏・秋」の順に進めた。授業は担当した語彙を調べて発表する、ミニプレゼンテーションをする、グループディスカッションをする、作文を書く等、様々な活動を通して日本語の総合的な運用力が伸ばせるように計画した。各課（1 課～3 課の季節）は 2～4 回から成り、「ことば調べ」の読み確認→担当のことばを調べる（宿題）→調べてきたことを発表→DVD

で内容確認→グループディスカッション（その場でフィードバック）→小課題（作文またはミニプレゼンテーション）→復習プリント（宿題）、の流れで進めた。学期末に、授業で扱った内容から学生が自分でテーマを決めて最終プレゼンテーションを行った。

結果と課題

非常に熱心な学生達で、遅刻や欠席がほとんどなかった。昨年度よりも語彙の量と課題のペースを調整したため、学生にはあまり負担がかからない形で授業が進められたと思う。ディスカッションは TA にもフィードバックを手伝ってもらった。録音したものを聞きながらフィードバックされることに初めは恥ずかしがっていたが、繰り返すうちに慣れていき、自分の発話を熱心に聞いていた。コース終了時の振り返りには、「話すことが上手になった」というコメントが多かった。一方で、「もっと授業で話したり聞いたりする練習や活動がしたい」というコメントもあった。ディスカッションの時間をもう少し長く確保したり、しばわんこの DVD で視聴する部分を絞り、それを繰り返し見たりしてもいいと思った。また、それぞれの課で学んだ年中行事に関連する別の動画をクラスで視聴することも有効だと考える。今学期は発表が全部で 3 回あったが、やや回数が多く学生が準備に追われていたようだった。レジュメの作成を必須としていたが、結局発表のためにスライドも作成する学生が多かったため、負担が大きかったと思われる。今後は学生が発表で最大限の力を発揮できるように、発表の回数の多さや発表形式を検討したい。また、履修学生の様子に合わせて、準備時間を考えたスケジュール作成も心がけたい。

2022 年度 漢字 授業記録

コースの概要

どのレベルの学生でも履修することができるクラスである。学生は自分でレベルを選択し、学期中 2 回ある立教漢字検定に向けて、その範囲の漢字語彙を学習する。

担当者名：＜春学期＞鹿目葉子

＜秋学期＞三浦綾乃

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 9 名 秋学期 32 名

使用教材：独自教材、立教漢字検定テキスト

コースの目標

履修のための日本語レベルは問わず、全レベルの学生が履修することができる。漢字語彙の拡充を目的として、漢字の意味、漢字の語彙の使い方に関する知識を深めるとともに、読んだり書いたりする力をつける。

授業の方法

＜春学期＞

立教漢字検定のテキストを用いて、各学生が決めたレベル、分野に沿って学習を行った。2022 年度は初級 B1～B6、中級 I-A～I-G、上級 A-A～A-G の全レベルを対象とした。授業ではテキストに沿ったワークシートを中心に個別学習を行った。また、毎回、授業開始時にワークシートのフィードバックを行い、その後にクイズ、身の回りにある漢字を生活の中で見つけ、グループ内で発表する「漢字発見」活動を行った。さらに、好きな漢字の意味、用法、理由などを PPT にまとめて発表する「好きな漢字発表」も行った。

＜秋学期＞

秋学期はすべて対面で授業を行い、テキストとワークシートとクイズは紙で配布した。履修者が多かったため教室を二つ使った。立教漢字検定のテキストを用いて、各学生が決めたレベル、分野に沿って学習を行った。テキストは初級 B1～B6、中級 I-A～I-G、上級 A-A～A-G の全レベルを対象とした。授業は、(1)クイズ→(2) 協働学習 (漢字発見/好きな漢字発表) →(3)個別学習 (ワークシート) の順に進めた。クイズは毎回のミニクイズに加えて、テキストが終了した後に行うまとめクイズがあった。協働学習の「漢字発見」では、学生は宿題として自身の学習レベルの範囲にある漢字を教室外で見つけて来て、授業内でペアまたはグループになって読みかた、意味、語彙などを発表した。「好きな漢字発表」では、学期中に一人 1 回、レベルに関係なく好きな漢字をポスターセッション形式で発表した。ポスターの作成は授業内で行った。個別学習は、テキストに対応したワークシートを行った。ワ

ークシートは提出させなかったもので、できるだけ授業内で教師と TA（ティーチング・アシスタント）が添削するようにした。ワークシートとクイズのための予習・復習を毎回の宿題としていた。授業の最終日は、自分の名前を漢字で書く活動、2023年の目標となる漢字を考えて発表する活動と、コースと自分の漢字学習の振り返りを行った。

結果と課題

<春学期>

履修者は初級 2 名、中級 5 名、上級 2 名であった。熱心な学生達であり、仲も良く、みんなで助け合って漢字習得に取り組んでいた。ワークシートのフィードバックでは、特に書き方を取り上げた。クイズは Google ドライブに問題をアップし、ノートに書いて写真を提出する方法で実施した。ミックス型の授業であったため、対面とオンラインの学生とのコミュニケーションを重視し、「漢字発見」の時間を長めに取った。ユニークな場所から漢字を発見してくる学生もあり、生活の中で漢字を発見することに楽しみを感じているようだった。また、クラスメートが発表した漢字について質問をしながらメモをとり、自分用の漢字リストを作成している学生も見られた。今学期は立教漢字検定が実施されたため、「好きな漢字発表」を 1 回とした。発表では、漢字の意味、用法、好きな理由、その漢字の由来、漢字に纏わるエピソードなど各自の視点で紹介していた。写真やイラスト、書き順のアニメーションをつけるなど工夫を凝らした発表も見られた。この 2 つの活動は、学生達に大変好評であった。さらに、日本人学生のボランティアにも参加してもらった。特に J0 の学習者にとって、ボランティアの存在は効果的であったと思われる。今後は、さらに漢字学習へのモチベーションが保てる活動や授業作りをしていきたい。

<秋学期>

履修者が 32 人と多く、二つの教室に分かれて授業を行うことになったが、TA の細やかな働きと協力的な学生達のおかげで大きい問題はなく授業を進めることができた。この授業は授業時間の約半分が個人作業となるが、同じレベルの学生同士と一緒に座らせることで、協力してワークシートに取り組む姿が見られた。黙々とワークシートを進める学生が大半を占める中で、試験のような怖い雰囲気にならないように小音量で BGM を流してみたところ、学生から好評であった。「漢字発見」や「好きな漢字発表」などの活動にも意欲的に取り組んでおり、クラスメートの発表を興味深く聞き、質問やコメントを盛んに交わっていた。なるべくいろいろな学生と交流できるように、レベルに関係なくペアやグループを作るようにした。

課題としては、学生のフォローの仕方が挙げられる。履修者が多かったため、授業内で個別に対応できる時間はわずかであったし、ワークシートの添削も限界があった。また特に J0～J3 レベルの初級の学生は、選んだレベルに関わらず、テキストの語彙の多さについてこられず、クイズでなかなか得点できずモチベーションを失ってしまったり、授業に来なくな

ってしまったりする学生がいた。オリエンテーションの段階で、この授業を履修するのに推奨されるレベルと、テキストのレベルは低めを選んだほうが良いことは伝えていたが、より強く学生に周知させる必要があると感じた。また、同じレベルを勉強する学生同士で勉強方法や学習に関する悩みを気軽に共有できる機会を作るのも良いと感じた。履修者が多い中で、全体を見つつ、どのように学習が遅れている学生に声掛けし、サポートしていくか、効果的な方法を今後検討していきたい。

2022年度 Business Japanese I/Business Japanese A 授業記録

コースの概要

Business Japanese I/A は、経営学研究科国際経営学専攻の留学生を主な対象とするクラスで、文法を適宜導入しながら、ビジネス場面での日本語を実践的に学習し、運用力をつけることを目標とする。Business Japanese I は J4, J5 レベル、Business Japanese A は J6, J7 レベルの学生を対象とする。

<Business Japanese I>

担当者名：小松満帆、富倉教子、小森由里、沢野美由紀、長谷川孝子

授業コマ数：週 5 コマ

履修者数：秋学期 2 名

使用教材：独自教材

コースの目標

限られたビジネス場面で日本語で適切にコミュニケーションを行うことができるようになること。

授業の方法

この科目は、将来幹部候補となるビジネスパーソンの育成という特化した目的を持つ科目である。具体的には、仕事にまつわる様々な場面で使用される洗練された表現の運用を目指す練習と、談話レベルでの運用力をつけるためのプロジェクト活動、そしてプロジェクトの発表場面にもなる、立教セカンドステージ大学からの協力を得てのゲストセッションの 3 本柱で展開した。

本授業の主な流れは、①朝のロールプレイ、②オリジナル教材を用いたキーフレーズの導入ならびに会話練習、③帰りのロールプレイである。①と③では、出勤・退勤時に同僚や上司と交わされる日常会話を練習した。②では、商談、会議、電話応対等のビジネス場面で適切に対応できるよう、導入と練習を行った上で、総まとめとなるゲストセッションでのやりとりを想定した応用練習を行った。さらに、対人関係に応じた基本的な言語表現の使い分けや、日常的な社内文書やビジネス文書の基本を学び、ビジネス日本語能力テストに向けた聴

解練習も行った。

学期中 6 回実施したゲストセッションでは、コース前半は顧客から依頼されたポスターの作成、後半は新商品・新戦略の提案を行った。セッションは録画をし、後日、フィードバックを行った。

結果と課題

今年度の履修者は 2 名であったが、いずれの学生も非常に真面目で、出席率も高く、積極的に質問し、課題に熱心に取り組んでいた。習った語彙や表現をしっかりと身につけ、使ってみようとする意識が高く、お互いに切磋琢磨しながら、自身の弱点を自覚し、改善させることができた。学生たち自身も、コースを通して、ビジネス用語や表現、日本語でのプレゼン力が身に付いたと実感し、達成感が得られた様子であった。

6 回実施したゲストセッションでは、毎回の課題に誠実に取り組み、またゲストからのコメントや助言も真摯に受け止め、次のセッションに向けて改善していこうとする姿から、日本語力を高めていこうという強い姿勢を見ることができた。

聴解練習では、様々な練習を通して、聴解力だけではなく、敬語や新しい語彙・表現を身につけることができた。またさらに、それらの語彙・表現をゲストセッションでのやり取り等で活用することもできるようになっていった。

課題点としては、後半のゲストセッションでの質疑応答の精度を上げる点である。ゲストセッションでは、ゲストからの様々な質問を想定して準備を行っておく必要があるが、学生自身は矛盾点や不足している点についてなかなか気づくことができない。プロジェクトの進行状況やゲストからの指摘をまとめ、より充実した事前準備ができるよう、導いていく必要があるだろう。

<Business Japanese A>

担当者名：藤田恵、富倉教子、小森由里、沢野美由紀、長谷川孝子

授業コマ数：週 5 コマ

履修者数：秋学期 1 名

使用教材：独自教材

コースの目標

限られたビジネス場面で日本語で適切にコミュニケーションを行うことができるようになること。

授業の方法

将来幹部候補となるビジネスパーソンの育成という特化した目的を持つ科目である。具体的には、仕事にまつわる様々な場面で使用される洗練された表現の運用を目指す練習と、

談話レベルでの運用力をつけるためのプロジェクト活動，そしてプロジェクトの発表場面にもなる，立教セカンドステージ大学からの協力を得てのゲストセッションの3本柱で展開した。

本授業では，ゲストセッションに向けて課題を設定し，その課題が達成できるようにさまざまな表現を導入し，実際の現場で使えるようにしている。本年度の課題は「新製品の売り込み」「新製品販売状況報告」「取引先への謝罪と説明」「問題の対応策の検討（社内会議）」「自社説明（プレス）」等である。

結果と課題

今学期のBJAクラスは，対面受講の履修者3名で展開した。3名とも **Business Japanese** コースを初めて履修する学生であったが，コースの目標を理解しており，ビジネス場面での日本語表現の習得を目指しつつ，日本の商習慣や社会的な背景の習得にも高い意欲がある学生たちであった。クラスでは，学生同士で話し合いしながら解決方法を見出すなど，自律して学習をしている様子も多く見られた。

以前からの課題として，授業活動とゲストセッションとのつながりを学生に理解させることが挙がっていた。今学期は，教師間で連携を取り，毎回の授業がゲストセッションにどう繋がるかを学生に意識させるように心がけた。その結果，学生はその日に学ぶ内容の意味を理解し，効果的に学ぶことができたようである。また，ゲストセッション用の資料作成の準備作業も，計画的に進められたように思う。各活動の目的や位置づけを学生に理解させることは，本授業において非常に重要で，効果的であることから，次年度以降も教師間で連携とり，心がけていきたい。

本クラスの課題として，敬語の学習時間を設けることを挙げる。上級レベルの学生であっても，ビジネス場面での敬語の使用に不慣れな学生が多い。ハンドアウトにある会話例に敬語を取り上げており，都度練習を行っているが，敬語の練習を取り立てて行う時間を設けてもよいかもしれない。これについては，次年度以降の課題としたい。

2022年度 大学生の日本語／総合日本語6－8 授業記録

コースの概要

「大学生の日本語」は正規学部生の1年生が大学における学習を日本語で行えるよう，アカデミックジャパニーズを学ぶためのコースである。「総合日本語6－8」として特別外国人学生や大学院生も履修可能であり，様々な背景をもつ学生が，共に学ぶ機会を提供している。

各科目の詳細は次に示す通りである。

<大学生の日本語 A6、7、8> <総合日本語 6-8A>

コースの目標

大学における学習、生活に必要な日本語の基本的スキルの獲得を目指す。

授業の方法

各学生の日本語力に配慮した形で、聴く・話す活動を中心に据えた内容重視型の授業を行い、プレゼンテーションのしかたを身につけることを目指した。

「ニュースの紹介と用語の定義（引用）」、「グラフの説明」、「調査の引用」、「アンケート調査」という4つのテーマで、それぞれ必要な機能表現を導入・練習し、スライドを用いた5分のプレゼンテーションを行った。Zoomの画面共有でスライドを共有して発表を行い、ブレイクアウトルームを活用して発表練習やディスカッションを行う形である。各回の主な目標となる機能表現が含まれるスライドの1枚分についてはスクリプトも提出させた。また、ディスカッションのための質問も用意させて、質疑応答のあとでディスカッションをさせた。

テーマ1と3は個人による発表である。グループに分かれて発表とディスカッションをし、自己評価と学生間評価をさせ、後日、教師がスライドを添削してフィードバックをし、学生は作り直したスライドを用いて、改めて発表をした。テーマ2と4はグループによる発表である。Google スライドを用いてグループで一つのスライドを作成し、クラスの前でグループ発表を行った。テーマ4ではGoogle フォームを用いてアンケート調査を実施し、その内容を発表した。

上記の発表の他に、即興で短いスピーチをする練習も取り入れた。その場で与えられたトピックについて準備をして、スライドを使うことなく、グループの中でお互いにスピーチをし合うという活動である。また、キャリアセンターと連携し、留学生のための就職ガイドの動画を視聴させて、リアクションペーパーを書く活動も行った。

使用教材

独自教材

[文学]

担当者名：数野恵理

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 14 名

結果と課題

学期開始時は 3 名が渡日前のためオンラインと対面のミックス型授業であったが、第 4 回の授業からは全員対面授業となった。出席率は非常によく、やむを得ない事情で一回欠席した学生はいたものの、その他の学生は毎回きちんとクラスに参加した。また、プレゼンテーション後の質疑応答やディスカッションでの発言も活発であった。大部分の学生は課題にもきちんと取り組み、学期末にはしっかりした構成と内容で発表ができるようになった。

一方で、提出が遅れたり、修正したものを提出しなかったり、グループプロジェクトで消極的だったりして、個別にフィードバックをしてもなかなか改善されない学生も若干名いた。この学生については来学期も注意して指導していきたい。

対面授業となった今学期は 2 年ぶりに教室の前に立って発表をさせることができた。オンラインでの発表の場合はパソコン画面を見ながら発表することができたが、教室の前で発表する場合、そのような発表ではいい発表にならない。今学期は原稿を読んでしまい、アイコンタクトができていない学生もかなりいたため、これは来学期の課題としたい。

[社会・経営]

担当者名：長谷川 孝子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 15 名

結果と課題

日本語での発表経験がない学習者が半数以上を占め、そのうち数名は他の言語での発表も経験がなかった。そのため、初めて学ぶことも多かったようだ。教える側は多くの情報を整理し、学習者の理解度を確認しながら進めていく必要があった。学期の終わりには、学習者は発表の基本を身に付けることができた。しかし、クラスメイトとの話し合いや発表後のディスカッションでは、まだ難しさを感じているようだ。今後、日本語表現も確認しながら、話し合いを進めるにはどうしたらよいかを考えさせ、日本語で交流する楽しさにも気付いてもらえるような授業を目指したい。

[経済・理学]

担当者名：武田聡子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 13 名

結果と課題

学期始めは 3 名がオンライン、残りの学生は全員教室で授業を受けるミックス型でスタートした。それも数週間後には、全員が教室で授業を受けることができ、久しぶりに学生同士が隣同士、グループで向かい合って話し合う姿を見守りながら授業を進めることができた。グループ活動の際は、同じメンバーにならないようできるだけ異なる人たちがグループになるように配慮した。しかし、最後のグループ発表は、学生たちに好きな人と一緒にアンケート調査をするグループを作ってもらった。思ったよりスムーズに 4 つのグループができ、結果としてまとまりのある調査と発表ができた。最後に日本人ボランティアに来てもらい、発表を聴いて質疑応答、ディスカッションを行った。オンラインに慣れてしまったせい

か、スクリーンを見たまま、人の顔を見て発表することに慣れていない学生が多いため、今後の課題は、発表の際にもっと顔を見て、意見のやりとりが活発に行えるようになることだ。

[法学・異文化]

担当者名：井上玲子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 21 名

結果と課題

春学期開始時に入国できていない学生がいたので、対面とオンラインのミックス型授業を採用することとなり、対面が 13 名、オンラインが 7 名で今学期がスタートした。学期中に体調不良で欠席した学生もいて、課題の提出が遅れたこともあったが、履修学生は、課題を一つ一つこなしていった。

今学期は、日本語での発表の経験がない学生が多く、スライドを使用しての発表自体が初めての学生も数名いた。日本語での発表に非常に不安を感じている学生もいたため、学期の前半では大学で必要な日本語力、発表で必要とされる表現等の基礎固めを全体で確認する時間を設けた。また、スライド作りでは、サンプルを全体共有して、構成、形式、体裁を一緒に確認した。独自のやり方でスライドを作っていたり、スクリプトの内容をそのままスライドに貼り付けたりしていた学生には、個別に FB を行い、スライド作成の形式や構成を丁寧に説明した。何度かスライドを作るうちに、スライドの基本的な構成、形式、体裁が身についていったように思う。しかし、日本語で簡潔にまとめる、考察やまとめが十分にできない等、まだまだ課題点も多い。スライド作りについては、秋学期も引き続き練習していきたい。

このクラスは、今学期中に履修者全員が教室に揃わなかったので、発表はすべて Zoom を使用して行った。履修学生は各自スクリプトを準備して発表に臨んでいたが、スクリプトを読んだ発表が多かった。秋学期は、クラスメートの前での発表練習が必要である。聴衆を意識した発表の仕方、スクリプトに頼らない発表の仕方については、秋学期の課題としたい。

[観光・映像]

担当者名：斉藤紀子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 8 名

結果と課題

開始時には対面で受講の学生は 2 名のみであったが、徐々に対面で参加できる学生が増え、最後には 8 名全員が対面で受参加することができた。テーマ 1 に取り組む段階ではスライドの作成もはじめてで、発表の基本の構成や入れるべき要素についての知識もほとん

どない学生もいたが、課題を重ねるうちに、少しずつ知識が積み上がり、結果として全ての学生がこのクラスの目標であるプレゼンテーションのしかたの基本的知識は身につけられた。グループ発表では体調不良で欠席した学生とも情報を共有しながら、グループでよく協力し、役割分担して発表準備ができていた。またアンケート調査にも楽しみながらも取り組んでいる様子が観察された。ただ 1 名後半になって学習意欲が低下した学生がおり、グループメンバーはその学生とのやり取りには苦勞していたようであった。

課題としては、スライド作成ではデータの読み取りやそこからの考察の深め方、また最後のまとめ方で、発表ではスクリプトを読みすぎないことである。秋学期に向けて改善していければと思う。

[心理・福祉]

担当者名：齊藤紀子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 6 名

当初 2 名がオンラインであったが、5 月後半の段階で 1 名は対面となり、最後の 1 名も 12 回目から対面で参加できたため、最終発表は全員対面で参加することができた。学生は概ね真面目で意欲も高く、1 名を除いては遅刻も欠席もないクラスであった。その結果として、日本語能力の高いとは言えない学生も「機能と表現」の資料を参照しながら、各テーマで使うべき表現や文型を確実に身につけていった。ただ 1 名は講師の指示の理解、またグループで協同しての活動などに課題が多く、またパソコンの操作にもあまり慣れていなかったこともあり、様々な形での支援が必要であった。しかし、後半には自分自身でも思うところがあった様子で、少し積極的になり、グループでの最終発表にも参加できていた。

課題としてはデータの読み取り、論理的思考がまだ十分ではないことである。これらはなかなか指導の及ぶにくいところではあるが、今後は各自がスライドの作成にかかる前に、どのような考察ができるかなど全体で考える時間ももう少し多く取り入れてみたい。発表においては原稿を読むのではなく聴衆に向けて話すことも課題と言える。

[GLAP]

「大学生の日本語 A」は「Japanese Language and Japanese Society A」と併置のため、「Japanese Language and Japanese Society A」部分を参照のこと。

<大学生の日本語 B6、7、8><総合日本語 6-8B>

コースの目標

大学における学習、生活に必要な日本語の基本的スキルの獲得を目指す。

授業の方法

各学生の日本語力に配慮した形で、読む・書く活動を中心に据えた内容重視型の授業を行い、読解力を高めるとともに、レジュメ、レポートや論文を書く際に必要な技能を身につけることを目指した。

『上級日本語教科書 文化へのまなざし』のうち「国際共通語」、「フリーターと仕事」に関する2つのテーマを扱った。資料1は共通読解として全員が同じものを読み、内容の理解を行った。資料2はAとBから各自読み物を選択し、その内容について発表できるようにレジュメの作成を行った。さらに、リアクションペーパーとレポートの書き方を学び、リアクションペーパーを書いたあとで、複数の資料を用いて「国際共通語」についてのレポートを作成し、リライトをした。

使用教材

近藤安月子・丸山千歌、2005、『上級日本語教科書 文化へのまなざし』、東京大学出版会。

[文学]

担当者名：武田聡子

授業コマ数：週1コマ

履修者数：春学期14名

結果と課題

授業開始してから数週間はオンライン受講者が2名いたため、ミックスで授業がスタートしたが、すぐに全員が教室で対面授業を受けることができた。最初は母語（中国語）が授業中に飛び交い、グループ活動中も母語で話すことに対してクレームを挙げる学生（韓国）が複数いたため、授業中は日本語のみというルールを課したところ、全体的に静かになった。アカデミックライティングに慣れていないため、1回目のレジュメはかなり指導が必要なものだったが、2回目のレジュメは大きな進歩が見られた。レポートも、書き直しを重ね、最終的には、指導に基づいた体裁の整ったレポートが仕上がっていた。基本的に明るくおしゃべりな学生が多かったため、雰囲気の良いクラスだった。今学期学んだことを次の学期でも生かし、さらにライティング力を磨いてほしい。

[社会・経営]

担当者名：藤田恵

授業コマ数：週1コマ

履修者数：春学期16名

結果と課題

春学期の社営クラスは、16名のうち実際に学期末まで出席していたのは14名であった。ミックス型でクラスがスタートしたが、学期途中から全員対面受講となった。

このクラスでは、レジュメやレポートなど、大学で必要となる書く技術を身につけることを目標としており、学期中に複数回課題の提出を課した。同じ資料を書き直しさせることにより、自身の足りない点に気づき、書く力の向上が見られた。

課題のフィードバックでは、段階的な目標をたて、それらを明示するように心がけた。学期開始時期の提出では、課題の指示にある情報が不十分であったり、フォントや体裁が整っていないかたりする学生が多かった。学期中盤は、引用や参考文献の書き方を中心に学習を進めた。学期後半は、ひきつづき、引用や参考文献の書き方を扱いつつ、課題のテーマと参考文献に関して、どのような発想をして課題を作成するのか、その入り口として、資料を読み考えたことをコメントシートに書いたり、他者に口頭で説明したりする活動を多く入れるようにした。

その結果、フォントや体裁が整い、引用や参考文献の書き方に関してもルールに沿った方法に注意を向けて課題が作成できるようになっていった。一方で、課題作成のための発想という点では課題が残った。課題となる参考資料に対して賛否を述べることはできても、その根拠を掘り下げ、必要な参考文献を示すというところまでには至らなかった。学年が進むにつれ、専門科目では、独自の視点や発想をもって、レポート作成をする力がより重要となっていく。今後は、学生の発想力が刺激できるような授業の進め方を考えていきたい。

[経済・理学]

担当者名：三浦綾乃

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 22 名

結果と課題

履修者の中には2年次以降の学生もいたが、実際に授業に最後まで出席したのは全員1年生であった。全員真面目に活動には取り組んでいたものの、おとなしい学生達ばかりでやや受身な学習姿勢が目立ち、ディスカッションなどでは自発的は発言が見られなかった。どのように授業に積極的に参加する姿勢を意識させれば良いのか苦慮した。大学で学ぶ意義や学ぶ姿勢については、折に触れて学生との意識の共有を図る必要があると感じた。

レポート・レジュメ・リアクションペーパーの作成が初めてだという学生がほとんどであったため、丁寧な指導を心がけた。1回目の提出ではどの課題にもかなり多くの間違いがあったが、2回目以降の提出では見違えるほど良いものが書けるようになった学生がほとんどであった。実際、学期の終わりに学生に書いてもらったコメントには、「この授業を通して

読んで書く力がついた」という前向きなコメントが多かった。しかし、一部の学生は教師からのフィードバックコメントをしっかりと読めておらず、同じ間違いを繰り返すことがあった。履修者が多いと全体に向けたフィードバックで終わってしまい、個別のフィードバックは各自コメントを確認してもらうことも多くなってしまうが、伝わってほしい学生に限って伝わっていないことが往々にしてあるので、個別のフィードバックの時間を確保することの必要性を感じた。また、全体的に最後まで引用の仕方が定着しなかったため、今後はより効果的な引用の指導方法や練習を検討していきたい。

[法学・異文化]

担当者名：小林友美

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 20 名

結果と課題

出席率、課題の提出率が比較的良好で、熱心に参加する学生が多かった。一方で、教師の説明に十分に注意できない学生もいたため、課題指示や説明を繰り返し伝える必要があった。引用の仕方については、なかなか定着しなかったため、全体で複数回復習をする他、各自のレジュメやレポートに詳細にコメントを入れ、口頭でも個別フィードバックをした。これにより、2回目のレジュメや学期末のリアクションペーパー作成では、コツを掴み、改善が見られた。今後もフィードバックの方法を工夫し、正確に書き直して改善することの重要性を強調していきたい。

次に、学生対応についてである。本クラスは、履修者数が多く、初中級から上級とレベルの差が大きいクラスであった。そのため、下のレベルの学生には、課題指示や課題のフィードバックを個別に丁寧に対応し、学習意欲の維持にも気を配った。また、自国のインターネット環境が悪く、オンライン授業にスムーズに参加することが難しい学生がいたため、授業後、授業内容や課題指示について連絡をし、PPT等の教材も提供するなど配慮をした。また、孤独感を感じさせないようにメッセージを送るようにしていた。特に、このような学生達には、科目、各活動の目標や意義を明確に提示し、学習意欲の維持に努める必要性を感じた。今後も、アカデミック・ジャパニーズの獲得のみならず、大学、学部にしっかりと着地し、本科目で学んだことを活かしながら自律的な学習ができるように、指導法を工夫していきたい。

[観光・映像]

担当者名：川端芳子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 9 名

結果と課題

今学期は、5月まではミックス型授業、それ以降は対面授業となったが、円滑にクラス活動を進めることができた。出席、課題の提出も概ね良好で、レジュメの分担読解やレポート発表を通して、各資料への理解が深まったようである。レジュメ作成においては、テーマ①では形式に慣れておらず、資料の文章をそのまま抜き出して書いたものや、著者の主張と学生自身のコメントが混在しているものが見られたが、テーマ②ではペアワークやフィードバックによって、箇条書きを用いて資料内容のポイントを整理する、文末の書き方を統一する、コメントを区別するなどの工夫ができるようになった。レポート作成においては、全体の構成、直接引用の表現、文献表の書き方を中心に授業を進めた。ハンドアウトの参照や練習を通して正確な表現が身に付いた学生がいる一方で、同じ間違いを繰り返す学生もいた。来学期は今学期の復習をすると共に、より正確な表現、適切な引用が定着するよう、フィードバックの方法や練習を工夫していきたい。

[心理・福祉]

担当者名：川端芳子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 7 名

結果と課題

今学期は、主にミックス型で授業を実施したが、接続のトラブルもなく、円滑にクラス活動を進めることができた。出席、課題の提出も概ね良好で、みな真面目に各課題に取り組んだ。レジュメ作成においては、テーマ①では形式や体裁が整っていないものや、資料の情報抽出が不十分なものがあつたが、テーマ②ではクラスでの発表や意見交換を通じて、読みやすくするための工夫が見られ、内容を的確に提示できるようになった。レポート作成では、全体の構成、直接引用の表現、文献表の書き方を中心に授業を進めた。初稿では引用表現や文献表の書き方などに誤りが散見されたが、自己評価シートやフィードバックによって自分のレポートを再考し、最終稿では改善点が多く見られた。ライティングの基本的スキルは概ね身に付いたようである。来学期は今学期の復習をすると共に、適切な表現でさらに完成度の高いレジュメ、レポート作成ができるよう、練習や指導を工夫していきたい。

[GLAP]

「大学生の日本語 B」は「Japanese Language and Japanese Culture A」と併置のため、「Japanese Language and Japanese Culture A」部分を参照のこと。

＜大学生の日本語 C6、7、8＞＜総合日本語 6-8C＞

コースの目標

大学における学習、生活に必要な日本語の基本的スキルの獲得を目指す。

授業の方法

各学生の日本語力に配慮した形で、「聴く」「話す」活動を中心に据えた内容重視型の授業を行い、プレゼンテーションの仕方を身につけることを目指した。春学期の機能表現を復習しつつ、比較対照、有識者の見解への同意、部分的な同意と反論などの機能表現を導入し、スライドを用いた5分のプレゼンテーションを計4回行った。発表スライドにはディスカッションのための質問も入れて、質疑応答の後でディスカッションをさせた。テーマ1は、各自がまずスライドを作ってグループの中でお互いに発表の練習をして学生間評価をし、さらに教師がスライドを添削してフィードバックをし、学生は作り直したスライドを用いて再度グループの中で発表した。テーマ2とテーマ3はグループで一つのスライドを作成し、クラスの前でグループ発表を行った。最終課題は個人の発表とし、全員が皆の前で発表した。また、上記のプレゼンテーション以外に、将来の就職活動を見据えて「高校時代に力を入れたこと」というテーマで自己分析をしてグループで共有をし、短い文章にまとめて1分程度のスピーチをするという活動も行った。

使用教材

独自教材

[文学]

担当者名：数野恵理

授業コマ数：週1コマ

履修者数：秋学期21名

結果と課題

秋学期は、春の大学生の日本語Aから引き続きCを履修する文学部の正規学部生に、総合日本語C6-8を履修する特別外国人学生4名が加わった。春から継続して学ぶ正規学部生はアカデミック・ジャパニーズに慣れており、発表後のディスカッションでも積極的に発言する学生が多かった。特別外国人学生は、アカデミック・ジャパニーズには慣れていなくても日本語力は高い学生が多く、文化背景が異なり新しい視点を提供してくれる学生もいた。そのため、両者にとって良い刺激となったと思われる。

春学期はグループ発表の準備で消極的な学生もいて同じグループの学生が苦勞していたが、秋はどの学生もより積極的に関わり、協働している様子が窺えた。春からの課題であった発表時のアイコンタクトは、秋もなかなか改善しなかったが、それでも以前に比べれば、

前を見て話そうとする学生が増えた。出席率と課題提出状況が非常によく、ほとんどの学生のプレゼンテーションの力は上達したものの、入学時の日本語力が低かった学生の中にはまだ日本語にかなり問題のある学生が若干名いた。本科目の中でこのような学生の日本語力をさらに伸ばすこと、また、2年次以降の日本語科目の履修や日本語相談室の利用を促していくことが今後の課題である。

[社会・経営]

担当者名：武田聡子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：秋学期 21 名

結果と課題

総合日本語の学生が 7 名加わり、21 名でスタートした。春学期から同じ社営のクラスメートだけで授業をするよりも、多国籍の総合日本語の学生が 7 名入ってきたことは、社営の学生にとって、大変刺激になったように思われる。グループで発表するテーマのときは、こちらで総合日本語の特外生が必ず 1 名は社営と一緒にグループになるように調整した。その結果、共通語が日本語を使わざるを得なくなり、母語のおしゃべりは聞かれなくなった。しかしながら、総合日本語の学生のうち 1 名が、他の授業との兼ね合い並びに当該科目の課題が多いという理由で途中から来なくなった。よって、20 名の学生が最後まで出席し、テーマ①から最終テーマまでの 4 課題を発表することができた。1～2 回欠席をする学生はいたものの今学期一度も欠席しなかった学生も半数近くいた。どのテーマの課題にも熱心に参加し、グループ活動では、協力的に、一人発表では、その前のテーマでの発表のフィードバックをふまえて、最後の発表ではほとんどの学生が有終の美を飾った。完全対面授業になり、発表を教室の前でするようにしたが、マスクをしたまま、対面であっても、顔が下を向いたままで正面に向かなかったり、マスクの中で口をあまり開けず、大きな声も出さない発表が目立ったが、しかし、徐々に、アイコンタクトをとって、マイクを使用したりしながら明確に発声をし、発表らしくなっていった。最終テーマの発表では、ほぼ暗記して発表する学生が数名おり、かなりの努力が見られた。今後の課題としては、スマホを原稿として見る学生が多いことから、どうしても視野が狭くなりがちなので、できればスマホではない形でメモを見る、あるいは、スマホを使ったとしても、もっと頭を上げて聴衆を見て発表できるようになってほしい。

[経済・理学]

担当者名：＜秋学期＞長谷川 孝子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：(池袋) 秋学期 20 名

使用教材：独自教材

結果と課題

秋学期初め、スライドの見やすさ、敬体と常体の使い分け、出典の必要性や示し方、発表の仕方など、課題は多く残っていた。そこで、フィードバックでは、学習者が混乱しないように段階的に学べるように工夫をした。その結果、学習者は聞き手にとって分かりやすい発表を意識できるようになっていった。最終発表では、意見を分かりやすく伝える力がつき、クラス全体で意見を交換する楽しさにも気付いたようだった。今後は、問いの立て方や一貫性など、内容面も再検討する時間があれば、さらにより発表に繋がると思われる。

[法学・異文化]

担当者名：＜秋学期＞井上玲子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：秋学期 27 名

結果と課題

今学期は、春学期に「大学生の日本語 A」を履修した学生 19 名と、秋学期から 8 名が加わり、合計 27 名のクラスとなった。

春学期から履修している学生は、春学期に引き続き、クラスメートと協働しながらクラス活動に取り組んでいた。秋学期から参加の学生も、その雰囲気は伝わり、春学期から履修している学生と共に、一つ一つの課題を毎回しっかりと取り組んでいた。

春学期は教室で授業に参加した学生もいたが、オンラインでの参加学生もいたことから、グループ活動やプレゼンテーションはすべて Zoom を使用して行ったため、教室でのプレゼンテーションは未経験であった。今学期は、履修者全員対面で参加することができたため、教室の前での発表を初めて経験した。Zoom での発表に慣れてしまっていたため、前に出での発表は、履修学生にとって緊張の連続だったようである。教室でプロジェクターを使用での発表は、発表の仕方やスライドの見せ方など、Zoom での発表の時とは違っており、学生も戸惑っていた。しかし、練習を重ねることで、個々の課題を少しずつ克服していったように感じた。正確かつ簡潔にスライドにまとめること、発表の時にスライドの文を読むのではなく、自分の言葉で説明すること等、課題点はまだある。今後は、発表の経験を通して、よりよいプレゼンテーションの方法を個々で見つけて実践してもらいたい。

[観光・映像]

担当者名：斉藤紀子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：秋学期 8 名

結果と課題

1名が休学、1名が途中で退学したため、最終的には6名の正規学部生が履修した。対面になったことで学生の様子がよくわかり、ミックス型で始まった春学期より、学生の様子を観察しながら授業を進められたことは良かったと思う。全員が春学期からの継続生であったため、基本的な発表の形式や知識は共有できていた。そのため、授業では、話し方の技術や考察の深め方について確認しながら進めることができた。比較的活発な学生が多く、発表時に聴衆に向けて話すことなどはかなりできるようになってきたが、考察についてはまだその根拠が不明確であったり、引用との繋がりに不自然さの残るものがあった。テーマ2と3のグループ発表については、テーマ2ではよくできる学生がかなりリーダーシップを発揮していた感があるが、テーマ3ではある程度公平に役割分担ができていたと思う。1限と言うこともあり、遅刻や欠席がかなり多いクラスで、その結果、情報の聞き落としや、クイズが受験できなかったということがあつ他ことは残念だった。今後は遅刻や欠席をせずに、毎回きちんとクラスに参加することが最も重要であることを初回に徹底したい。

[心理・福祉]

担当者名：齊藤紀子

授業コマ数：週1コマ

履修者数：秋学期8名

結果と課題

正規学部生5名と特別外国人留学生2名、大学院生1名の構成であった。うち、特別外国人留学生1名と大学院生は秋学期からの履修であったため、前半は春学期の内容を復習する形で始めることとなったが、学部生にとっても復習ができ、良かったのではと思う。学生の取り組み態度は概ね大変真面目で出席状況も良かった。その結果、毎回の目標とするテーマで使われる表現や発表の構成を確実に身につけられたと思う。テーマ2と3のグループ活動もほとんどの学生が協力的に助け合いながら準備をし、発表することができた。前期は最終発表でもスクリプトを読む学生が多かったが、その問題もかなり改善したと思う。

1名前期から参加度が悪く、欠席も多かった正規学部生が、今学期も前半は参加できていたものの、後半欠席が多くなり、テーマ3の発表ができなかったのは残念だった。また特別外国人留学生の1名は漢字の読みが苦手で、レベル的に少し授業についてくるのが大変そうだったが、協力的な学生が多かったため、それに助けられ、最後まで終わられたことは良かったと思う。

[GLAP]

「大学生の日本語C」は「Japanese Language and Japanese Society B」と併置のため、

「Japanese Language and Japanese Society B」部分を参照のこと。

＜大学生の日本語 D6、7、8＞＜総合日本語 6-8D＞

コースの目標

大学における学習、生活に必要な日本語の基本的スキルの獲得を目指す。

授業の方法

各学生の日本語力に配慮した形で、「読む」「書く」活動を中心に据えた内容重視型の授業を行い、読解力を高めるとともに、レポートや論文を書く際に必要な力を身につけることを目指した。

学期の前半は『上級日本語教科書 文化へのまなざし』の「個性と学び」、後半は生教材の「AI」に関する読み物を扱った。学期の前半と後半それぞれ、資料 1 は共通読解として全員が同じものを読み、内容の理解を行った。資料 2 は A と B の読み物を分担して読み、その内容について発表できるようにレジュメの作成を行った。さらに、リアクションペーパーとレポートの書き方を指導し、リアクションペーパーを書いたあとで、複数の資料を用いて各テーマについてのレポートを作成した。春学期の大学生の B では直接引用を中心に学んだが、秋学期の大学生の日本語 D では直接引用の復習と共に間接引用も扱い、総合的に引用の練習を行った。

使用教材

近藤安月子・丸山千歌、2005、『上級日本語教科書 文化へのまなざし』、東京大学出版会。

新井紀子、2018、『AI vs. 教科書が読めない子どもたち』、東洋経済新報社。

井上智洋、2018、『人工知能と経済の未来—2030 年雇用大崩壊』、文春新書。

小林雅一、2017、『AI の衝撃—人工知能は人類の敵か』、講談社。

[文学]

担当者名：＜秋学期＞長谷川 孝子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：(池袋) 秋学期 17 名

使用教材：独自教材

結果と課題

読み物の読解とレポートの課題を通じて、学習者は一貫性の大切さを徐々に理解し、読み手に分かりやすい文章を意識するようになった。そして、授業での注意をよく聞き、時間を

かけて課題を完成させる学習者は、一貫性以外にも、引用の仕方、参考文献の書き方、段落のトピックセンテンスなど、学んだ内容をレポート課題に反映させることができた。しかし、論点を絞り、資料を引用しながら意見を述べるというレポート課題は、日本語や書くことに不慣れな学習者にとっては、難易度が高い。今後は、問いの立て方やアイディアのまとめ方も、授業内での練習が必要だと思われる。

[社会・経営]

担当者名：井上玲子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：秋学期 22 名

結果と課題

<大学生の日本語 D6、7、8>の履修学生は、春学期に「大学生の日本語 B」を履修しており、授業の進め方については学生もすでに把握していたので、ペアやグループ活動を多用し、課題に取り組んでいってもらった。

レジュメに関しては、資料の必要な情報抽出や、正確な日本語でのまとめ方など、課題がいくつか見られたが、構成や視覚的な工夫がなされていて、春学期に学んだことが活かされていた。レポート作成では、引用の仕方や参考文献の書き方、レポートの構成がまだ不十分な学生もいたが、評価項目を何度も確認しながら、自分の意見と他者の意見をしっかり区別することを意識してレポート作成に臨んでいた。今後、様々なクラスでレジュメやレポートの課題が出されると思うが、このクラスで学んだことを活かし、実践を通してレポートのスキルを学生自身で身につけていってもらいたい。

今学期残念だった点は、課題の遅れ提出が目立ったことである。他の授業の課題などで忙しく、このクラスの課題に十分に取り組めなかったのも理由の1つのようなのである。1年間のクラスにおいて、学生のモチベーションをどのように持続させていくかが課題である。また、今学期は履修者が多く、学生一人一人対し、十分なFBができなかったかもしれない。限られた時間内での効果的なFBについても、今後の課題としたい。

<総合日本語 6-8D>クラスの履修者5名は、今学期、社会・経営クラスの学生と共に勉強することになった。社会・経営クラスの学生は、春学期に「大学生の日本語 B」を履修しているので、授業の進め方については学生もすでに把握しているが、このクラスの履修学生にとっては初めてのクラスであった。春学期の復習活動では、春学期から履修している学生のグループ活動に入ってもらい、互いに学び合う方法を採用した。履修学生は、わからないところは春からの継続学生に積極的に質問し、一つ一つの課題を毎回しっかりと取り組んでいた。

レジュメに関しては、文を抽出したのみで適切な箇所を箇条書きにしてまとめられていない学生がいた。文献の内容を理解し、よくまとめられている学生の許可を得て、その学生

のレジюмеを見ながら、抽出した内容や箇条書きの書き方、レイアウトなど自分の作成したレジюмеと比較してもらった。クラスメートが作成したレジюмеは参考になったようで、次のレジюмеではわかりやすく見やすいレジюмеになっていた。

レポートについては、レポートの構成や、引用の仕方、参考文献の書き方など、まだ課題点はあるものの、クラスで扱った内容をレポートに反映させていた。

レポートやレジюмеの基本的な書き方やポイントは理解できたと思うが、今後は、実践を通してアカデミック・ライティングスキルの更なるレベルアップを期待したい。

[経済・理学]

担当者名：＜秋学期＞鹿目葉子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：秋学期 25 名

結果と課題

＜秋学期＞

今学期は 7 名の休学者を含み、履修者数は 25 名であった。授業に参加した学生達は熱心に授業を聞き、課題にも真摯に取り組んでいた。レジюмеやレポートのフィードバックに書かれているコメントから学んだことをしっかりと活かし、回を重ねるごとにライティング力の向上が感じられた。振り返りのシートをみると、学生達は「書く力」、「読む力」、「話す力」を身につけただけではなく、「考える力」や「自主性」を身につけており、各力を身につけたという実感がモチベーションにもつながっていることがわかった。また、内省をしたり、レポートの内容から客観的な物の見方や批判的なものの見方をしている学生も見られた。課題としては、より良いレポート作成に向けたフィードバックの方法について調べ、今後の授業に生かしていきたい。

[法学・異文化]

担当者名：任ジェヒ

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：秋学期 26 名

結果と課題

このクラスには、春学期からの継続学生が 24 名、秋学期からの新生が 2 名、合計 26 名の受講生がいた。継続学生と新生の間の学術的文章に関する知識量の差を心配していたが、皆の協力的で、能動的な授業態度により、教室活動を進めていく上で困ることは一切なかった。継続学生が新生に知識を共有したり、継続学生同士が互いの悩みを話し合ったりするなど、教室活動においては、学生同士の学び合いが多く見られた。今学期も、主に引

用の仕方とレジュメおよびレポートの書き方を扱ったため、春学期の復習になることが多かったが、皆、その重要性を認識していたため、毎回の課題に熱心に取り組んでいた。レポートの主張に最も適した資料を選択した上で、適切に引用を行うことに関しては、難しさを感じる学生が多かったが、授業中に繰り返し練習を行ったため、回数を重ねるごとに正しく使えるようになっていった。課題としては、より多様な資料を用いた引用の練習が挙げられる。今学期、受講生のレポートには、インターネット上に一般公開されている資料、新聞記事、論文など、さまざまな種類の文章が引用されていた。受講生が引用する資料の多様性を考慮し、今後は、さまざまなジャンルの資料を用い、直接引用および間接引用する練習を授業中に行っていく必要があると思われる。

[観光・映像]

担当者名：川端芳子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：秋学期 8 名

結果と課題

全員、対面での授業になり、みな毎回のクラス活動に積極的に参加した。また、出席の状況も良好で、各課題に熱心に取り組んだ。その結果、レジュメの作成では、資料に適切なタイトルや番号を付ける、名詞止めで箇条書きにするなどの工夫があり、内容の簡潔さや視覚的な分かりやすさの点で進歩が見られた。レポートの作成では、春学期の学習項目を復習しつつ、さらに、間接引用、要約、接続詞の有効な使い方などを学んだ。まだ、引用表現や参考文献の書き方に細かいミスはあるが、引用と自分の意見を区別し、アウトラインに従って論理的なレポートを作成するスキルは、概ね身に付いたと思われる。今後の課題としては、引用の効果的な使用が挙げられる。引用部分と自分の意見の区別ができていても、両者がどのように関連するのかが不明瞭な場合が見られた。この点についての練習を増やし、的確な引用の定着を図りたい。

[心理・福祉]

担当者名：川端芳子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：秋学期 8 名

結果と課題

全員、対面での授業になり、みな真面目に授業に参加し、円滑にクラス活動を進めることができた。また、グループワークでのアウトライン紹介や資料についての意見交換を通して、テーマに関する各学生の理解も深まったようである。レジュメの作成では、春学期には形式

や体裁が整っていない等があったが、秋学期には必要な情報を抽出し、読みやすくするための工夫ができるようになった。レポートの作成では、春学期の学習項目を復習しつつ、さらに、間接引用、要約、接続詞の適切な使い方などを学んだ。また、引用表現や参考文献の書き方に細かいミスはあるが、全体の構成に注意し、自分の意見と他者の意見を明確に区別するという意識は、身に付いたと思われる。今後の課題としては、文法事項の定着が挙げられる。クイズでは良くできていても、実際のレポートでは、「したがって／そのため」「また／および」「考える／考えている」などの類似表現の誤りが見られた。文章作成において正確な表現ができるよう、練習などを工夫したい。

[GLAP]

「大学生の日本語 D」 は「Japanese Language and Japanese Culture B」と併置のため、「Japanese Language and Japanese Culture B」部分を参照のこと。

2022 年度 NEXUS 日本語科目 授業記録

コース概要

本学では 2022 年 9 月より新しい外国人留学生受け入れ制度「Rikkyo Study Project」を開始し、より多くの外国人留学生を受け入れ、本学内に一層の国際交流を図ることになった。このうち NEXUS プログラムは、入試時点では日常的な場面で使われる日本語をある程度理解することができる日本語能力（日本語能力試験 N3 程度）を目安として求めている。NEXUS 日本語科目は、9 月に入学した正規学部生が 4 月から既存の学部カリキュラム（日本語による授業）で学べるよう、アカデミックジャパニーズを学ぶためのコースである。各科目の詳細は次に示す通りである。

<NEXUS 日本語 A>

担当者名：山内薫

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：秋学期 4 名

使用教材：独自教材

コースの目標

学生が知識として持っている文型や語彙を、日常生活のみならず、大学での学習や研究活動の様々な場面で活用できるレベルに高め、次の学期から学部の授業に参加できるようにすることを目指す。

授業の方法

本クラスでは、文法・文型、読解、語彙、小レポートについて、広く扱った。また、読解

素材を軸とし、小レポートを作成した。読解素材としては、「観光」、「デジタル時代の消費者行動」、「メディア・リテラシー」、及び「創造性を育む教育」の記事を扱った。具体的には、まず、記事を読む前に、関連する話題について話し合った後に、各自あるいはペアで読解を行った。内容理解においては、全体で確認する方法と、二つのグループでそれぞれの分担箇所のパラフレーズをした後にメンバーを入れ替えて説明を行う方法などで行った。また、アンケート調査を実施し、各自でテーマと内容を考案し、アンケートの作成と回収、調査結果を小レポートとしてまとめた。なお、小レポートは、担当教師のフィードバック後にリライトを提出し、アンケート調査は、各段階で担当教師のフィードバックを受けながら進めた。

結果と課題

4名のクラスであったが、授業態度が大変よく、学期中は誰一人遅刻や欠席することなく、大変意欲的に日本語学習に取り組んだ。読解において理解できない箇所がある際にはすぐに質問が出てきて、各活動における理解度が把握しやすかった。各学生に日本語力の異なりが多少あったものの、4名とも本クラスや教材における内容の難易度及び進度に合う日本語力を持ち合わせていた。日本語力に異なりがあることにより、課題の取り組みにおいて、毎回、授業内に終わる学生と、終了後の提出期限間際の提出となる学生とに分かれた。各学生の歩みに対応するために、特に、進みの早い学生には、追加の読解資料読解やリアクションペーパー作成に取り組んでもらった。今後、さらに各学生の日本語力の異なりへの対応方法を考えていくとともに、小レポートの効果的なフィードバック方法も考えていきたい。

<NEXUS 日本語 B>

担当者名：山内薫

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：秋学期 4 名

使用教材：独自教材

コースの目標

学生が知識として持っている文型や語彙を、日常生活のみならず、大学での学習や研究活動の様々な場面で活用できるレベルに高め、次の学期から学部の授業に参加できるようにすることを目指す。

授業の方法

本クラスでは、文法・文型、語彙、聴解会話について、広く扱った。また、「デジタル時代の消費者行動」、「メディア・リテラシー」及び「若者の意識」の投書や調査データといった話題を軸とし、ディスカッションやプレゼンテーションを行った。具体的には、同一の内

容あるいは担当箇所を各自で読解した後、各自あるいはペアで理解を深めながら、スライドを作成した。なお、各自で全体ディスカッションの際の視点を考え、スライドに盛り込んだ。作成後は、ペアで発表の練習を行った上で、一人 10 分～20 分程度の発表を行った。また、アンケート調査のプレゼンテーションでは、発表の表現を学んだ上で、各自でスライドを作成し、10 分の発表及び質疑応答を行った。話題に応じて、ディスカッションやプレゼンテーション後に、リアクションペーパーを作成した。なお、毎週、担当教師から、発表あるいはリアクションペーパーのフィードバックを受けた。

結果と課題

課題の意図に対する理解が早く、課題への取り組み方においても、いずれの学生も大変熱心であった。学習に対する意欲も非常に高く、ペアワークでは協働的に進めることができおり、意見を活発に出し合いながらスライド作成や発表の分担を行っていた。発表は、担当教師のフィードバックを効果的に取り入れ、学期中に回数を重ねるごとに、聞き手への配慮や伝え方の面が格段に改善された。また、普段の活動から時間配分を意識して取り組んでもらうことにより、各自で時間管理ができるようになった。ディスカッションでは、常に、各学生の視点から鋭いポイントが提示された。いずれの学生も自分の意見を積極的に述べるとともに、クラス 4 名と教員で深い議論に発展することが度々あった。リアクションペーパーでは、議論の内容をまとめるとともに、さらなる考察に展開した記述となっていた。今後、そのリアクションペーパーを内容面及び日本語面からどのようにフィードバックを行えば、学生の学習に効果的に働くのかを考えていきたい。

<NEXUS 日本語 C>

担当者名：小森由里

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：秋学期 4 名

使用教材：独自教材

コースの目標

学生が知識として持っている文型や語彙を、日常生活のみならず、大学での学習や研究活動の様々な場面で活用できるレベルに高め、次の学期から学部の授業に参加できるようにすることを目指す。

授業の方法

ドキュメンタリー番組などを視聴覚教材として聴解練習、レポートの作成、プレゼンテーションを行った。教材のテーマとしては、コース前半は日本の四季折々の伝統行事を、中盤以降は若者の消費、男性の育児、SDGs などの社会問題を取り上げた。聴解練習では、ワー

クシートを使用し、番組の内容理解を確認した。また、日本の伝統行事の中から1つ選ばせ、学生の国の行事との比較についてPPTを用いてプレゼンテーションさせた。また、社会問題に関するレポートを2本作成させ、プレゼンテーションさせた。レポートはフィードバックをして修正版を提出させた。レポートでは適切な表現、レポートの構成、論理的な組み立て方、引用の仕方や出典の示し方、プレゼンテーションではスライドの作り方や発表のための表現を指導した。

結果と課題

非常に真面目な学生ばかりで、出席率は極めて高く、授業中もどのようなテーマに対しても前向きに取り組んでいた。社会問題をテーマにした授業では、前の週に語彙リストを配付し言葉の意味を調べてくることを宿題にしたが、全員がきちんと意味を調べ言葉を理解したうえで授業に臨んでいた。学生たちはこれまで日本のドキュメンタリー番組などを視聴することはほとんどなかったようで、コースのはじめには自然なスピードの日本語に不慣れであったが、練習を重ねることによって徐々に聞き取ることができるようになった。また、日本語でPPTを作成しプレゼンテーションをしたことがない学生がほとんどであったが、コース終盤には短時間でスライドを完成させられるようになった。特に、プレゼンテーションや作文において、学生たちの修正能力の高さには驚かされた。注意喚起すると、次には指示通りに対応し自力で修正することができた。

レポートは、コースのはじめに目立ったねじれ文は少なくなったものの、適切な語や表現を使用することができないなどの課題が残った。レポート指導においては、教員と学生とのやりとりばかりになってしまったが、学生同士でそれぞれのレポートを推敲し合うなどの協働活動も効果的だったと考えられる。今後の課題としたい。

<NEXUS 日本語 D>

担当者名：小森由里

授業コマ数：週1コマ

履修者数：秋学期4名

使用教材：独自教材

コースの目標

学生が知識として持っている文型や語彙を、日常生活のみならず、大学での学習や研究活動の様々な場面で活用できるレベルに高め、次の学期から学部の授業に参加できるようにすることを目指す。

授業の方法

授業では、日本の四季折々の伝統行事や社会問題など、毎回テーマを1つ決め、それに関

するディスカッションやプレゼンテーションを行った。ディスカッションでは、司会者と報告者を決め、学生自らがイニシアティブをとって話し合いを進め、ディスカッション終了後に話し合った内容を報告するように指示した。また、授業で扱った中から学生にテーマを選択させ、プレゼンテーションをさせた。コース前半の「伝統行事」に関するプレゼンテーションのクラスには、日本人学生にも参加してもらい質問やコメントをお願いした。後半にもビジターセッションを設け、「SDGs」に関する発表をさせて日本人学生からの質問に答えさせた。さらに、「選挙」について日本人学生と一緒にディスカッションを行った。

結果と課題

学生たちは全員が無遅刻無欠席で、毎回熱心に課題に取り組んでいた。ほとんどの学生が日本語でディスカッションをしたことがなく、日本語での司会や報告などの経験がなかった。そのため、ディスカッションのための表現を導入したものの、コースのはじめは、司会者に促されて自分の意見を言うだけで精一杯だったが、徐々に互いの意見に質問やコメントができるようになった。また、司会や報告の役割も躊躇しがちであったが、練習を重ねて、冗長になりがちだったディスカッションの報告を簡潔にまとめられるようになった。

一方で、メンバーが毎回同じ4名のクラスメートだったため、ディスカッションの流れが単調になりがちだった。コース後半のビジターセッションで、日本人学生にもディスカッションにも参加してもらったことは学生には刺激になり大変有意義だったようだ。今後は、ビジターセッションの回数を追加し、日本人学生とのやり取りを増やしたい。

<NEXUS 日本語 E>

担当者名：数野恵理

授業コマ数：週1コマ

履修者数：秋学期4名

使用教材：各学科で指定された図書

コースの目標

学部の学修のために必要な日本語力、姿勢、行動について理解し、実践することができる。

授業の方法

この科目はNEUS日本語Iクラスと連動する形で進めた。各学部学科が指定する図書を読み進めていくために、学期開始時は、漢字語彙リストの使い方、オンラインツールの利用方法、図書館のデータベースの利用方法、読解ストラテジーなどを指導した。さらに、論理的かつ批判的に考える力が求められること、資料を調べた場合には出典を示す必要があることなど、大学で期待されることを伝えた。

また、自身の日本語学習の課題を明確にし、自律的に学んでいくために、学期開始時に目

標と課題を考える時間を設け、学期中盤と最終日にはこれまでにできるようになったことを振り返って、今後の目標と課題を考え、それをクラスで共有させた。毎回の授業では、課題図書学習の進捗状況やチューターとの活動状況、困っていることやできるようになったことを報告させて、授業時間外の自身の学習やチューターとの活動が順調に進むようにした。

さらに、専門分野の内容について説明したり、意見を述べたりする力を養うために、課題図書で学んだことのうち、他の学科の学生に紹介したい内容を発表してディスカッションをするという活動、課題図書についてリアクションペーパーを書く活動も行った。また、聴解力を伸ばすために、冬休みの課題として、各学科に関連のある動画を視聴してノートを取り、リアクションペーパーを書かせた。

結果と課題

4名とも目的意識と学習意欲のある学生で、各学科の指定する課題図書学習に一学期間しっかりと取り組んだ。学部日本人学生のチューターに学習を支援してもらうことで、日本語だけでなく専門分野で必要となる基本的な知識を身につけることもできた。専門分野の読み物を読むことで、知的好奇心も刺激され、学びたいというモチベーションが高まったと思われる。

各学科の課題図書の内容を他の学科の学生に対して説明するプレゼンテーションは、学期前半は語彙の選択や発音の問題でわかりにくい学生や話が冗長で言いたいことが伝わりにくい学生がいたが、学期終盤には4人ともかなりわかりやすく発表ができるようになった。聴衆を意識した話し方もできるようになり、クラスメートとインターアクションをとりながら発表し、質疑応答やディスカッションでの受け答えもうまくなった。各学科で指定された課題図書での学びについて紹介する活動は日本語でのプレゼンテーションの力を伸ばす目的で始めたものであるが、リベラル・アーツ教育を可能にするものでもあることがわかった。今年度は経済学部、経営学部、社会学部の3学部4学科の学生がそれぞれの図書を紹介し合ったが、例えば経済学者が他の分野の図書でも紹介されたり、関連する話題がそれぞれの図書で異なる視点で紹介されたりすることもあり、専門分野の枠を超えて多角的に考えることの大切さを知る機会となったと思われる。また、課題図書の読解やクラスでのディスカッションを通して、批判的に考えようとする姿勢も見受けられ、大学で学ぶ姿勢が身についた。

リアクションペーパーも、当初は必要のない説明が長く意見が短い、どこまでが本の内容でどこからが自分の意見か分からないなどの問題が見受けられたが、だいぶ改善された。ただし、まだ日本語の表現に問題のある学生もいるため、来学期以降も初年次の正規学部生のための日本語科目で力を伸ばしていく必要がある。

聴解力については、他の科目の授業報告からもドキュメンタリー番組などの聞き取りが苦手な複数いることがわかり、冬休みにそれぞれの学科に関連した動画を視聴してノート

をとる宿題を課した。これはよい練習となったが、4月から日本人学生と一緒に学んでいくためには、聴解力をはじめ、日本語の力をさらに伸ばす必要がある。そこで、春休み中もチューターによる支援活動を継続し、専門分野に関連のある動画や今学期読んだ課題図書の内容をチューターに説明したりディスカッションしたりさせることにした。NEXUS は今年度からスタートしたプログラムであるため、この学生たちが4月から学部の授業についていけているかなど追跡調査をし、来年度以降のプログラム改善につなげたい。

<NEXUS 日本語 F4 / F5 / F6>

併置科目の J4 / J5 / J6 文法を参照

<NEXUS 日本語 G>

担当者名：任ジェヒ

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：秋学期 4 名

使用教材：独自教材

コースの目標

漢字語彙の拡充を目的として、漢字の意味、漢字語彙の使い方に関する知識を深めるとともに、読んだり書いたりする力をつける。

授業方法

前半と後半、異なる方法で進めた。まず、前半では、漢字テキストを使い、前回学習した範囲の漢字クイズを実施した後、その日に学習する範囲の漢字が使われている言葉について発表をしてもらった。その後、各自ワークシートを進め、最後は次回までの復習および予習の内容を確認した。後半では、NEXUS プログラムが、学部への着地を目標としていることを意識し、学部で出会う可能性の高い漢字を学ぶことに焦点を当てた。具体的には、履修生の所属学部が指定する専門書に書かれている漢字の学習を目標とした。毎週、大切だと思った文を選ぶ→その中から覚えたい専門用語（漢字語彙）いくつか、一般的な漢字語彙いくつかを選ぶ→漢字の書き順を調べる→それぞれ専門書の例文をさらに探し、辞書の例文も調べた後で、自分の文を作成する→一般的な漢字語彙をクラスで紹介する、といった流れで進めた。数回、漢字語彙に対する知識の確認のため、課題図書の 1 頁乃至 2 頁を、音読してもらった。また、復習に活用できるように、クラスで取り上げられた漢字語彙はリスト化し、翌週に配付をした。

なお、履修生の学習希望により、漢字テキストも併用したが、ワークシートは自習用として配布し、授業中は学部の専門書のみを扱った。自習の確認のため、クイズは継続して実施した。

結果と課題

4名とも、学部への着地という NEXUS プログラム共通の目標を常に意識している学生だったため、学部指定の専門書に書かれている漢字語彙に高い関心を示し、毎週、非常に熱心に教室活動に取り組んでいた。選定した漢字語彙の書き順や例文といった指定のタスクだけでなく、漢字語彙を構成する漢字一文字の音読み、訓読み、当該語彙の類義語、対義語、高い頻度で共起する漢字語彙を調べるなどといった、能動的な姿が見られた。このような積極的な学習態度は、互いの学習意欲の向上という肯定的な影響を及ぼしたと思われる。また、上述のように、後半から、学部で出会う可能性の高い漢字の学習を主な目的としたが、前半に扱った漢字テキストを通して日常生活に必要な漢字の学習ができるという点から、継続を希望する声があったため、クイズは1学期通して実施した。毎週のクイズ10回、まとめクイズ2回、合計12回のクイズにおいて、全員優秀な成績をおさめた。

一方で、課題も見られた。履修生4名の所属学部が全員異なったため、授業では、個人作業の時間が長かった。教師と学生一人ひとりのインターアクションの時間はある程度確保できていたが、学生間のインターアクションは少なかった。漢字語彙の紹介において、やり取りが行われ、それぞれが選んだ漢字語彙について知る機会があったが、十分だとはいえない。学部で出会う可能性の高い漢字は、それぞれ異なるため、個人作業が長くなることは当然のことであるが、4名の漢字に対する背景知識を共有し、漢字に対する知識を深める機会を設けることも必要だと思われる。その具体的な活動については、工夫を重ねていく必要がある。

<NEXUS 日本語 H>

担当者名：齊藤紀子

授業コマ数：週1コマ

履修者数：秋学期4名

使用教材：独自教材

コースの目標

日常生活と大学生活における聞く力、話す力、書く力を伸ばし、次の学期から学部の授業に参加できるようになることを目指す。適切な待遇表現を用いたコミュニケーションをすること、プレゼンテーションをして小レポートを書くことができるようになることを目指す。

授業の方法

授業は学生生活で実際に必要と想定される場面で、尋ねる、誘う、依頼するなどの機能表現を含む聴解とロールプレイ、及びそれと並行してメールを書く、インタビュー音声を聞きとる、グループディスカッションをするなどの活動を組み合わせる形で行った。学期の中盤か

らは学生自身がテーマを決め、インタビュー調査を実施し、結果をまとめて発表とレポートの形で報告するプロジェクトにも取り組んだ。プロジェクトではインタビューのテーマや質問内容の検討、インタビュー結果のまとめ、スライド作成と口頭発表、まとめのレポートの作成など一連の作業を通して、大学で求められる目的ごとの表現技術を身につけられるよう、演習を行った。

結果と課題

学生は授業への参加度もよく、また意欲的で、毎回の様々な課題の提出もほぼ滞ることがなかった。授業での集中力も高く、その結果、毎回の授業で学んだことを確実に身につけていった。授業内外での日本人学生との接触や、授業での練習の成果が少しずつ積み上がり、学生自身も自信がついていく様子が窺えた。すでに大学生活において日常生活レベルではほぼ問題ないと思う。

課題としてはやや難易度の高い内容の聞き取り、発表の際の言葉の選択、複雑な場面での談話展開、漢字の読みなどが挙げられる。今後は読解やディスカッションで出てきた語彙や漢字を確実に覚え、またなるべく多くの場面で積極的に聞き取りの機会を持ち、聴解力を伸ばして行くと思う。

<NEXUS 日本語 I>

担当者名：aクラス：数野恵理、bクラス：任ジェヒ

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：秋学期 a クラス 2 名、b クラス 2 名

使用教材：各学科で指定された図書

コースの目標

所属学部が扱う専門書を活用して日本語学習を行い、学部での学修のための日本語力と学習ストラテジーを身に付ける。

授業方法

この科目は、各学生の所属学科指定の図書を 1～2 冊扱い、チュートリアル形式で進めた。今年度は 1 クラス 2 名だったため、毎回 50 分ずつ教員と学生が 1 対 1 で会ってチュートリアルを行なった。

授業の前に、学生は漢字語彙リストを活用しながら課題図書を読んでワークシートの質問に答え、学部のチューターの日本人学生 2 名に 100 分間の学習支援を受けた。チューターとの活動では、読んでわからない部分を確認したり、ワークシートの確認をしたり、図書の内容や学生生活に関するディスカッションをしたりさせた。

授業では、主に、1) わからない部分はないか、2) 何を書いてあったか、3) 最も印象に

残った内容は何か、3) チューターとの活動でどのようなディスカッションをしてどのような気付きを得たかを話してもらい、その週の目標が達成できたかを確認した。また、次回までの準備や活動意図についても確認をして、より積極的に取り組むように促した。

なお、最終週はチュートリアル形式ではなく、a、b クラス合同で最終発表をした。発表では、課題図書で学んだことのうち他の学科の学生に紹介したい内容を紹介して、考察を述べたあと、ディスカッションをリードさせた。

結果と課題

(a クラス)

2名とも一学期を通して積極的な態度で臨んだ。留学生は事前に予習をして、日本人のチューターに学習支援活動を受けてからこのクラス(チュートリアル)に参加しているが、留学生にも日本人のチューターにも、毎回、活動報告を Google フォームで提出してもらっていたので、それぞれの状況がしっかり把握でき、何か問題がある場合にはすぐに対応できた。また、1クラス2名で、1名につき毎回50分のチュートリアルを行うことができたこともあり、チュートリアルでは課題図書の内容についてじっくりと話すことができた。理解が十分でない箇所が場合は該当箇所を音読させた後で詳しく解説し、問題がない場合にはその回の内容を自分の言葉で説明させたりディスカッションをしたりした。これにより、課題図書の理解も深まり、説明する力や意見を述べる力も伸びた。

今後の課題は2点ある。一つは、各学科で扱う課題図書の進捗とワークシートの見直しである。2学科のうち一つの学科は最初の2~3章の抽象度が高く、まだ日本語力がついていない段階で学生にかなり負担があったので、扱う順番を工夫したい。もう一つの学科は学期前半に扱った1冊目はわかりやすい内容だったが、2冊目は抽象的で難易度もかなり高くなったため、来年度、1冊目は1回で扱う量を増やしてペースを速め、2冊目にかかる時間を増やしたい。もう一つの課題は、学生数が増えた場合の対応である。今回のようなチュートリアル形式は非常に効果的であるが、学生数が増えると難しくなる。人数が増えた場合にどのような進め方をするかは検討が必要である。

(b クラス)

2名とも非常に熱心で、学部への着地という NEXUS プログラム共通の目標を常に意識している学生だった。授業では、1) ワークシートの目標が達成できたか、2) チューターとの打ち合わせでどのような気付きを得たか、3) 最も印象に残った内容は何か、の3点を確認した。学生には、専門書の中の漢字語彙や文法を調べ、文章の意味を理解する力だけではなく、自分の言葉で要約をしたり、感想や意見を述べたりする力も求められていた。そのため、予習や復習にかなり時間をかける必要があったと思うが、2名とも、最終回まで、熱心に取り組んでいた。授業中は、1対1のチュートリアル形式の利点を活かし、ワークシートにある問をさらに展開させ、さまざまな角度から質問をするように意識していた。その結果、

学期前半においては、比較的受動的な姿勢であった学生も、学期後半になってからは、自ら発展的な内容の質問をしたり、著者の意見に対して指摘をしたりするようになった。

一方で、課題も見られた。特に、学期前半において、背景知識がない状態で、専門書を読み、さらに複数の問に答えるといった活動に苦戦している学生がいた。難易度を調整するため、今学期はワークシートの問を学期途中から省略したり、修正したりしたが、十分な効果があったかについては検討が必要である。専門書の読解に難しさを感じる原因としては、専門知識の有無、漢字、語彙、文法など、さまざまなことが考えられる。今後は、学生一人ひとりが感じる難しさをよりの確に把握し、個々の学習スタイルに適したワークシートや活動を考えていく必要があるのではないかと考えられる。

<NEXUS 日本語 J>

担当者名：黄慧

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：秋学期 4 名

使用教材：独自教材

コースの目標

資料を読んでその内容を説明したり意見を述べたりする力を伸ばし、次の学期から学部の授業に参加できるようになることを目指す。

授業の方法

独自教材を使用し、毎回様々なテーマに関する文章を読んでディスカッションを行った。

まず、「読む前に」にある設問について、それぞれ意見を出し合い、みんなで話し合いをした。

次に、読解文を読む時間を設け、各自精読を行ってもらった。読み終わってから読解の設問に移り、答え合わせをしながら、不正解になったものは、正解を出した学生に説明してもらい、教師は補足する形でフィードバックを行った。

最後に、読んだ内容について、ディスカッションを行った。教師はファシリテーションの役割として話を振りながらまとめていき、最後にディスカッションした内容をまとめてリアクションペーパーを書いてもらった。

結果と課題

4人しかいないクラスだったが、学生同士の仲が大変よく、学習意欲も高く、自律的に学んでいく姿勢がうかがえた。

毎回「読む前に」と「読んだ後に」のディスカッションは活発に行われており、グループ活動では助け合いながら進めることができている。自分の国での経験や生活習慣、文化や教

養などと読解文の内容を照らし合わせながら、自分の言葉でしっかり意見が言えていた。さらに、ディスカッションする際には、4人とも自分の意見を述べるだけでなく、相手の話もしっかり聞き、それに対して、疑問に思うことや、自分の意見などもしっかり述べることができていた。

読解文に関するまとめや、ディスカッションした内容を含め、自分の感想や意見などを毎回リアクションペーパーに書いてもらった。リアクションペーパーの書き方や日本語の使い方に関して、最初は添削する箇所が多かったが、私が想像するより学生たちの進歩は著しかった。短い4カ月の間にどんどん上手に書けるようになり、学期の後半ではリアクションペーパーの形式や日本語の問題がほぼないぐらい上達していた。

今後の課題としては、要約のスキルアップがあげられる。リアクションペーパーを書く際には、要約の練習は行っていたものの、あまり時間を取ることができなかった。要約が正確に行われているかどうかは、読解文を正確に読めていたかどうかに関わるだけでなく、実際大学生活において、レジュメの作成、先行研究や講義まとめなど、様々な場面で大事になってくるスキルであると思われる。今学期は要約の練習を思うほど実施できなかったため、次回はずっと丁寧に行いたいと思った。

それから、精読する際と、リアクションペーパーを書く際には、分からない言葉を調べてもいいということにしていたので、随時調べながら読んだり書いたりしていた。しかし実生活ではゆっくり調べられない場面もあるため、調べずに斜め読みをして、文章の大意をつかめるスキルも必要ではないかと考えられる。辞書を調べずに文の大意をつかめる練習や、辞書を調べずに知っている言葉だけで自分の言いたいことを表現できるようにする練習も必要になってくると思われる。

2022年度 NEXUS プログラム 学びの精神科目 授業記録

コース概要

NEXUS プログラムの学生向けに2022年度秋学期に立ち上げた科目である。NEXUS プログラムの学生が、大学で学び始めるにあたり、大学で学ぶこと、また立教大学という場で学ぶことの意味を理解することを目標とする。

<多文化共生社会と大学—やさしい日本語でともに学び、ともに生きる—>

担当者名：<秋学期>藤田恵

授業コマ数：週1コマ

履修者数：秋学期4名

使用教材：独自教材

コースの目標

多文化共生社会とはどのような社会かを自分の言葉で説明することができる。また、日本

が目指している多文化共生の形や実現のための方法をヨーロッパやアメリカ、アジアの国々と比較し、それぞれの特徴を知ることによって、日本に暮らす多様な人々が真の意味で共生していくことを可能にするためには、日本に暮らす一人ひとりがどのような態度を持ち、どのように行動していくべきか、自分の言葉で表現することができる。そして、そのような日本の多文化共生社会の実現のために、日本の大学は何をすべきかについて考え、自分の言葉で提案することができる。

授業の方法

全学共通科目（多彩な学び）「多文化共生社会と日本—やさしい日本語とともに学び、ともに生きる—」と一体的に授業を運営し、やさしい日本語による講義、協同学習（ディスカッション）、グループ発表等の活動を行った。

結果と課題

2022 年度秋学期に入学した NEXUS プログラムの学生は 4 名であった。授業活動は、「多文化共生社会と日本」（全学共通科目 多彩な学び）の履修生 10 名と共に行い、学生 14 名、教員 2 名、TA1 名で、週 2 回の授業を運営した。

本科目は、NEXUS プログラムの学生が、大学で学ぶ力を身につけることを目標の一つに設定しており、学生には、講義内容のノートテイキング、リアクションペーパーの作成、グループディスカッション・発表、レポート作成を課した。学期開始時には、大学での学び方への不慣れさと、自身の日本語力への自信のなさが見られ、「多文化共生社会と日本」の履修生がグループ活動の中心となっていたが、学期が進むにつれ、NEXUS プログラムの学生も積極的にディスカッションで発言する姿が見られるようになった。また、リアクションペーパーの作成においては、当初、授業内に書き終えることが難しい学生もいたが、学期後半には短時間で記述できるようになり、記述内容も講義内容と自身の意見をうまくまとめられるようになっていた。学期末のレポート作成においては、教師の指導と、「日本語相談室」を併用し、全員 2000 字以上のレポートを完成することができた。

本科目の内容は、日本の大学で学び、生活する NEXUS プログラムの学生にとって、当事者としての意見が出しやすいと考える。しかし、前述の理由から、学期前半は受身になってしまうことがあることが分かった。より早い段階から授業参加者の一員として活動に参加できるようにするにはどのような指導を行えばよいか、今後の課題として考えていきたい。

2022 年度 国際的協働のための国内インターンシップ 授業記録

コース概要

教室での学びと就業体験を通して、自分と社会とのつながりを意識する。

<国際的協働のための国内インターンシップ>

担当者名：丸山千歌

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：秋学期 5 名

使用教材：独自教材

コースの目標

就業体験を通して、大学4年間の学びの先にあるキャリアプランを考えるとともに全学での学び、また所属学部での学びがどう社会と結びついているのかを知る。教室での学びだけでなく、教室外での経験を通して、自分と社会とのつながりを意識するようになる。

授業の方法

事前学習、インターンシップ、事後学習の3部により構成する。具体的には春学期中に履修者の選考及び事前研修を経て、夏季休暇中に各企業にインターンとして派遣する。外国人入試による入学者は日本での就業体験、それ以外の学生は日本語非母語話者との協働体験が可能な日本での就業体験を予定している。派遣期間は10日～14日で、秋学期に事後研修を実施する。

結果と課題

インターンシップは企業の指定により対面型、オンライン型両方の形態があった。学生は自助努力ではなかなかインターンシップの機会を得ることができない、日本で働くことに関心があるなどが動機となって本科目を履修した。留学生の就職支援の専門家をゲストスピーカーとして、事前学習と事後学習に各1回招いた。事前学習および事後学習での学生の取り組みは大変積極的で、協働学習の質も高かった。特に事後学習では、「できる人」のイメージが変わった、どのような仕事に適性があるかがわかった、関心がある仕事領域に気づいたなどの感想があり、各自に気づきがある学修ができたように思う。企業からのフィードバック等をふまえ、次年度は、「与えられた仕事をする」以上の姿勢でインターンシップに迎えるような事前学習を試みたい。

2. 2022 年度 Placement Test 実施報告

新型コロナウイルス感染症の影響により、22 年度春学期は、正規学部生についてはオンラインによるインタビューテストによりプレイスメントテストを実施した。また、特別外国人学生及び正規大学院生についてはこれまでの日本語学習履歴等から日本語のレベルを配置した。そのため、授業開始後、一定期間を設けてレベルの不一致のある学生に対しては修正を行った。

秋学期については、授業等が徐々に平常に戻りつつあること、特別外国人学生の受け入れも戻ってきたことから、通常通りの対面実施を行った。

【春学期】

2022 年度春学期 日本語プレイスメントテスト対象者数

	正規学部生		特別外国人学生		正規大学院生		研究者
	新入生	在学生	新入生	在学生	履修希望 新入生	在学生	
対象者	85	2	56	0	19 (※1)	9	0
全対象者数 172 名							

※1：正規大学院生（履修希望新入生）28 名のうち、ビジネスデザイン研究科 11 名

春学期日本語プレイスメントテスト対象者 レベル判定結果（特別外国人学生・正規大学院生）

J0	27
J1	5
J1S	5
J2	4
J2S	1
J3	5

J3S	0			
	文法・文型	読解	作文	聴解・会話
J4	6	7	7	7
J5	2	1	2	2
J6	4	4	20	17
J7	22	17	3	8
J8	5（うち条件付き3名）			

<春学期総評>

新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、正規学部生については、新入留学生の大学への着地を促すことと、未入国の学生が約半数いることを考慮して、オンラインによるインタビューテストを実施した。国際センターを通じて事前に当日についての詳細を学生に通知したほか、Zoomの事前アクセスチェック時間を設けるなど、オンライン実施に向けたリスク管理を工夫した。オンラインによる会話能力のみでの判断となるため、読み書き能力が測れないというデメリットはあるが、非常時の対応としては十分であると思われる。

特別外国人学生、正規大学院生については、2020年度、2021年度と同様に実施を見送り、代替措置として、留学生の日本語学習歴や日本語能力試験の受験実績（自己申告）とこれまで蓄積してきた知見を活用して、暫定的なレベル判定を行い、授業第1週に個別に履修相談に応じることで、履修する日本語科目の確定まで導いた。

【秋学期】

2022年度秋学期 日本語プレイスメントテスト受験者数

	正規学部生		特別外国人学生		正規大学院生		研究者
	新入生	在学生	新入生	在学生	新入生	在学生	
9月6日 9月入学者 正規学部生 特別外国人学生 継続正規院生対象	7	0	185	0	0	6	0
9月13日 新規正規院生 特別措置	0	0	18	0	8	3	0

特別措置日までに来日できず、既習歴より判断	0	0	5	0	6	0	0
	7	0	208	0	14	9	0
全受験者数 238名							

秋学期プレイスメントテスト受験者 レベル判定結果 (特別外国人学生・正規大学院生)

J0	77			
J1	11			
J1S	13			
J2	16			
J2S	16			
J3	12			
J3S	7			
	文法・文型	読解	作文	聴解・会話
J4	15	14	15	14
J5	15	12	17	13
J6	23	15	23	19
J7	16	21	18	17
J8	15(うち条件付9名)			

<秋学期総評>

秋学期は、通常通りの対面での実施となった。数年ぶりの対面実施、さらに特別外国人の受け入れ人数も最多となったが、事前にしっかりと打ち合わせ、予行演習を行ったため、当日は問題なく実施できた。

2022年度の日本語科目履修者の内訳は以下の通りである。(履修者数は、継続生も含む。ここでいう「継続生」とは、前学期に日本語科目を履修した者。継続生は日本語プレイスメントテスト対象者には含まない。)

【2022 年度春学期】

【2022 年度秋学期】

	【2022 年度春学期】		【2022 年度秋学期】	
	国 籍	人 数	国 籍	人 数
特別外国人学 生	アメリカ	4	アイルランド	2
	イギリス	3	アメリカ	26
	インドネシア	3	イギリス	10
	カナダ	1	イタリア	3
	シンガポール	3	インド	2
	スイス	2	インドネシア	2
	スウェーデン	2	ウクライナ	5
	スペイン	2	オーストラリア	8
	スロベニア	1	オーストリア	1
	タイ	3	オランダ	11
	台湾	4	カナダ	6
	中国	1	韓国	9
	ドイツ	8	シンガポール	2
	日本	3	スイス	3
	ノルウェー	1	スウェーデン	4
	ハンガリー	1	スペイン	11
	フランス	4	スロベニア	1
	香港	2	タイ	6
	モロッコ	1	台湾	11
			チェコ	2
			中国	14
			デンマーク	1
			ドイツ	19
			日本	4
			ニュージーラン ド	1
			フィンランド	2
			フランス	16
			ベトナム	2
			ベルギー	2
			ポーランド	4
		マダガスカル	1	

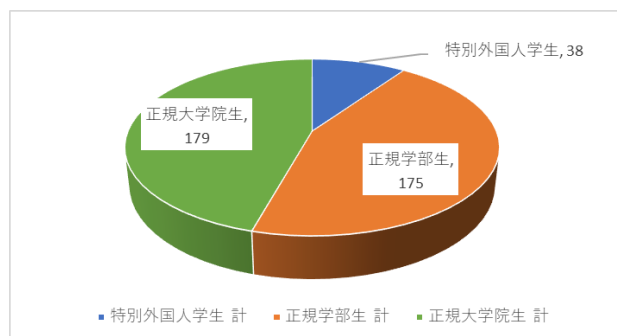
			メキシコ	1
			リビア	1
			ルーマニア	1
特別外国人学生合計		49		194
正規留学生 (大学院)	オーストラリア	1	エジプト	1
	ジンバブエ	1	カナダ	1
	スリランカ	1	韓国	1
	中国	19	スリランカ	1
	ナミビア	1	スロベニア	1
	日本	1	中国	11
	フランス	4	ドイツ	1
	ベトナム	1	ナイジェリア	1
	モロッコ	1	フランス	2
正規留学生（大学院）合計		30		20
日本語履修者 合計	2022 年度春学期	79	2022 年度秋学期	214

*本学では正規留学生は在留資格「留学」を有している者としているが、日本語教育センター科目は、正規大学院生は、特に日本語学習の必要性が認められれば履修を認めているため、上表に記載する。

3. 2022年度日本語相談室実施報告

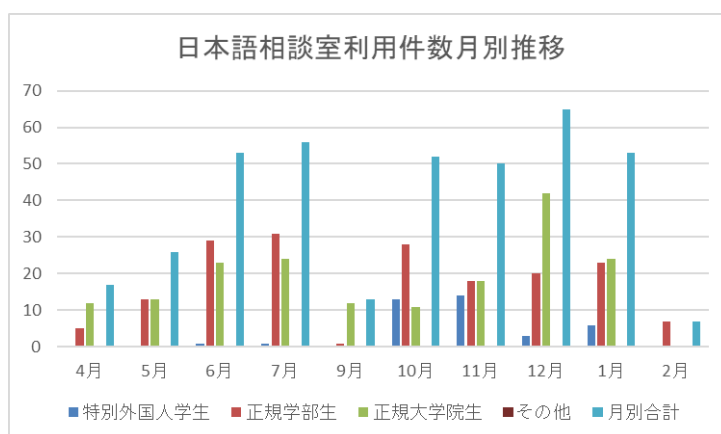
2022年度 日本語相談室利用状況（2022年4月11日～2023年2月3日）

【相談者所属別利用件数】



【月別推移】

相談者属性	予約枠	4月	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	合計
特外	教員	0	0	1	1	0	11	13	3	6	0	35
	学生 アドバイザー	0	0	0	0	0	2	1	0	0	0	3
	小計	0	0	1	1	0	13	14	3	6	0	38
学部	教員	5	13	29	31	1	22	17	15	15	4	152
	学生 アドバイザー	0	0	0	0	0	6	1	5	8	3	23
	小計	5	13	29	31	1	28	18	20	23	7	175
大学院	教員	12	13	23	24	12	11	18	42	24	0	179
その他	教員	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
月別合計		17	26	53	56	13	52	50	65	53	7	392



2022年度の日本語相談室は、新型コロナウイルス感染症対応で培ったオンライン対応の利点を引き続き残すため、ユーザーがオンラインか対面かを選択できるハイブリッドの体制で実施した。また、22年度からは学生アドバイザー枠の運用を開始した。

利用件数は392件と、昨年度よりも33件増えた。特別外国人学生が戻ってきたことにより、昨年度よりも特別外国人学生の利用は増えたが、やはり正規学生の利用が多い。

学生アドバイザー枠については、春学期には利用がなかったものの、秋学期にNEXUSプログラムの学生が入学したことにより、利用が増えた。

利用件数の月別推移をみると、全体としては学期が進むにつれて利用件数が増える傾向があることがわかる。

【所属別利用件数】

		実質 利用人数	合計 利用回数	キャンパス		オンライン (教員)	
				池袋	新座	教員	学生 アドバイザー
特別外国人学生		20	38	28	2	5	3
正規 学部生	文学部	7	20	14	0	6	0
	異文化コミュニケーション学部	8	50	16	0	34	0
	経済学部	5	28	4	0	12	12
	経営学部	2	8	1	0	2	5

	理学部	0	0	0	0	0	0
	社会学部	4	12	2	0	4	6
	法学部	3	11	3	0	8	0
	観光学部	4	8	2	3	3	0
	コミュニティ福祉学部	0	0	0	0	0	0
	現代心理学部	5	38	7	3	28	0
	GLAP	0	0	0	0	0	0
正規 大学院生	キリスト教学研究科	2	20	4	0	16	
	文学研究科	4	19	0	0	19	
	異文化コミュニケーション研究科	5	28	1	0	27	
	経済学研究科	1	7	2	0	5	
	経営学研究科	1	1	0	1	0	
	理学研究科	0	0	0	0	0	
	社会学研究科	2	4	4	0	0	
	法学研究科	2	3	3	0	0	
	観光学研究科	5	23	1	2	20	
	コミュニティ福祉学研究科	3	36	0	0	36	

	現代心理学研究科	2	3	1	0	2	
	ビジネスデザイン研究科	8	16	5	0	11	
	21世紀社会デザイン研究科	8	19	6	0	13	
	人工知能科学研究科	0	0	0	0	0	
	特別外国人学生 計	20	38	28	2	5	3
	正規学部生 計	38	175	49	6	97	23
	正規大学院生 計	43	179	27	3	149	
	その他 計	0	0	0	0	0	0
	合計	101	392	104	11	251	26

所属別、対面・オンライン利用の表からは、新座キャンパスの学生でも池袋で活用していることがわかる。また、ハイブリッドでの運用にしたことにより、オンラインでの利用も一定程度あることがわかる。

オンラインでの相談には、資料の共有などメリットもあるため、今後もハイブリッドでの運用は継続したい。

また、利用している学生は、同じ学生が複数回利用していることがわかる。

【曜日・時限別 利用件数および相談内容の内訳】

日本語相談室は、基本的に予約制で1コマに2件相談を受け付けられる設計となっており、試験期間を入れて各学期16週稼働している。資料からわかるとおり、曜日時限にそれほど偏りはないが、今後もより多くの学生が利用できるよう体制を整えていきたい。

【曜日・時限別 利用件数】

2022 年度春学期

●池袋キャンパス

	月	火	水	木	金
1 限					
2 限	3	3	2	3	
3 限	5		5		7
4 限	4		3		2

●新座キャンパス

	火
1 限	
2 限	
3 限	1
4 限	3

●オンライン(教員)

	月	火	水	木	金
1 限					
2 限	10	5	12	21	
3 限	3	4	8		12
4 限	4	6	14		12

●学生アドバイザー (オンライン)

	水	金
1 限-1	0	0
1 限-2	0	
2 限-1		0
2 限-2		

2022 年度秋学期

●池袋キャンパス

	月	火	水	木	金
1 限				4	
2 限	5	11		3	
3 限	8		8		10
4 限	5			6	7

●新座キャンパス

	火
1 限	
2 限	
3 限	4
4 限	3

●オンライン(教員)

	月	火	水	木	金
1 限				14	
2 限	13	13		19	
3 限	6	8	17		14
4 限	5	7		15	9

●学生アドバイザー (オンライン)

	火	水	金
1 限-2		7	
2 限-1			2
3 限-1	4	5	6
4 限-1	2		

●学生アドバイザー

*学期途中で学生アドバイザーの交代に伴い、以下の時間帯において開室スケジュール変更が発生した。

火曜 3 限-1	12/6~1/31	火曜 4 限-1	9/20~11/29
金曜 2 限-1	9/23~12/2	金曜 3 限-1	12/9~2/3

日本語相談室担当者コメント

今年度の日本語相談室は、従来の教員枠の他、学生アドバイザー枠を設けて開室した。学生アドバイザー枠とは、本学の大学院生と学部生の学生アドバイザーが担当する枠である。教員枠は日本語を母語としない学部生と大学院生を対象とし、さまざまな相談を受け付けているが、学生アドバイザー枠は日本語を母語としない学部生のみを対象とし、相談できる内容も正規科目のレポートと発表に限られる。開室形態は、教員枠は、2020年度と2021年度はオンライン対応であったが、今年度は、オンラインと対面で開室し、学生が選択できる形態にした。学生アドバイザー枠は、オンライン相談室として開室した。

以下、教員枠、学生アドバイザー枠の利用について、順に見ていく。

相談内容の内訳<教員枠>

相談内容	件数
卒業・修士・博士論文（研究計画書、中間発表を含む）	151
就職活動（エントリーシート等）	28
レポート（授業、ゼミ等）	64
奨学金関係（申請書類、面接練習等）	34
発表指導（授業、ゼミ等）	10
学会発表・予稿集・投稿論文	15
学習方法指導（練習、日本語能力試験対策指導も含む）	17
スピーチコンテスト	28
その他	21
合計	368

全体の利用件数は、昨年度の359件から368件へと9件増加した。相談内容で最も多かったのは、「卒業・修士・博士論文（研究計画書、中間発表を含む）」で151件、次いで、「レポート（授業、ゼミ等）」64件、「奨学金関係（申請書類、面接練習等）」34件であった。

昨年度の相談内容と比較すると、最も増加したのは、138件から151件に増えた「卒業・修士・博士論文（研究計画書、中間発表を含む）」である。例年同様、同一学生による定期的な相談も多かったが、論文の提出が近い時期は、新規の利用者も増加した。継続的な利用者に関しては、回を重ねるごとに日本語力の伸びを感じることができた。また、「スピーチコンテスト」が17件から28件に増加した。これは、日本語スピーチコンテストが対面開催となり、出場者が増えたことが影響していると考えられる。

今年度は、学生がオンラインか対面か利用形態が選択できるようになったため、学生が相談内容や学習スタイルに合わせて積極的に相談室を利用することができた。一方で、遅刻やキャンセルがあったり、期日を過ぎて事前資料を提出した学生がいた。そのため、利用方法

や事前提出の日程について引き続き周知する必要がある。

相談内容の内訳<学生アドバイザー枠>秋学期

相談内容	件数
レポート（授業、ゼミ等）	17
発表指導（授業、ゼミ等）	3
スピーチコンテスト	5
その他	1
合計	26

学部生、大学院生などの学生アドバイザーによるオンライン日本語相談室が2022年4月より開室した。学生アドバイザーは、研修を受けたうえで、相談室を担当する。

春学期は学部生1名、大学院1名の学生アドバイザーが担当した。残念ながら春学期の利用は0件であった。

秋学期は学部生1名、大学院生1名の学生アドバイザーでスタートしたが、途中学生アドバイザーの入れ替えがあり、11月末より大学院生2名で担当した。秋学期は授業での呼びかけもあり、学生アドバイザー枠58枠に対し、26件の利用があった。相談内容のうち、スピーチコンテストは特外生、レポートや発表はNEXUSプログラムの学生のみであった。

今後はNEXUSプログラムの学生だけでなく、新たな学部生の利用者を増やすためには、さらなる広報が必要である。また、利用者が学内からオンライン日本語相談室を利用する際、静寂な環境が学内で見つけられないという課題もあった。今後は、利用者増とオンライン相談室の環境整備について、適切な情報が行き渡るよう、広報をしていきたい。同時に、担当する学生アドバイザーに対して行っている研修の教材についても整備をしていきたい。

【2011年度—2022年度 利用件数推移】

	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022年度
特別外国人学生	26	45	62	46	29	88	67	42	63	5	2	38
正規学部生	29	18	33	52	76	98	70	92	126	153	180	175
正規大学院生	89	90	86	138	311	242	268	304	205	167	177	179
その他	0	0	0	1	8	0	2	0	0	2	0	0
合計	144	153	181	237	424	428	407	438	394	327	359	392
増減	100	106.3	125.7	164.6	294.4	297.2	282.6	304.2	273.6	227.1	249.3	272.2

4. 2022 年度立教大学漢字検定試験実施報告

2022年度	試験日	申込締切日	申 込		受 験		合 格	
第1回	6月1日(水)	5月4日(水)	特別外国人学生	6名	特別外国人学生	5名	特別外国人学生	3名
			上級	3	上級	3	上級	1
			中級	3	中級	2	中級	2
			初級		初級		初級	
			正規学部留学生	0名	正規学部留学生	名	正規学部留学生	名
			上級		上級		上級	
			中級		中級		中級	
			初級		初級		初級	
			正規大学院留学生	1名	正規大学院留学生	1名	正規大学院留学生	名
			上級		上級		上級	
中級		中級		中級				
初級	1	初級	1	初級	0			
第1回申込合計	7名	第1回受験合計	6名	第1回合格合計	3名			
第2回	7月13日(水)	6月15日(水)	特別外国人学生	6名	特別外国人学生	4名	特別外国人学生	4名
			上級	2	上級	2	上級	2
			中級	4	中級	2	中級	2
			初級		初級		初級	
			正規学部留学生	名	正規学部留学生	名	正規学部留学生	名
			上級		上級		上級	
			中級		中級		中級	
			初級		初級		初級	
			正規大学院留学生	0名	正規大学院留学生	1名	正規大学院留学生	0名
			上級		上級		上級	
中級		中級		中級				
初級	1	初級	1	初級	0			
第2回申込合計	7名	第2回受験合計	5名	第2回合格合計	4名			
第3回	11月23日(水)	10月26日(水)	特別外国人学生	37名	特別外国人学生	34名	特別外国人学生	26名
			上級	2	上級	2	上級	2
			中級	21	中級	21	中級	15
			初級	14	初級	11	初級	9
			正規学部留学生	名	正規学部留学生	名	正規学部留学生	名
			上級		上級		上級	
			中級		中級		中級	
			初級		初級		初級	
			正規大学院留学生	名	正規大学院留学生	名	正規大学院留学生	名
			上級		上級		上級	
中級		中級		中級				
初級		初級		初級				
第3回申込合計	37名	第3回受験合計	34名	第3回合格合計	26名			
第4回	1月18日(水)	12月21日(水)	特別外国人学生	33名	特別外国人学生	25名	特別外国人学生	23名
			上級	1	上級	1	上級	
			中級	20	中級	17	中級	17
			初級	12	初級	7	初級	6
			正規学部留学生	名	正規学部留学生	名	正規学部留学生	名
			上級		上級		上級	
			中級		中級		中級	
			初級		初級		初級	
			正規大学院留学生	名	正規大学院留学生	名	正規大学院留学生	名
			上級		上級		上級	
中級		中級		中級				
初級		初級		初級				
第4回申込合計	33名	第4回受験合計	25名	第4回合格合計	23名			

2022 年度はすべての漢字検定を実施した。試験時間と授業が重なっている学生に対しては、別日に試験時間を設定して対応を行った。漢字クラスがあることから、毎回多くの学生が受験している。

5. 留学生による日本語スピーチコンテスト実施報告

2022年度は、11月26日に「第11回立教大学留学生による日本語スピーチコンテストーセントポールライオンズクラブ杯」を対面で実施した。新型コロナウイルスの影響で、ここ数年はオンラインによる開催であったが、22年度は特別外国人学生の受け入れも再開したため、対面での実施を行った。当日は、初級から上級まで21名の学生が参加した。

実施の詳細は、日本語教育センターホームページ

<https://cjle.rikkyo.ac.jp/contest/6th.default.aspx>

を参照されたい。

スピーチコンテストの成果物として、『第11回 立教大学留学生による日本語スピーチコンテストー東京セントポールライオンズクラブ杯ースピーチ文集』を刊行した。

6. 日本語教育センターシンポジウム実施報告

22年7月9日に「社会・コミュニティを変える力とは？ー21世紀の日本をけん引する立教型グローバル人材育成を日本語教育の視点から考えるー」というテーマで実施した。本学でTGU以降続けているグローバル人材育成について、改めて本学の目指す理念、人材像を確認するとともに、日本語教育センターが貢献可能な役割について意見交換を行った。

登壇者は松井秀征氏（国際化推進機構長、法学部教授）、中村拓海氏（株式会社 Sociarise 代表）、池田伸子氏（異文化コミュニケーション学部教授）、日本語教育センターの活動に関わった学生から益本佳奈氏（本学卒業生、Fundac ja SAKURA さくら日本語学校教師）、中内美沙氏（社会学部4年）、小西佐和子（異文化コミュニケーション学部3年）であった。

この企画を通して、日本語教育センターが外国人に対する日本語教育を提供する機関であると同時に、その活動を通して本学で学ぶ日本人学生への学びを提供できる可能性を感じることができた。

当日の成果は冊子体『シリーズ 新しい日本語教育を考える 12』として刊行した。

7. 日本語教育センターニュースレター発行報告

昨年度に引き続き「日本語教育センターニュースレター」を発行した。今年度の授業形態が全面的にオンライン授業だったことから、紙媒体にはせず、すべてオンラインで配信した。スピーチコンテストや日本語クラスの紹介、留学生向けのグローバル教養副専攻について特集を組んだ。また、学内教職員の協力をえて、留学生へのメッセージを積極的に発信した。詳細は日本語教育センターホームページ

<https://cjle.rikkyo.ac.jp/newsletter/>

を参照されたい。

8. 短期日本語プログラム報告

昨年度の検討（オンラインでの実施、対面で計画しているものについても社会状況を見ながらオンラインでの実施に切り替える対応）をふまえ、短期日本語プログラムは、夏期はオンライン、冬期は対面実施とした。また、秋期については、シドニー大学の送り出しの状況が整わず、実施を見送った。

【春学期】

1 プログラム概要

1) 開催期間

2022年度夏期①【オンライン】6月13日(月)～6月22日(水)

2022年度夏期②【オンライン】7月11日(月)～7月20日(水)

2) 開催場所

【オンライン】: Zoom 方式により設定

3) コースデザイン

【オンライン (夏期①②)】

単位数: 1 単位 (1,500 分)

* 単位数内訳: 日本語科目 1 単位(1,500 分) 50 分×30 回

4) 開講クラス

【オンライン (夏期①)】

2 クラス(入門 Beginner Class・初中級 Elementary Class)

【オンライン (夏期②)】

2 クラス(入門 Beginner Class・初中級 Elementary Class)

2 実施詳細

【オンライン（夏期①）】

1) 参加学生 4名

協定校の区分は 2022 年 9 月現在

	大学間協定校	学部間協定校
授業料免除枠 での参加 (1名)	リヴァプール大学 1名	
私費での参加 (3名)	ライデン大学 2名 嶺南大学 (GLAP) 1名	

2) 学内の協力

クラス ボランティア	文学部 2名、経済学部 1名、経営学部 1名、観光学部 2名、 社会学部 3名、法学部 3名、異文化コミュニケーション学部 4 名 計 16名
事務	国際センター、教務事務センター、人事部、財務部、メディアセン ター

【オンライン（夏期②）】

1) 参加学生 17名

協定校の区分は 2022 年 9 月現在

	大学間協定校	学部間協定校
授業料免 除枠 での参加 (1名)		ケンブリッジ大学 (文学部) 1名
私費での 参加 (16名)	香港中文大学 8名 華東師範大学 6名 ヴェローナ大学 1名 パジャジャラン大学 1名	

2) 学内の協力

クラス ボランティア	文学部 5名、経済学部 2名、経営学部 3名、観光学部 1名、 法学部 2名、異文化コミュニケーション学部 2名 計 15名
事務	国際センター、教務事務センター、人事部、財務部、メディアセン ター

3 成果

- ・ 本学への留学パターンの多様化の促進
- ・ 協定校とのインバランスの解消、関係強化
- ・ オンラインという形態でのプログラムの発展
- ・ 時差への対応（夏期①は日本時間の午後に実施しヨーロッパの学生の参加へと繋がった）
- ・ 多様な日本語レベルに対する柔軟な受け入れ態勢
- ・ 本学学生との国際交流の促進

国際センター協力のもとグローバルラウンジ企画と連携し、以下のイベントを行った。
それぞれのイベントの短プロ生と国内学生の参加者数は、以下の図の通り。

【オンライン（夏期①）】

イベント名称	短プロ生 参加者数	立教生 参加者数	合計参加者数 (延べ人数)
Daruma Origami（6月15日実施）	4	5	9
参加延べ人数	4	5	9

【オンライン（夏期②）】

イベント名称	短プロ生 参加者数	立教生 参加者数	合計参加者数 (延べ人数)
Make a wish for Tanabata（7月13日実施）	14	10	24
参加延べ人数	14	10	24

4 今後の課題

- ・ プログラム案内周知、広報の強化（授業料免除枠の有効活用）
- ・ 立教生への短プロ周知強化（イベント案内等）
- ・ オンラインのプログラム期間の検討
- ・ オンラインプログラムの適切な実施時期（夏期①（6月）に集まりにくい傾向がある）
- ・ イベント実施回数および内容の事前すり合わせ

- ・ Zoom ログイン (V-Campus ID 使用) の簡略化
- ・ 電子教科書使用開始の簡略化

5-1 授業 (夏季①)

日本語クラス 1 (入門)

授業担当者名：神元、長谷川、藤田、嶋原

履修者数：3名

使用教材：『まるごと一日本のことばと文化—〈入門 A1 りかい〉』、独自教材

日本語クラス 2 (初中級)

授業担当者名：金庭、高嶋、小森、神元

履修者数：1名

使用教材：『まるごと一日本のことばと文化—〈初中級 A2/B1〉』、独自教材

春学期の短期プログラム (夏1) は、オンラインで実施し、4名が受講した。日本語クラスは2クラス体制で8日間の短いコースで行われた。

クラス1は、日本語学習歴のない学生対象のクラスとし、3名に対し授業を行った。今年度より電子テキストを初めて使用した。『まるごと〈入門 A1〉』のテキストでは、トピック2と3を扱い、日常会話の指導を行った。また、独自教材を用いてひらがなの導入を行った。

クラス2は、既習者で、対象者は1名のみだった。1クラス同様、初めて電子テキストを使用し、『まるごと一日本のことばと文化—〈初中級 A2/B1〉』を用いて、指導を行った。テキストは、トピック3, 4, 5を扱い、日常会話の指導を行った。

最終発表では、1, 2クラス合同で行った。クラス1は自己紹介を行うとともに、私の家族、私の好きな物、私の好きな場所の3つのトピックの中から1つ選びスピーチした。クラス2は、自己紹介を行うとともに私の国の観光についてスピーチをした。両クラスともスピーチの後で、聴衆に対して質問をしたり、聴衆から質問を受けたりした。

なお、プログラム8日間のうち5日に日本語ボランティアを依頼し、各クラスに2名から4名の参加があり、たくさんのリアルな会話を行うことができ、受講生も満足できたと思う。

Zoom への接続が上手くいかない学生もいたが、少人数だったこともあり、個別対応も可能であり予定したプログラムを全て行うことができた。

今回より Google シートを使って教員の授業記録を共有したが、非常に便利だった。また、学生のスピーチのスク립トも Google ドキュメントを使用した。学生への添削指導に非常に役にたった。オンラインで得た知識は今後も活用したい。

5-1 授業（夏季②）

日本語 1 クラス（入門）

授業担当者名：三浦、長谷川、藤田、嶋原

履修者数：7名

使用教材：『まるごと—日本のことばと文化—〈入門 A1 りかい〉』、独自教材

日本語 2 クラス（初中級）

授業担当者名：神元、金庭、小森

履修者数：10名

使用教材：『まるごと—日本のことばと文化—〈初中級 A2/B1〉』、独自教材

春学期の短期プログラム（夏2）は、オンラインで実施し、17名が受講した。日本語クラスは夏1と同様、2クラス体制で8日間の短いコースで行われた。

クラス1は、日本語学習歴のない学生対象のクラスとし、7名のクラスで行った。『まるごと〈入門 A1〉』の電子テキストでは、トピック2と3を扱い、日常会話の指導を行った。また、独自教材を用いてひらがな未習の学生にはひらがなの導入、既習の学生には漢字の導入を行った。その際、ブレイクアウトルームを用い、対応した。オンライン学習のため、キーボードの設定の確認を行った。最終発表は自己紹介を行うとともに、私の家族、私の好きな物、私の好きな場所の3つのトピックの中から1つ選びスピーチした。日本語ボランティアは8日間のうち5日間参加し、スピーチのサポートなど多めに活躍した。

クラス2は、既習者で、10名が受講した。『まるごと—日本のことばと文化—〈初中級 A2/B1〉』の電子テキストを用いて、指導を行った。テキストは、トピック3、4、5を扱い、日常会話の指導を行った。最終発表では、クラス2は、自己紹介を行うとともに私の国の観光についてスピーチをした。このクラスには日本語能力試験のN1を取得している学生が2名おり、レベル差を考慮した授業を行う必要があったが、プラスアルファの教材を用意し、日本語ボランティアの協力を得て、レベルの高い学生の要望にも応えつつ、授業を運営することができた。

両クラスの課題は、8日間の短い期間だと、欠席や遅刻は大きく評価に関わるという点である。オンラインの接続の問題もあるが、欠席をしないように促す必要がある。

【秋学期】（冬期プログラム）

1 実施の概要

1) 開催期間

2023年1月10日(火)～1月27日(金)

*チェックイン：1月9日(月)、チェックアウト：1月28日(土)

2) 開催場所

新座キャンパス (宿舎：デイリーホテル新座店・デイリーホテル志木店に滞在) *一部池袋で実施した講義有。

3) コースデザイン

①単位数：4単位 (4,300分 (71.3時間))

*単位数内訳：日本語科目 2単位(2,800分)50分×56回

日本文化社会講義・フィールドトリップ 2単位 (1,500分) 50分×30回

4) 開講クラス：2クラス(入門 Beginners Class・初中級 Elementary Class)

2 結果

1) 参加学生 22名

協定校の区分は2023年2月現在

	大学間協定校	学部間協定校
授業料免除枠での参加 (7名)	マードック大学 3名、 オーガスタナ大学 (GLAP) 1名、 ランドルフ・メーコン大学 (GLAP) 1名	同済大学 2名
私費での参加 (15名)	アベリストウィス大学 1名、オーガスタナ大学 (GLAP) 3名、ギリシャ・アメリカン大学 (GLAP) 1名、トリニティ・カレッジ (GLAP) 1名、ニューサウスウェールズ大学 2名、ボン大学 1名、ライデン大学 3名、ランドルフ・メーコン大学 (GLAP) 1名、RMIT オーストラリア校 2名	

2) 学内の協力

学部 (文化社会講義)	文学部、社会学部、異文化コミュニケーション学部
部活・サークル	体育会テニス部
講義・フィールドトリップ通訳	RiCoLaS (異文化コミュニケーション学部の翻訳・通訳者養成プロジェクト)
クラスボランティア	文学部 1名、経済学部 1名、観光学部 6名、コミュニティ福祉学部 3名、経営学部 1名、現代心理学部 4名、キリスト教学研究科 1名 計 17名
学生サポーター (住み込み・入寮サポート・フィールドトリップ引率、グローバ	文学部 8名、経済学部 1名、社会学部 3名、法学部 2名、観光学部 5名、コミュニティ福祉学部 2名、経営学部 1名、現代心理学部 3名、GLAP 1名 計

ルラウンジイベント発表など)	27名
事務	国際センター、メディアセンター、新座8号館講師控室、図書館、保健室、教務事務センター、学生部、人事部、総務部、財務部

3 成果

- ・ 本学への留学パターンの多様化の促進
- ・ 協定校とのインバランスの解消、関係強化
- ・ 本学学生との国際交流の促進
- ・ with コロナの時代での短期日本語プログラムのニーズの確認
- ・ 前回に引き続き、国際センター協力のもとグローバルラウンジ企画と連携し、以下のイベントを行った。それぞれのイベントの短プロ生と国内学生の参加者数は、以下の図のとおり。

イベント名称	短プロ生 参加者数	立教生 参加者数	合計参加者数 (延べ人数)
日本文化についてのプレゼンテーション(日本舞踊)	12	6	18
お正月遊び	14	9	23
日本語カフェ	17	3	20
体育会テニス部との交流 (新座キャンパスで実施)	8	4	12
参加延べ人数	51	22	73

4 今後の課題

- ・ プログラム案内周知、広報の強化（授業料免除枠の有効活用）
- ・ 立教生への短プロ周知強化（イベント案内等）
- ・ 来日前の情報提供の徹底、来日時フライト情報の管理
- ・ 入寮時の対応、学生サポーター、宿舎先との連携
- ・ イベント実施回数および内容の事前すり合わせ、充実化
- ・ 学内フィールドトリップ実施の検討
- ・ 事務局のプログラム期間中の体制
- ・ 学生サポーターの安定化・継続性⇒組織化
- ・ 受入学生の管理（門限、宿舎規則・ルール（ごみ処理）などの徹底周知）
- ・ 新型コロナウイルス感染症対策の強化

5 授業

日本語クラス1（入門）

授業担当者名：武田、藤田、高嶋、末松、佐々木

履修者数：10名

使用教材：『まるごと一日本のことばと文化—〈入門 A1 りかい〉』、独自教材

日本語クラス2（初中級）

授業担当者名：金庭、長谷川、栃木、井上、小澤

履修者数：12名

使用教材：『まるごと一日本のことばと文化—〈初中級 A2/B1〉』、独自教材

クラス1は、10名が受講した。3名は既習者であり、文字と簡単な表現の学習の経験がある学生であった。授業では、独自教材を用いた文字学習と、『まるごと一日本のことばと文化—〈入門 A1 りかい〉』の電子テキストを用いた表現練習を行った。文字学習の時間は、レベル差に配慮し、入門者に対してはひらがなの導入、既修者にはひらがなの復習とカタカナ学習を行うようにした。表現練習では、レベル差はあまり見られなかったため、同時に導入を行い、文作成など産出する活動時にのみ、ひらがな・カタカナの使用と、ローマ字の使用に分けるようにした。入門レベルの学生は、既習者から刺激を受けたようで、プログラム後半には、ローマ字の使用はあまり見られず、ひらがなの読み書きと表現の習得が進んでいた。クラス内のレベル差があることは、短期日本語プログラムの課題として毎回挙がっているが、今期においては学習動機につながったようである。最終発表では、日本語による自己紹介と、英語による文化社会講義のトピックの発表を行った。自己紹介部分は、日本語でのスライド作成と発表を課したが、文字と表現の学習が進んでいたため、負担なく準備が進み、それぞれのレベルに合った学習成果を発表することができた。

クラス2は、既習者で、12名が受講した。『まるごと一日本のことばと文化—〈初中級 A2/B1〉』の電子テキストを用いて、指導を行った。テキストは、トピック3、4、5、6、8を扱い、日常会話の指導を行った。3週間の間に各トピックが終わるごとに例文づくりの宿題を出し、漢字や表現についてのクイズを実施した。このクラスはレベル差はさほどなく、既習者であっても、会話や作文などの産出は苦手な学生もおり、レベルとしては合っていたと思われる。3週間の間に5回日本語ボランティアの参加があり、対面での日本語会話を練習することができ、会話の苦手意識を克服できたと思われる。最終発表では、自己紹介を行うとともに日本文化社会講義のトピックから自分で調べて発表した。日本語でのプレゼンテーションが初めての学生が全員で、発表スライドを作るまでは大変だったが、全員十分に準備して発表することができ、達成感があったと思われる。今回、プレゼンテーションのクリプトやスライドを作成する際、Google ドキュメントやGoogle スライドを利用して、教員と共有し添削しながら行ったが、短い時間での作業に欠かせないツールであったと思

う。オンラインで学んだことが対面でも利用できてよかった。

日本文化社会講義

授業担当者名：佐々木、小澤、武田、金庭、長谷川、藤田、末松、井上
履修者数：22名
使用教材：独自教材

2023 冬の日本文化社会講義は、テーマ 1「日本における放送の発展と放送文化」（社会学部、井川充雄先生）、テーマ 2「武士、サムライとは何か？：日本史における虚像と実像」（文学部、佐藤雄基先生）、テーマ 3「Poetry and Language: Transborder Memories of a Rikkyo Student Yun Dong-ju」（異文化コミュニケーション学部、イヒヤンジン先生）の 3 つのテーマで行われた。

フィールドトリップとして、テーマ 1 は NHK 放送博物館、テーマ 2 は石神井公園（石神井城跡周辺）、イメージフォーラムを訪問した。

学生の興味関心の分野は多様であるが、本学の学部教員が設定した 3 つのテーマは、どの学生にとっても関心をひき、事前学習、講義、フィールドトリップ、事後活動のすべての活動に非常に熱心に参加していた。日本語教員が行う事前学習と事後活動は、以前よりも教師間の連携を強化したことにより、担当教師全員がそれぞれの活動のつながりを意識して授業を運営することができた。

文化社会講義では、以前よりリアクションペーパーの提出と返却の方法が煩雑であることが課題として挙げられていたが、Google フォームへの記入に切り替えたことにより、この課題が解決された。また、講義を担当する学部教員と、事前・事後学習を担当する日本語教員への共有もスムーズに行えるようになり、学生が記述した質問や感想をその後の活動に活かせるようになった。

文化社会講義の活動は、通常の日本語科目とは活動内容が異なるため、運営方法についての課題が常に挙がっていたが、教師間の連携強化と、使用するツールの変更により、その多くが解決できたと思われる。これは、授業の質と学生の学習成果の向上にもつながることであるため、今期の運営方法を参考にして、よりより方法を検討していきたい。

9. 新型コロナウイルス対応まとめ

2022年度は、授業も対面に戻り、プレイスメントテスト等は、春学期のみオンライン対応を行ったのみで、秋学期は通常の対面形式のプレイスメントテストを実施した。

また、授業運営については、コロナウィルス感染症に罹患、あるいは本学の入構制限により授業に出席できない学生に対してはハイブリッド対応を行った。

特別外国人学生に対しては、国際センター担当者とも情報を共有しながら学生が混乱しないよう対応を行った。

10. センター員活動報告

日本語教育センターセンター員 教育研究業績一覧

池田伸子

研究論文

1. 「オンラインによる日本語学習支援活動の事前学習に関する研究―連想法による分析を通して―」『日本語・日本語教育』第6号、立教大学日本語教育センター、2023年、1-17頁

報告

1. 「日本語相談室学生アドバイザーの学びの変容」(藤田恵、金庭久美子、小松満帆、任ジェヒ、小林友美、数野恵理、鹿目葉子、丸山千歌との共同執筆)『日本語・日本語教育』第6号、立教大学日本語教育センター、2023年、131-146頁

研究助成

1. 2021.4～至現在 科学研究費助成金(基盤研究(C))「大学日本語教育質保証を担う評価人材育成:発展的評価を实践できる日本語教師への研修」(研究分担者)(課題番号:21K0063)

丸山千歌

著書

1. 『新界標日本語 第1冊 改訂版』(徐敏民と共同主編)、復旦大学出版社

研究論文

1. 「日本語学習者の人生の径路に表れる日本との接触ー日本に住み、働きつづける日本留学経験者 E の場合ー」(小澤伊久美との共同執筆)『日本語・日本語教育』第 6 号、立教大学日本語教育センター、2023 年、19-38 頁

報告

1. 「日本語相談室学生アドバイザーの学びの変容」(藤田恵、金庭久美子、小松満帆、任ジェヒ、小林友美、数野恵理、鹿目葉子、池田伸子との共同執筆)『日本語・日本語教育』第 6 号、立教大学日本語教育センター、2023 年、131-146 頁

研究発表

1. 「ポスト・コロナを見据えた日本語・日本文化授業の実践の広がり」、The 4th International Conference on Japanese Studies, Language and Education、インドネシア日本語教育学会、オンライン開催、2022 年 10 月 22 日 (基調講演)
2. 「立教大学異文化コミュニケーション学部におけるモンゴルとの教育交流の意義ー日本語教育の取り組みとインターンシップ・プログラムの観点からー」、第 6 回日本モンゴルシンポジウム (日本・モンゴル外交関係樹立 50 周年記念国際シンポジウム、モンゴル文化教育大学・桜美林大学シンポジウム 10 周年) 日本とモンゴルー過去・現在・未来ー、於桜美林大学。2022 年 11 月 22 日 (招待発表)

その他

1. 「異文化コミュニケーションと多文化共生を推進するために」、目黒シルバー大学、2022 年 5 月 11 日 (招待講演)

研究助成

1. 2020. 4~至現在 科学研究費助成金 (基盤研究 (C)) 「「日本とつながって生きる」選択から見える日本語教育の新時代」(研究代表者) (課題番号: 20K00707)
2. 2021. 4~至現在 科学研究費助成金 (基盤研究 (C)) 「大学日本語教育質保証を担う評価人材育成: 発展的評価を実践できる日本語教師への研修」(研究分担者) (課題番号: 21K0063)

数野恵理

研究論文

1. 「日本語母語話者教師による日本語ナラティブ作文の評価観点の違いークラスター分析の結果からー」(坪根由香里・トンプソン美恵子・影山陽子との共同執筆)、『社会言語科学』、第 25 巻第 1 号、社会言語科学学会、2022 年、214-229 頁

報告

1. 「日本語母語話者教師・非母語話者教師がナラティブ作文評価で重視する項目－評価項目の重視度比較と順位決め自由記述の分析－」（トンプソン美恵子・影山陽子・坪根由香里との共同執筆）、『日本語教育』、183号、日本語教育学会、2022年、1-17頁
2. 「日本語相談室学生アドバイザーの学びの変容」（藤田恵、金庭久美子、小松満帆、任ジェヒ、小林友美、鹿目葉子、丸山千歌、池田伸子との共同執筆）、『日本語・日本語教育』第6号、立教大学日本語教育センター、2023年、131-146頁

研究助成

1. 2019.4～至現在 科学研究費助成金（基盤研究（B））「日本語ライティングにおけるナラティブの Good Writing 探究と評価法の開発」（研究分担者）（課題番号:19H01274）

金庭久美子

研究論文

1. 「メール文に見られる条件表現「なら」の使用について－メールの発信・返信別に注目して－」（金蘭美との共同執筆）、『ときわの杜論叢』第9号、横浜国立大学国際教育センター、2022年、1-16頁
2. 「メール文に見られる用件の切り出し方の比較－タスクの種類および使用表現に注目して－」（金蘭美、金玄珠との共同執筆）、『日本語教育研究』Vol. 59、韓国日語教育学会、2022年、105-117頁
3. 「ドイツ語母語話者のメール文における配慮表現の使用」、『ヨーロッパ日本語教育報告・発表論文集 第24回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム』、ヨーロッパ日本語教師会、2022年、652-657頁

報告

1. 「日本語相談室学生アドバイザーの学びの変容」（藤田恵、小松満帆、任ジェヒ、小林友美、数野恵理、鹿目葉子、丸山千歌、池田伸子との共同執筆）、『日本語・日本語教育』第6号、立教大学日本語教育センター、2023年、131-146頁

研究発表

1. 「円滑なコミュニケーションを行うための一手段－メール文に見られる共有情報を示す表現を例として－」（金蘭美との共同発表）、ポスター発表、第25回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム（ヨーロッパ日本語教師会）、オンライン及び対面開催、2022年8月26日
2. 「作文支援システム「さくら」の開発－フィードバック方法の改善－」（金蘭美との

共同発表)、ポスター発表、第 60 回日本語教育方法研究会、於東京工業大学大岡山キャンパス、2023 年 3 月 19 日 (予定)

研究助成

1. 2019. 4～至現在 科学研究費助成金 (基盤研究 (C)) 「初級から学べる段階別学習型作文支援システムの構築」(研究分担者) (課題番号: 19K00734)

藤田恵

報告

1. 「多様な背景をもつ学習者がともに学ぶための教室づくり一点字を使用する学習者への日本語授業を体験してみようー」(河住有希子、秋元美晴、中西溪、庄麗との共同発表) 2022 年度日本語教育学会秋季大会 交流ひろば出展、オンライン開催、2022 年 11 月 26 日
2. 「日本語相談室学生アドバイザーの学びの変容」(金庭久美子、小松満帆、任ジェヒ、小林友美、数野恵理、鹿目葉子、丸山千歌、池田伸子との共同執筆)、『日本語・日本語教育』第 6 号、立教大学日本語教育センター、2023 年、131-146 頁

その他

1. IAVI 日本語サポート研究会
<https://www.iavi.jp/news/secretariat/301.html>
視覚に障害のある日本語学習者 (海外、国内) のサポートを目的として発足。社会福祉法人国際視覚障害者援護協会 (<https://www.iavi.jp/>)、日本語教育関係者、視覚特別支援学校の教員と共に運営。
2. 「日本語点字音声ガイド」
<https://www.youtube.com/@Braille-JSL> (Braille-JSL)
現在、日本語パイロット版を公開。2022 年度に日本語本公開予定。以降、中国語版をはじめとした多言語展開予定。

研究助成

1. 2021. 4～至現在 科学研究費助成金 (基盤研究 (C)) 「グローバル化時代における視覚特別支援教育と日本語教育の有機的連携に向けた基盤構築」(研究分担者) (課題番号: 21K02727)

任ジェヒ

著書

1. 「白書を読む教材の作成」(山本晃彦・任ジェヒ・吉本由美) 『日本語コミュニケーション』

ョンのための読解教材の作成』(野田尚史・桑原陽子(編))、ひつじ書房、2022年11月(第4部第3章分担執筆)

研究論文

1. 「日本語学習者におけるバリエーションの理解—人称表現のスタイル切り替えに対する理解を例に—」『日本語・日本語教育』第6号、立教大学日本語教育センター、2023年、39-57頁

報告

1. 「実態調査からみた日常的個別概念としての「丁寧さ」、『待遇コミュニケーション研究』第20巻、待遇コミュニケーション学会、2023年(印刷中)
2. 「日本語相談室学生アドバイザーの学びの変容」(藤田恵、金庭久美子、小松満帆、小林友美、数野恵理、鹿目葉子、丸山千歌、池田伸子との共同執筆)、『日本語・日本語教育』第6号、立教大学日本語教育センター、2023年、131-146頁

研究発表

1. 「待遇コミュニケーションにおける「丁寧さ」を考える」(アドゥアヨム・アヘゴ希佳子、李址遠、徳間晴美、蒲谷宏との共同発表)、待遇コミュニケーション学会2022年秋季大会(第37回)15周年記念大会、オンライン開催、2022年10月22日

研究助成

1. 2020.4~至現在 科学研究費助成金(若手研究)「日本語学習者の多様な言語生活に対応したバリエーション教育開発のための基礎研究」(研究代表者)(課題番号:20K13092)

鹿目葉子

著書

1. 「『下町ロケット』で学ぶ!12の社会人基礎力」(大橋真由美、榎原実香との共同執筆)、くろしお出版、2023年2月

研究論文

1. 「タイ中等教育機関における「読解力」育成に向けた新たな日本語授業の提案—PISA調査の読解力の観点から—」(大橋真由美、山本由美子との共同執筆)『日本語・日本語教育』、第6号、立教大学日本語教育センター、2023年、59-77頁

大会発表論文集

1. 「A Proposal of the Japanese Classes to Develop the Assessment and Teaching of 21st Century Skills for Thai Secondary Educational Institutes— From Business Japanese Classes at a University in Thailand—」(大橋真由美、ムニ
ンタラウォン・シリワン、山本由美子との共同執筆)『Proceedings of the 16th JSAT
Annual Conference 2022』、Japanese Student Association of Thailand、2022年12
月、<https://www.jsat.or.th/proceedings/>

研究発表

1. 「ข้อเสนอในการจัดการเรียนการสอนภาษาญี่ปุ่นเพื่อพัฒนาทักษะแห่งศตวรรษที่ 21」(ムニ
ンタラウォン・シリワン、山本由美子、大橋真由美の共同発表) 2022年度タイ日本人学生会
-Japanese Student Association of Thailand、於 zoom、2022年11月16日
2. 「ビジネス日本語教材『下町ロケット』で学ぶ、12の社会人基礎力の紹介」(大橋真
由美との共同発表) 2022年度タイ国日本語教育研究会 第35回年次セミナー、2022
年3月18日(発表予定)

報告

1. 「日本語相談室学生アドバイザーの学びの変容」(藤田恵、金庭久美子、小松満帆、
任ジェヒ、小林友美、数野恵理、丸山千歌、池田伸子との共同執筆)、『日本語・日本
語教育』第6号、立教大学日本語教育センター、2023年、131-146頁

小林友美

研究論文

1. 「大学生の初対面会話における日本語母語話者と韓国人日本語学習者の話題選択と話
題展開」『日本語・日本語教育』第6号、立教大学日本語教育センター、2023年、79-
92頁

研究発表

1. 「初対面会話における日本語母語話者と韓国人日本語学習者の話題管理と参加意識—
大学生の交流場面の会話を対象に—」韓国語日文学会 2022年冬季学術大会、サイ
バー韓国外大&ZOOM(ハイブリット式)、2022年12月17日

報告

1. 「日本語相談室学生アドバイザーの学びの変容」(藤田恵、金庭久美子、小松満帆、
任ジェヒ、数野恵理、鹿目葉子、丸山千歌、池田伸子との共同執筆)、『日本語・日本
語教育』第6号、立教大学日本語教育センター、2023年、131-146頁

研究助成

1. 2020. 4～至現在 科学研究費助成金（若手研究）「相互作用を意識した会話教育のための教材開発」（研究代表者）（課題番号：20K13089）

小松満帆

報告

1. 「日本語相談室学生アドバイザーの学びの変容」（藤田恵、金庭久美子、任ジェヒ、小林友美、数野恵理、鹿目葉子、丸山千歌、池田伸子との共同執筆）、『日本語・日本語教育』第6号、立教大学日本語教育センター、2023年、131-146頁

研究発表

1. 「『アテレコ・ワークショップ』の試みーアニメを活用した授業の一案としてー」、ポスター発表、第60回日本語教育方法研究会、於東京工業大学大岡山キャンパス、2023年3月19日（予定）

11. 2022年度FD記録

1. FD委員会の開催日

第1回 7月 22日 第2回 9月 1日
第3回 2月 17日 第4回 3月 1日

第1回、第3回では、下記に示した22年度の課題について現状報告に基づき、意見交換を行った。また、第2回、第4回では、兼任講師も含めて日本語教育センターの授業運営について協議を行った。

2. 2022年度の課題の達成状況

課題1：NEXUS日本語「専門の日本語」

RSP事業の1つであるNEXUSプログラムへの学生受入が22年9月よりスタートし、4名の学生を迎えた。NEXUS学生のための日本語コースは、半期で10単位を履修するという設計で開発されており、コース全体のゴールとしては、学生がコース終了後に各学部での専門の学びに入っていけるだけの日本語力を習得させることとなっている。

NEXUSプログラムのための日本語コースの中に、各学生の所属する学部から推薦された図書を教材として学んでいく「専門の日本語」クラスが週1回設置されているが、22年度はこのクラスをFDの対象として取り上げ、第1回及び第3回のFD委員会において協

議を行った。

本クラスは、学部からの推薦図書を用いて日本語教育センターが教材を作成し、さらにチューターとも共同しながら学びを進める方法をとっている。FD の場では、作成した教材のよかった点、改善が必要な点などが共有され、今後の改善へと結びつけた。また、現在は学生数が4名と少ないため、チュートリアル形式で授業が展開できているが、今後、学生数が増えた場合についての授業の方法などについても協議を行った。

課題2：日本語相談室拡充に伴う学生アドバイザーの活用

TGU 展開に伴う留学生増に対応すべく、2022 年度より日本語相談室の相談員として学生アドバイザーを活用することとなった。22 年度春学期については、春学期秋学期ともに学生アドバイザー2名の体制でスタートしたが、広報活動にも関わらず春学期の利用はゼロであった。第1回のFD委員会では、さらなる広報の方法について意見交換を行い、正規学部生が履修している科目などでチラシを配布するなどを行った。秋学期は、NEXUS の学生が入学してきたため、彼らが履修する全カリ総合科目における活用を促し、秋学期については学生アドバイザー枠の活用が活発となった。

今後は、学生アドバイザー枠の活用をさらに正規学部留学生に周知していくための広報活動に力を入れていくことなどについて、第3回のFD委員会で意見交換を行うとともに、学生アドバイザーの管理体制、教育体制についても意見交換を行った。学生アドバイザーを経験した学生が、研修、実際のアドバイジング活動を経て成長していることも見えてきたことから、23 年度においてはさらにアドバイザーを増やしての運用を目指すことが共有された。

3. 2023 年度の課題と計画

課題1：PEACE 日本語プログラム

23 年度春学期には PEACE プログラムの学生が入学してくるため、PEACE 日本語1～3のコースデザイン、23 年度入学者のための特別措置 PEACE 日本語4～8科目について取り上げる。

課題2：NEXUS 日本語プログラム

2 年目も継続して当該プログラムを取り上げる。

課題3：日本語相談室拡充

2 年目も引き続き学生アドバイザー枠の活用について取り上げる。

2022 年度 日本語教育センター運営体制

運営会議

センター長	：池田 伸子	(異文化コミュニケーション学部教授)
副センター長	：石川 巧	(センター長指名による、文学部教授)
運営委員	：井川 充雄	(全学共通カリキュラム運営センターコア会議から、社会学部教授)
運営委員	：杜 国慶	(国際センターから観光学部教授)
運営委員	：舛谷 鋭	(総長指名による、観光学部教授)

実務委員会

センター長	：池田 伸子	(異文化コミュニケーション学部教授)
副センター長	：石川 巧	(文学部教授)
センター員	：丸山 千歌	(異文化コミュニケーション学部教授)
センター員	：金庭 久美子	(特任准教授)
センター員	：藤田 恵	(特任准教授)
センター員	：数野 恵理	(特任准教授)
センター員	：小林 友美	(教育講師)
センター員	：任 ジェヒ	(教育講師)
センター員	：小松 満帆	(教育講師)
センター員	：鹿目 葉子	(教育講師)
事務局	：吉田 友子	
事務局	：鈴木 洋介	
事務局	：澤野 礼奈	
事務局	：宮本 杏子	

兼任講師

井上 玲子	谷 啓子
黄 慧	富倉 教子
川端 芳子	長島 明子
小森 由里	長谷川 孝子
斉藤 紀子	東平 福美
佐々木 藍子	保坂 明香
沢野 美由紀	平山 紫帆
高嶋 幸太	三浦 綾乃
武田 聡子	山内 薫

森井 あずさ
栃木 亜寿香
泉 大輔

佐々木 瑛代
末松 史

2022 年度日本語教育センター会議開催記録

月	日	
4	15	第1回実務委員会
	20	第1回運営委員会
5	20	第2回実務委員会
	25	第2回運営委員会
6	17	第3回実務委員会
	22	第3回運営委員会
7	22	第4回実務委員会
	27	第4回運営委員会
9	23	第5回実務委員会
	28	第5回運営委員会
10/11	10/28	第6回実務委員会
	11/9	第6回運営委員会
	2	第7回実務委員会
12	7	第7回運営委員会
1	27	第8回実務委員会
2	17	第9回実務委員会
2	20	第8回運営委員会

実務委員会：センター長、副センター長、センター員（日本語担当専任教員、日本語担当教育講師、センター長指名教員）、事務局

運営委員会：センター長、副センター長、全学共通カリキュラム運営センターコア会議からの選出委員、国際センター長・副センター長からの選出委員、センター員（センター長指名）日本語担当専任教員（陪席）、事務局（陪席）

2022 年度日本語教育センター活動報告
CJLE Program & Activity Reports (2022)
2023 年 3 月発行

編集兼発行者 日本語教育センター
発行責任者 池田伸子
発行所 立教大学日本語教育センター
〒171-8501 東京都豊島区西池袋 3-34-1
Tel: 03-3985-4202